263.7
41

始

454-79

THE TEACHING METHOD OF HOUSEHOLD SCIENE AND ART.

家事教授法

奈良女子高等師範學校教授
石澤吉磨
著

東京
集成堂發行

263.7-41

家事教授法

目次

第一篇　緒論

第一章　家事教授法研究の必要……一
第二章　家事科の設置に關する歴史的回顧……一二
第一節　家事科の名稱……一二
第二節　家事科設置の概説……一四
第三節　米國の狀況……一七
一　發達の歴史……一七
二　現在の狀況……二一
三　州立大學……二三
四　州立農科大學……二四
五　私立大學……二四
六　中等學校……二五
七　特別研究所……二六
八　教員養成所……二八
九　專門教育所……二九
第四節　英國の狀況……三〇
一　エングランド……三〇
二　ウエールス……三二
三　スコットランド……三三
四　アイルランド……三三
第五節　獨國の狀況……三五
第六節　佛國の狀況……三六
第七節　我が國の狀況……三八
一　高等女學校……三八
二　實科高等女學校……四〇
三　女子師範學校……四一
四　小學校……四二

大正
5. 7. 14
内交

第二篇　目的論

第一章　家事科の範圍……四五

第一節　外國に於ける家事科の範圍……四五
一　概説……四五
二　小學校……四八
三　中等學校……四九
四　大學……五一
五　師範學校……五二
第二節　我が國に於ける家事科の範圍……五四
一　小學校……五四
二　高等女學校……五八
三　實科高等女學校……五九
四　女子師範學校……六〇
第三節　家事科の範圍に對する斷案……六二
一　範圍を斷定するの必要……六二
二　家事科の對象……六九
三　範圍の斷案……七一

第二章　家事教授の教育的効果……八八

第一節　家庭生活に對する吾人の態度……八九
第二節　教育的効果に關する吾人の見解……九五
一　効果の二方面……九五
二　實質的陶冶方面より見たる効果……九七
三　形式的陶冶方面より見たる効果……一〇六
四　効果に對する結論……一一〇

第三章　家事教授の目的……一一二

第一節　目的に關する歴史的回顧……一一二
第二節　教則に示されたる家事科の要旨……一一九
一　要旨を明にするの必要……一一九
二　教則上の要旨……一二一
三　要旨の解釋……一二一
第三節　家事教授の目的に對する斷案……一二六
一　知的方面より見たる目的……一二七
甲　實質的陶冶上の目的……一二七
乙　形式的陶冶上の目的……一四〇
二　情的方面より見たる目的……一五九
第四節　家事教授の論點に對する批判……一七六
一　實質的陶冶か形式的陶冶か……一七七
二　理論主義か實用主義か……一八六

第三篇　教材論

第一章　教材の選擇……一八九

第一節　家事教材選擇の必要……一八九
第二節　家事教材選擇の要件……一九二
一　家庭の日常生活上必須なるものを選ぶ可し……一九二
二　境遇に適切なるものを選ぶ可し……一九九
三　理解に適し興味を感ぜしめ得るものに限る可し……二一〇
四　少數の基本的代表的のものに限る可し……二一四

第二章　家事教授要目……二一六

第一節　外國に於ける家事教授要目……二一六
第二節　我が國に於ける家事教授要目……二一八
一　高等小學校……二一八
二　高等女學校……二二九
三　實科高等女學校……二三七
四　女子師範學校……二三八

第三章　家事教材の排列……二四三

第一節　家事教材排列研究の必要……二四三
第二節　家事教材排列の要件……二四六
一　已知の事項より漸次未知の事項に及ぼす可し……二四七
二　具體的事項を先にし概括的抽象的事項を後にす可し……二四九
三　實習を伴ふ教材は成る可く先に排列す可し……二五〇
四　教材相互の關係によりて排列す可し……二五三
五　季節に應じて排列す可し……二五四
六　他教科目との連絡關係によりて排列す可し……二五五
第三節　教材排列の二模式……二六二
一　階段的排列法……二六三
二　圓周的排列法……二六六

第四章　家事教授細目……二六七

第一節　高等小學校……二六七
第二節　高等女學校……三三〇
第三節　實科高等女學校女子師範學校……三四八

第五章　家事教材の研究……三四八
第一節　教材研究の必要……三四八
第二節　教材研究の方法……三五二
一　基礎的方面……三五二
二　理論的方面……三五五
三　實驗的方面……三六一
四　實習的方面……三六五
第三節　教材研究用圖書……三六六
第六章　教材の整理……三七八
第一節　教材整理の必要……三七八
第二節　教材整理の要件……三八五
一　心理學的要求……三八七
二　論理學的要求……三八八
第三節　教材整理の方法……三八八
一　教材の取捨……三九一
二　教材の順序……三九四
三　教材の區分……四〇〇
四　實驗實習及び其他の教授方便物……四〇三
五　連絡事項……

第四篇　方法論

第一章　家事教授の特色……四〇八
第一節　科學上の概念を基礎とする事……四〇九
第二節　科學上の理法を基礎として思考せしむる事……四一一
第三節　實習によりて知識を技術化せしむる事……四一四
第二章　家事教授の缺陷と其救濟……四一七
第一節　家事教授の缺陷とは何ぞ……四一七
第二節　生徒なして研究者の位置に立たしむ可し……四一九
第三節　教師は指導者の位置に立つ可し……四二五
第四節　教師は技術に熟達し且之を客觀化せしむ可し……四二九
第三章　家事教授の方法……四三三
第一節　家事教授の順序……四三三
一　普通教授……四三四
二　實習教授……四三七

第二節　普通教授の復習及び豫備……四四五
一　復習……四四五
(一)　目的……四四五
(二)　時期……四四五
(三)　方法……四四六
二　豫備……四四九
(一)　目的……四四九
(二)　時期……四四九
(三)　方法……四五二
甲　復習的豫備……四五二
乙　經驗的豫備……四五九
三　目的指示……四六一
(一)　目的……四六一
(二)　時期……四六二
甲　全部目的指示……四六二
乙　部分目的指示……四六三
(三)　方法……四六七
第三節　普通教授の提示……四六八
一　目的……四六八
二　時期……四七〇
三　方法……四七一
甲　經驗的提示……四七一
(一)　時期……四七二
(二)　方法……四七三
乙　考察的提示……四八一
(一)　意義……四八一
(二)　時期……四八二
(三)　推理の樣式……四八八
(四)　要件……四九八
丙　實驗的提示……五〇〇
(一)　時期……五〇〇
(二)　方法……五〇一
丁　指導及び說明……五二六
(一)　指導及び其要件……五二七
(二)　說明及び其時期要件……五三五
第四節　普通教授の整理……五四三
一　目的……五四三
二　時期……五四三
三　方法……五四四
甲　復演……五四四
(一)　時期……五四五
(二)　要件……五四六
乙　比較統括……五五〇
(一)　時期……五五一

(二) 要件……五五一
丙 板書……五五六
(一) 必要……五五六
(二) 要件……五五八
丁 家事帳及び筆記帳の使用……五六三
(一) 必要……五六三
(二) 要件……五六三
戊 教科書讀解……五七七
第五節 普通教授の應用……五八二
一 目的……五八二
二 時期……五八三
三 方法……五八四
(一) 應用事項……五八四
(二) 取扱方……五八六
第六節 實習教授……五八七
一 豫備……五八七
二 提示……五八九
(一) 課し方……五九二
(二) 要件……五九五
(三) 指導……六〇三
三 整理……六〇八
(一) 批評……六〇八
(二) 反省……六一三
(三) 記載……六一五
第七節 準備及び後始末……六一六
一 準備……六一六
二 後始末……六二〇
第四章 家事教授の實例……六二三
第一節 高等小學校……六二四
第二節 高等女學校……六三〇
一 普通教授……六三〇
二 實習教授……六三四
第五章 校外教授……六三九
第一節 校外教授の必要……六三九
第二節 校外教授の方法……六四一
一 豫定……六四一
二 準備……六四四
三 教授……六四八
四 整理……六五〇

第五篇 設備論

第一章 特別教室……六五一

第一節 特別教室の必要……六五一
第二節 特別教室の種類……六五四
一 普通教授用特別教室……六五四
二 實習教授用特別教室……六五六
第三節 特別教室の設備……六五七
一 各室相互の關係……六五七
二 普通教授用特別教室……六五九
(一) 机及び腰掛……六五九
(二) 給水及び排水……六六一
(三) 瓦斯管又は他の加熱裝置……六六二
(四) 教卓及び黑板……六六二
(五) 通風室……六六四
(六) 天秤臺……六六五
三 實習教授用特別教室……六六六
甲 洗濯實習教室……六六六
(一) 水流場……六六七
(二) 竈場……六六七
(三) 給水及び排水……六六八
(四) 實習臺……六六八
(五) 教卓及び黑板……六六九
(六) 乾燥室及び物干場……六七〇
乙 割烹實習教室……六七一
(一) 水流場……六七一
(二) 料理臺……六七二
(三) 七輪竈等……六七二
(四) 配膳臺……六七二
(五) 教卓及び黑板……六七二
(六) 其他……六七三
四 機械標本室及び準備室……六七四
甲 機械標本室……六七四
乙 準備室……六七五

第二章 教具……六七七

第一節 教具の種類……六七八
一 普通教授用教具……六七九
(一) 實驗材料……六七九
(二) 實驗用具……六八二
(三) 機械及び器具……六八三
(四) 標本……六八四
(五) 模型……六八四

(六) 繪畫及び寫眞……六八五
二 實習教授用教具……六八八
(一) 實習材料……六八八
(二) 實習用具……六九一
第二節 教具の整理……六九一
一 教具室……六九一
二 標本及び模型……六九四
三 繪畫類……六九五
四 實驗及び實習用具……六九六
五 實驗及び實習材料……六九七
六 教具室……六九七

目次終

家事教授法

石澤吉磨著

第一篇 總論

第一章 家事教授法研究の必要

家事は一家の內政に關するあらゆる事項の總稱である、さて社會の人事現象を觀察すれば、實に複雜錯綜して居つて、恰も亂麻の如くに見ゆるけれども、これを詳細に考察すれば其間に一定の順序組織があつて秩序整然たる趣きのあることを發見することが出來る、之を一國の組織に徵するに、個人が相集つて一家をなし、一家が相集つて町村をなし、町村が相集つて市郡をなし、市郡が相集つて府縣をなし、府縣が相集つて一國を成して居る、故に一國の安寧幸福は一家の安寧幸福の如何に關係すること

て、齊家は治國平天下の根本義であるとも云へるのである、故に一家を齊ふることが如何に大切なるかは直に理解せらるることである。

さて一國には立法行政司法の三大機關が備はつてあつて、一國の元首は之を統治して居るのである、同樣に一家にも之を治むる所の主宰者があつて內政を司るにあらずんば、恰も一國に元首なきが如くて之を組織づけ其安寧と幸福とを企圖することは出來難い、之れ一家に戶主又は家長なるものの存する所以である。

さて又一國の統治者は元首であるとしても、之を實行する機關には種々ありて、それぞれに分擔が行はれて居る、假令ば立法機關としては貴族院、衆議院があり、行政機關としては外務、內務、陸軍、海軍、文部、大藏等の各省があり、司法機關としては司法省及其所轄官廳が數多あるばかりでなく、同じ行政事務であつても國際關係のことは外務省が司り、國內關係のことは內務省其他は之を司ると云ふ樣なわけである、一家を治むるにもやはり適當に其家內政治を分擔することは極めて有効な極めて進步したやり方で、其程度に多少の差こそあれ、古來何れの國々の家でもやり來つたことである。

果して然らば一家の家政を如何に分ち何人が之を分擔遂行するをよしとするかは次に起るべき問題である、先づ家政は之を內外の二つに分つのは一般の風習で簡便であるとせられて居る、果して之を內外の二つに分かちたりとせば、男子は其何れを分擔し女子は其何れを分擔するを以て自然なりとすべきであらうか、此問題を解決するには男女の性格を研究したる後にせねばならない、男女の性格の相違の研究は人類學上の仕事であつて、玆に科學的敍述をなすの餘白を持たない、然しながら極めて表面の肯定的なことのみを列擧しても、男子は體力强健にして筋骨逞しく發達し、氣風剛膽にして理性に富み、女子は之に反して獨り身體の構造を異にするものあるのみならず、體力一般に柔弱にして氣風溫雅に感情に富む、故に男子は外にあつて國政に關與し、其他社會各般の事業と一家の對外關係とに其心身を捧げ、女子は家にありて一家百般の整理に從事し、子女を敎養し、男子をして外にあつて其任を盡すに內顧の憂なからしむる樣にするのは自然の順序であるとせねばならない。

既に女子は一家百般の內政を整理するを以て任務とするは自然の順序なりとすれば、女子は一家の主婦たるに先だち之に必要なる敎育を施さざる可からざることと

なる、此目的は普通教育を施す學校のあらゆる教科目の教授と家庭教育の結果と相倚り相結合して成し遂げらるべきは勿論であるから、學校教育の教科目のみに就きて考へても、修身、國語、地理、歴史、算術、理科、裁縫等は皆此目的だけて教授しては居らないにしても、而かも此目的に對して充分の効果はあるのである、就中高等小學校の理科中特に女子の爲めに授くる家事及高等女學校女子師範學校の教科目中の家事は特に此目的のみによつて設けられたものである。

家事科の範圍は何であるかの問題は暫く措きて之を後篇に讓るとしても、一家の內政は衣食住育兒經濟等の事項に關することは言ふ迄もないことである、然るに之等の事項に關する知識技能は其基礎を數學、理科……物理、化學、動物、植物、鑛物、生理衛生……等に置き其理法や事實から演繹的に決定せられ練習せられたるものであつて、實驗的の學問である、元來書物の上て學問することは我國人の比較的に得意とする處であつて、文字文章の美や詩歌俳佪の風韻を賛美翫味し、或は倫理道德の教や忠臣烈婦の事蹟に感激奮起する事は、必ずしも他の諸外國人に讓らない樣であるけれども、之と反對に實物又は自然現象の觀察を基礎として其間に存する原理や、其相互間の關係などを研究する實驗的の自然科學の如きは其最も不得意とする處のものである樣に思はれる、換言すれば我が國人は一般に文科的學問を文字文章の上て手を拱いて研究することは比較的長所とするけれども、理科的學問を實物現象の上て手を煩はして推理研究することは比較的短所とするが如く感ぜらるるのである、勿論我が國民は元來科學的研究に不適當なるものなりや否やの斷定は決して輕々しく之を下すこと能はざることであるけれども、少くとも過去及び現今に於ては自然科學的關係の學問の研究は、歐米國人に一歩を輸して居ることの爭ふべからざることは事實上證明して居るではあるまいか、かの小學校の教科目に理科を加へられてこの方、隨分長年月を經過して居るに拘はらず、一般國民の理科的知識の發達は頗る貧弱なるものであつて、農業に工業に漁業に將た又公衆衛生事業に於て、進歩した學理の應用を理解し運用するものが甚だ少いと云ふ事は其一例である、今自然科學に屬すべき學問をオスワルド流に分類して、基礎科學、適用科學及び應用科學とするならば、物理學、化學等は基礎科學て、動物學、植物學、生理學等は適用科學て、醫學、衛生學、機械工學、土木工學等は應用科學てある、然らば今次の目的たる家事は果して何てあ

らうか、予輩は家事は醫學、衞生學等と同じく基礎科學及基礎科學を適用して成立する適用科學の二種を人生問題に應用して組織せらるべき學問であるから矢張應用科學に屬すべき性質の者であると思ふのである、家事其物の學問的性質は既に斯の如くであるから、自然科學的學問に不得意なる我が國人は、矢張り此家事にも比較的不得意なるは數の免れざる處である爲めか、從來教養され來つた理科の知識が家事的任務に應用さるることは極めて少なかつた許りでなく、特に高等女學校教科目中に家事を設けられてからも、數千萬の卒業生を世に出して居る筈であるのに、實際の我が國民の家事生活の狀態を至細に觀察し來れば、其活用極めて微々たるものであつて、殆ど進歩發達の跡を指摘するに苦む程である、例令ば毛織物は強いアルカリ性の熱液で洗つてはならないと云ふのに、白モスリンを石鹸の濃熱液で洗つて幅を縮めたり黄變せしめたり、食物としては蛋白質、脂肪、炭水化物、無機鹽類が一定の割合に配合されたるものでなければならないと云ふのに、一向其配合に無頓着であつたり、或は無機鹽類の營養上の効果を度外視したり、或は蛋白質と云へば豆類から取つても肉類から取つても同じだと考へたり、室内の掃除に於て眼に見ゆる塵埃よりも眼に視えざる微細の塵埃が衛生上甚しく有害であると云ふのに、無遠慮にパタパタはたきをかけて塵を擧げたりする樣なものの、一々之を列擧すれば日も亦足らざるの觀ありてある。

斯くの如く述べ來れば、家事教授の効果は殆ど貧弱取るに足らないと斷言した樣なもので、其効果を寸毫も認めて居らないかと云ふに必ずしも左樣ではない、少しは効果は擧げて居ることを認めて居る、然しながら其教授時間數の割合に其卒業生は實際生活に之を適用する工夫運用の才能を缺くか、或は努力を缺いて居る、又卒業生の多い割合に我が國の家庭生活の方法は進歩發達せないと云ふのである、之れ果して何に原因するのであらうか、教師其人の知識技能の足らない爲めであらうか、將た又教授の方法が不可なるが爲めであらうか、予輩は不幸にして、未だ全國各地に亘つて家事教授の狀況を視察するの機を得ないが、參觀したる範圍に於ては、教科書に記されてあることを口演式に講釋したり、甚だしきは讀方教授のそれの如く先づ生徒に教科書を朗讀せしめ、次に教師は其文字文章が表はす意義内容を講義し生徒は之を謹聽するに止まつたり、實驗に關することを稀に課するとしても教師は單に之をや

つて見せると云ふに過ぎなかつたり、實習を課するとしても教師が豫め豫定したる材料の順序方法に準據して生徒をして其通り之を行はしむると云ふに過ぎないのが少くないのである、幸に有識の士ありて家事教授の効果の擧がらないことを嘆いて、頻りに家事教授の研究を云爲すれけれども、徒に實用主義に捕はれ教材の實質をのみ論じ、其實質を取扱ふ方法に至りては、敢て前述の範圍を脱出する者甚だ少いのは予輩の大に遺憾なりとする所である、斯の如き狀態であつては今日の家事教授が將來に於て持ち來たす効果の程も思ひやられて甚だ覺束ないものであると云はなければならない、吾人職に教育にありて斯の如き覺束なき教育を施したるものを、第二の國民として世界の劇甚なる競爭場裏に出して國家家庭を組織せしめては、何時如何なる時に於てかよく其目的を達することを得るであらうか、普通教育を施す學校の一教科目としての家事科は其實質に於て其教授の方法に於て、現今の如く貧弱なるものであつてはならない、吾人は遺憾ながら家事教授の効果の十分に擧らないのは教師其人の實質的知能の足らざる爲めと其教授の方法が極めて原始的で拙劣である爲めとの二つに歸すると斷言せざるを得ないのである。

如何なる教科たるを問はず、其教授の効果を擧ぐるに必要なる要素の一は其教科に關する實質的知識の豐富なることである、即其第一義は教師は其教科に對して深くして且練磨されたる知識を持つて居ることであると云はなければならない、今日の家事教授の効果の擧らないのは又實に教師が家事的知識の缺乏して居ることは其一原因をなして居ると思はれるのである、蓋家事は已に述べたるが如く多くの基礎科學と適用科學とに其根柢を置いて居るのみならず、他の應用科學にも觸れて居るのである、然して此教科は主として女教師の擔任する所であるが、女教師は特に我國人一般の傾向を一層極端に表現して、文科的諸學科には長じて居ても理科系統の學科には長じて居ない傾がある、更に又家事は今てこそ八ヶ間敷く論議はするけれ其、從來は其必要を認めた割合に何れの學校に於ても其教科の待遇は他教科に比して冷遇せられ來つたと云はざるを得ない形跡がある、即下級の教師か又は代用教師などに一任して置いて、堂々と全力を傾注して此教科の内容又は取扱方につきて創作的研究をすると云ふ教育者は極めて少なかつたのである、此第一關係學科の多いことと、第二關科學科に不得意勝ちなる女教師が擔任して居つたことと、第三に全身を捧げ

て研究する特志教育家のなかつたこととの三つは、この教科の教授に任ずるものの實質的知識の豐富ならざる所以てあつて、從て家事教授の効果の甚だ擧らざりし所以の一てある、それ故に吾人は教師諸君に對して先づ家事關係學科の根本的知識から始めて本科の知識を極めて豐富にせられんことを切望して止まないのてある。さあれ教授の効果は其教科に關する豐富の知識だにあらば之を十分に擧げ得るものてあると論斷する者あらば、其は甚だしき誤りてあると云はなければならぬことは、現今の教師諸君に向て今更之を詳述する必要ないと信ずる、知れる者必ずしも他人に之を授くるに巧みてはない、教授法の研究をなして自得する所あるものは、之をなさずして自得する所なき者に比して、教育的事業に於て一般に優良なる成績を表はすことが出來ると云ふ事實の存在する限りは、教授法研究の價値は其光輝を失墜せないのてある、學校の限りある短時間の間に、相當に多くの効果を擧げんとしたならば、必ず先づ其教授の方法につきて考究し、益々其精に入り其妙を盡さなければならない譯てある、之れ家事教師に對して其實質的知識の研鑽を切望すると同時に、亦其教授法の講究を切望して止まざる所以てある。

現今家事教授に對する非難の內最其聲の多くして且高いのは、學校の家事は空理空論に傾いて家庭の實際に其儘適合せない、故に其土地其家庭の狀況に適合した實際的實用的な事項を教へてもらいたいと云ふのにあると思はる、之に對して吾人は徹頭徹尾肯定もしない、又否定もしない、つまり輕々しく斷定することは出來ない、要するに教授の實質に關することてあるから後篇に順を追ふて考究すべき問題としたいのてある、予輩は寧ろかかる非難の來る根柢は、教授の實質に關するものの外に、其教授の方法が拙劣てあつて、其着眼點の誤つて居ることに存する方は却て其大部分を占めて居ると信ずるのてある、即其教授法なるものは生徒の心力を働かしむることを勉めず、教師のみ獨り働いて教ふるのてあるから、生徒の知識は一を聞いて一に止まり、曾て二となり三となり十となることはない、何等工夫、發明、應用の心的能力を練習せしむることが出來ないのてある、故に學校て授かつた基本的又は代表的知識技能が、家庭の事情に應化適用せらるること能はずして、死物となつて教科書又は筆記帳の紙面に横はるに至るてはあるまいか、斯の如き教授法てあるならば、世の一部の或人がなす實質上の非難と共に、此教授法を呪はざるを得ないのてある、然しなが

ら吾人の玆に論究せんとする教授法は決して新る融通の利かない原始的のものではない、如何にすれば生徒の心力を十分に練磨せしめ、一を以て十を知り、是を知つて彼に應用するに至らしめ得べきかの問題であることを玆に豫め言明したいのである。以上の如く觀じ來れば家事教授法研究の必要なることは實に焦眉の急を告ぐると云ふも敢て過言ではあるまい、然るに此教科の教授法に關する組織的研究の世に公にせられたるものは我が國に於ては殆どなく、僅に家事教授資料に附帶說述せるものの二三を見るに過ぎない、手を拱いて慨嘆せざるを得ないのである、故に予は自家の研究を發表して世に問ふことは、自己の職分に忠實なる所以であつて、決して無益の業ではないと信ずるものである。

第二章　家事科の設置に關する歷史的回顧

第一節　家事科の名稱

根本的基礎的である工業的又は藝術的技術と區別して云ひ表はす必要の上から、家庭の內政に關係して居る廣い範圍の事項を指示する爲めに、古來種々の教育上の術語が使用された。

歐米諸國に於て其等の術語の中に最多く使用せらるる物は Home economics, House hold Science 又は House hold art 等である、英國の文部省では House craft なる語を一九一一年以來使用して居る、Economics なる術語は米國の Home economics association に基因せるものであつて、此學會の會員によつて使用されて居る、House hold Science and art なる術語は、言葉の上より考ふれば此科が要求して居る凡ての物を包含する樣には見ゆるけれども、畢竟言葉が長くして不便なるを免れない、然らば House hold science なる術語は何うであらうか、言葉の表面上の意味から云ふと、應用的技術を包含しては居らない、之と同樣の論法で考へると、House hold art なる語は應用的實用的方面を强要はして居るけれども、科學的である技術の根柢の知識を要求し包含しては居らない缺點がある、然しながらこの最後の二種の術語は生產的經濟的及衛生的なるべき家庭の內政活動の諸方面と、近世に於て發達したる家庭的理科及家庭的技術の名目の下に包含せる事項とを意味せしむることを得るのであるから、初等教育及中等教育に於て一般に通常使用せらるる樣になつて來たのである

我が國に於て女子の中等教育の教科目中に此目的に關する教科を加ふるに至つたのは明治十五六年頃よりてあつて、其當時は一般に家政學と稱してあつた、然しながら明治三十三年八月二十一日に發布になつた小學令施行規則や、明治三十四年三月二十二日に發布になつた高等女學校令施行規則等には明かに家事と云ふ術語が使用されて居つて、此等の文部省令に基いて一般に現今では家事科なる語を使用する樣になつて居るのてある、蓋し一家の整理經營に必要なる各般の仕事を總稱すれば家事てあつて、之を運用する働きが家政てある筈だから、何れにても甚だしき差支はない樣てあるが、仕事其物を指示する家事なる術語は矢張適當てあるとせなければならない。

第二節　家事科設置の概說

獨立せる家事科なる名稱の教科目こそなけれ、斯種の教授の發達は隨分長い歷史を有して居るのてあつて、教育上此科の大意を授くることに就きての價値は、十六世紀及び十七世紀に於て論議が始まつたのてある、即ちコメニウスやラッサー及び他の人々は、女子教育に於ける家事的作業の教育的價値に着眼して其教授を加味すべく頻に之を稱導主張してあつた、十八世紀に入つて博愛主義者は此主張に贊同して大に其語勢を張つたのてある、越えて十九世紀の初葉に入つてはペスタロッヂ及他の改革論者は此科を教育上に實施すると云ふ意氣込て大に活動を開始してあつた。是より先き獨逸の博愛主義者の組織になる學界及び英國の慈善學校に於ては、此種の應用教科の採用に對して一般に實施上の工夫を廻らしたのてあつて、Lancaster（ランカスター）や Bell（ベル）にある Monitorial school（モニトリアル スクール）は常に此方面の教授を加味して居つたのてある。

針仕事は女子の凡ての民間學校て之を課して居つた、特に裁縫は其重なるものとして初年級より課した樣てある、レース細工や刺繍は頗る精巧の度に於て十八世紀の間に女子の民間學校の教科の一部として課ぜらるる樣になつて來たのてある。

中等學校又は大學の教科目中に料理、洗濯、一家の管理及び針仕事を加ふるを可なりとする傾向は、已に十九世紀の中葉前に歐洲諸國に萠したのてあつて、其後次第に此種の學校の女子教育の教科目中に加味せらるる樣にはなつたけれども、而かも多年の間其實施の狀況は、一部的て漸進的て且試驗的てあつた、漸く十九世紀の末葉二十

五ヶ年の間に小學校及中等學校と工業研究所幷に大學とに課せられて、種々有益なる經驗を積み、其內容も整頓され來つて多少高等なる組織的發達をしたのであつた、然して此教科の施設は次第に田舍の地方に及ぼされて行つて、農蠶の閑期などに於て農家の子女にも授けらるる樣になつたのである。

米國にあつては此間に下級の學校でも之を採用したのであつたが、地方の或種の學位を授くる大學(University)に於ても之を大學課程の一として採用するに至つたのである。

次て獨逸、アイルランド、ノールウエー及びデンマークに於ては此教科の應用課程の理解に必要なる科學的原理を研究せしむべしとの注意を喚起する樣になり、續いて米國に於ては女子教育の急先鋒者にして家庭及學校用女子家事教授書(A treatise on Domestic economy for the Use of young ladies at home and at school)(一八四〇年)の著者なるカツサリン、ビーチアー嬢によつて、盛に其價値を唱導喧傳せられたると同時に、施設採用を見るに至つたのである。

斯くの如くにして遂に十九世紀の最後に至つては、英國に於て獨立したる一教科目として之を採用するに至り House hold art なる名稱の下に此應用教科を全國に傳播し、それぞれに地方的發達をなし、house craft と名稱を改め、以て今日に及んだのである、今次々に代表的なる二三の國々に就きて其狀況を細說して見ようと思ふ。

第三節　米國の狀況

(一)發達の歷史

之を歷史に徵するに學校系統に家事教材が組織せられ、而して近世的形態を成した端緒とも稱すべきは、一八七六年にヒラデルヒア博覽會の時に企圖せられた事業にあるのであつた、此企圖の實施は米國東部の都市から始められ民間の積立金で維持して行つたが、其事業は餘り早過ぎた爲めであつたのか成功は之を筆にするに足らぬ程小さかつたのは甚だ遺憾である、之より先きボストンでは一八五四年頃から初等教育の學校に裁縫を課し始めては居つたが、一八六五—一八六六年迄は微々としてあまり振はず、又特に學校系統として組織的ではなかつた樣に思はる。

次に割烹の方面に就て述べて見れば、割烹學校はボストンに民間組織で設立せられ

てあつた、即一八六七年にはジョアンナ・スキーネー嬢によりて、一八七七年にはマリア・バーロア嬢により設立せられたのてある、マリア・バーロア嬢はラッセル研究所の教師て、其校長は南ケンシントン學校の割烹の教授に關係して居つたと云ふことてある、此學校の設立者並に講義者の努力は大に公衆の利益と一般の注意とを喚起し、遂に此種の教師養成の必要を感じて之を要求するに至つた。

一八七九年に至りボストンの女子教育學會は、割烹學校の維持費を出資すべき決議をなして、其年三月十日に新にボストン割烹學校を設立した、其目的は女子に課する に割烹と其證明的課程とを以てするにあつたのて、一八八三年には此學校は一時的基礎から永久的設置の基礎の上に引移され、一九〇三年に至り遂にシモンス大學に合併してしまつた、之と同時に割烹實驗室及臺所はボストンの多くの學校て漸次に設備するの幸運に向つたのてある。

師範教育の方面に於ける家事教授は、一八八六年にテンニーソン町立學校と割烹師範學校とに始まつたが、後者は一八八八年にフラミンハムにあるマサチウセッツ州立師範學校の家事學部となつたのてある、一九〇二年にシモンス大學に合併された家政學校と云ふのは一八九七年に私立の學會によりて設立されたものてあつた。

次に裁縫の方面に就て述べて見れば、十七世紀の初葉にニウヨーク市の教會は裁縫學校を設立し、一八八〇年に至り其四月十日にニウヨーク臺所菜園教育學會なるものを組織して、其動物學科中に家事的生産的技術を加味して之を課して居つた、越えて一八八四年に至り、此學會は工業教育學會と云ふものになつて、裁縫を教ふる教師養成の目的て一八八四年直に此科の師範學部を開始したのてある、實に順境な發達て而して達觀した經營だと云はねばならない、唯惜むらくは其内容と教授の方法は完成して居らなかつた。

斯くの如くにして割烹及裁縫の教育は次第に聲價を高めつつ、星は遷り年は去つて一八八六年の冬に至り、兒童工業博覽會の開會せらるるに際し、聯合各地の六十の學校から子女を選出して手工の技術を公衆の面目に提供してあつたが、其結果は非常に有効て、學校に於ける勤勞學科の發達に偉大なる直接の好影響を與へたのてあつた、此勢て一八八八年には此科の教師養成の目的を有する大學は其模範的組織として工業教育學會の外に新に組織せらるる樣になり、それが一八九二年に Teacher's College（テーチャーズ カレッヂ）

と呼ばるるに至つたのである。

一八九一年にはヒラデルヒアにドレキセル研究所と云ふのが組織せらるることになり、翌年から其授業を開始することになつたが、其學科中で家事は重要なる位置を占めて居つた、一八九三年にチカゴ市で開會せられた萬國市場にはスキーデンも加入して教育事業に關する展覽をなした結果として、歐洲の諸國に對して此方面の教科目の普及發達上大なる刺戟を與へてあつたと云ふことである、同年の末にはニウヨーク教育學會が裁縫學校を設立し、教材の內容、教授の方法等に關しては常に中心者の態度を維持して居つて、盛に此方面に關する批評又は展覽會を開會し、或は出版物を刊行したりして教育界を裨益したのであつた。

以上は米國東部地方に就てであるが、西部地方では如何であつたかと云へば、此種の教育はイリノイス、アイオワ及びカンサスの州立學會によりて開始されてあつた、即アイオワは最も早く一八六九年に家事教授に着手し、若き女子は學校の食堂又は割烹室で毎日働く樣になり、カンサスの農科大學では一八七三——一八七五年の頃に其教科目中に裁縫を加へ、一八七五——一八七六年に其化學部で食物に關する講義を開始し、一八七七年には割烹室を設備するに至つたのである、然らばイリノイスの方では如何であるかと云へば、一八七〇年には州立イリノイス工科大學に女子の入學を許可し、一八七一——一八七二年には家事なる獨立せる科を置き、越えて一八七四年には特別なる教師を此教科の爲めに任命せられ、一八七五——一八七六年には組織的に研究せられた此教科の課程を發表するに至つたのである。

(二)現在の狀況

米國の文部省が編纂せる一九〇九年及一九一〇年の統計によれば、裁縫及割烹を課し居る學校は、小學校程度のものが九五校、高等學校が二〇七校、高等研究所が一四二校で、合計四四四校あることになつて居る、翌一九一一年に亞米利加家事雜誌社は精細なる調査をなして次の如き完成した結果を報告してあつた。

(イ)聯合政府より補助金を受くる大學及び研究所三二。
(ロ)農業及家事に向て州の補助金を受くる中等學校六四。
(ハ)聯合政府より補助金を受けざる大學及び研究所一〇二。
(ニ)師範學校一〇二。

(ホ)家事の課業を課する高等學校六三二。

又特殊專門教育を施す學校數は左の通りてある。

(イ)家事學校一二。

(ロ)工業學校二四。

(ハ)不完全なる又は附屬せる研究所二六。

(ニ)補習學校二六。

(ホ)聯合政府より補助金を受くる黒人の爲めの研究所一七。

(ヘ)同補助金を受けざるもの六九。

(ト)印度人の爲めの研究所一三七。

合計一二四三。

(三)州立大學

總校は二十一校てあつて之を年月順に示せば左の通りてある。

Ohio（オハイオ）	1896
Idaho（アイダホ）(dropped in 1899, two years Course added in 1903)	1897
Nebraska（ネブラスカ）	1898
West Virginia（ウエストバージニア）	1899
Arizona（アリゾナ）	1900
Minnesota（ミネソタ）(work for a degree 1903)	1900
Missouri（ミゾウリー）(dropped in 1904, reorganized 1906)	1901
Nevada（ネバダ）	1901
Utah（ユータ）	1901
Tennessee（テンネスシー）	1901
Wisconsin（ウイスコンシン）	1903
Indiana（インヂアナ）(purdue)	1903
Florida（フロリダ）(state college for women)	1905
Pennsylvania（ペンシルヴァニア）(State College)	1906
Wyoming（ワイオミング）	1907
New York（ニユーヨーク）(Cornel)	1908

Vermont……1908
Maine……1909
Washington……1909
Illinois……1910
Kansas……1910

(四)州立農科大學

一九一〇年に發表した亞米利加合衆國の農業部の報告書によつて見ると、米國の農科大學及工科大學數は六七校であつて、其内四七は家事の科目を持つて居つて、又其内の二校以上は確に裁縫をも課してある、一三校は後になつて州立大學に合併さるる樣になつてしまつた、四七の殘りの大學は同樣の科目を課して居る州立研究所であると云ふことが記されてある。

(五)私立大學

家事科の善良なる組織的課程は、中央部及西部地方に於ては寄附によりて成れる大學と工業學校とに認めることが出來、南部地方ては師範及工科大學て認められ、東部地方てはブラウン大學が一九〇三年に女子大學部て家事を開始したことや、プリンメーア、ホールヨーク、スミス、ワッセル及びエルレスレー等の女子大學が家事の目的を含有する應用理科、經濟學、社會學の課程を授けて居つたことて之を認めることが出來るてあるまいか。

一九〇七年に北部中央教育學界の管轄して居る大學及び中等學校ては家事なる教科の下に教へて居つて内容は裁縫一、手藝一、割烹二と云ふ樣なことになつて居つて、次第に此科の部門が整理せらるることになつて來たのてある。

大學て學ぶ家事の課程は、何れも卒業すればA. B. (Bachelor of arts), B. S. (Bachelor of Science); 又はPh. D. (Doctor of philosophy) の學位を授けらるるてある。

(六)中等學校

高等學校に於ける此教科の發達は比較的遲かつたけれども、現今家事を一教科目として課して居る學校數はかなり增加して居る。それ等の内て最近の高等學校に屬するものはサギネウ・ミッチ、ロス・アンゲラス、カル・プロキデンス等てある

輓近に至りて工業學校及職業學校が次第に設立さるる樣になつて、此科を教授をす

る樣になつたのである、其著名なる學校として數ふべきは、クレヴランド、シンシンナチ、オハイオ、ニウトンガル及びスプリングフヰルド工業學校やニウヨーク市及ヒラデルヒアのウヰルリアム・ペンにある洗濯仕上學校などである、此外尙注意すべきものはボストンの高等應用美術學校のあることであるが、數年の後に於ては此傾向は全國各市に傳播せられて、多くの高等學校は家事なる應用教科を課するに至つたのである。

此他尙大なる都市には夜學校と云ふのがあつて日常生活上の技術を會得し、且家庭を組織的に管理し、及び一家を愛するの精神を養成する目的で、高等學校程度の工藝的教科を講じて居るのである。

(七)特別研究所

慈善的で博愛的に課せられて居る學校の內で、著名なるものは、全國を通じて青年女子基督教會によりて設立たれて居る學校であつて、其大都市にあるものでは必ず家事的職務を教ふる非常によく整頓し發達したる學校があるのである、又家事の課程は多くの夏期教授と云ふので授けられて居るが、其先導者の一として數ふべきものはチヤウダングア夏期學校である、こゝでは一八七九年の頃から料理に關する講義を授けて居つた。

家事に關する方面の米國の學校では、シカゴに本部を置いて居る通信學校と云ふのが注目するに足るものであつて、學校其物は直接に生徒を收容して家事教授に貢獻したと云ふのではないが、其十一卷の出版物は少なからず此科の發達に資する處あつたことは疑を入るゝ餘地はない、又メルヴヰル・デウヰー夫妻(Mr. Mrs. Melville Dewey)が、一八九九年に組織した亞米利加家事學會と云ふがあつて、一九〇九年二月から、亞米利加家事雜誌(American Journal of home Economics)を發行して居る、而して其支部は各地に設置せられて大に斯界を裨益したのである。

ニウヨーク市では一九〇二年にマンハツタン女子職業學校を、ボストン市は一九〇四年にボストン職業學校を設立し、卒業後社會の實務に就きて充分間に合ふ樣に職業を授くる目的で教授して居つたのである、此兩校の卒業生が實社會に活動した成績がやがて米國人に此種の學校教育の効果が他の方法によるよりも良好であることを證明して、益々此種の教育を學校組織の下にやるの傾向を喚起したのであつた。

(八)教員養成所

初等及び中等學校教師の養成は、現今多數の師範學校と大學の教育部とでやつて居るが、教員養成專門の學校での教師養成は、歐洲諸國と同樣であまりよく組織されては居らない、然しながらシンモンス大學、ボストン大學、コロンビア大學で始めて居る。家事專門教師を正式に養成することは、ボストン割烹學校、ボストン割烹師範學校、ニウヨーク教員養成大學、プラット・インスチチユシヨン及びドレキセル・インスチチユシヨンで始めたのであるが、此等の學校からと前に記した學校からと及びカンサス農科大學から、教師はどしとし全國各地に供給されて家事教育に新生面を開きつゝあるのである、此外シカゴ大學とコロンビア大學とからも多少、家事科教師を出して居る。

一九一〇年に至つて全國一四七の共立師範學校の內其一〇三校は、家事に屬する一―二の分科を設ける樣になり、又四二の研究所は教師養成の目的で教授を開始したのであつた、然しながら州立の師範學校又は大學は僅に七校に過ぎない、こんな有樣であつて尙田舍地方の初等教育の家事教師が不足であるから、米國では州立師範學校に家事を設置することを要求して居るのである。

(九)專門教育所

米國に於ける高等專門教育の教師養成事業は、唯に其教師を社會に供給したと云ふ點に於てのみ貢獻した許りでなく、社會に於ける婦人の職業的地位を得させる上にも亦多大の裨益を與へたのであつた、即文化の先導者としては行政的才能、社會的知識、產業的知能、學術的手腕の上より、又業務者としては研究所長、授產所長、服裝圖案者、家內裝飾者、手藝家等として、それぞれ社會幾多の方面に其地位を見出す樣になつたのである、然しながら女子の高等教育に就ては亦種々の熟慮すべき問題はないでもないが、それは必ずしも本書の目的ではないから之を論ずるの餘白はないのである。此程度の教育の家事科では、更に醫療關係の事項例へば看護と云ふ樣なことを重要視するに至つた、即ち癲癇、發狂、虛弱者等の爲めに畸形兒治療院、癲癇病院、發狂病院、盲人救護院、孤兒院及び感化院等が求むる看護救助者としての必要なる事項を教授することである、然しながら此等の事項は獨り此種の救濟事業に必要なる許りでなく、家庭內にも必要なることは勿論であると認められて居つた。

第四節　英國の狀況

(一)エングランド

女子教育上家事が必要てあると云ふことは、早くも十八世紀の教育家ハンナモーア、エラスムス・ダーキン其他の人々の手に成れる著書に於て唱導せられてあつた、此唱導が不幸にして實現せらるるに由なく、空しく春秋幾星霜を怨みの内に經過して、漸く一八四〇年に至り女子の國民學校て、隨意教科として裁縫を課し始め、越えて一八六二年に至つて必須教科となるに至つた。

國民學校に裁縫を課し始めた一八四〇年に後るること六年、即一八四六年に教育に關する諮問會院の樣なものが組織せられて、女子に家事を教ふる學校設立者に多大の補助を與へてから、學校に於ける一般勤勞教科は大に家事的色彩を帶ぶることに成つて來た、それかあらぬか、割烹實驗室や洗濯實驗室は種々の工業學校て設置する樣になり、引續き十五年間許りの内に女子教育に對して家事工藝は隨分發達を見る樣になつたので、一八六〇年に教育諮問會院樣のものが閉止せられてしまつた、然しながら割烹實驗室や洗濯實驗室は之を設備するにも之を維持するにも費用が多く、又之を管理するにも困難が多いと云ふので、多くの學校ては寧ろ裁縫の方に濃厚な注意と希望とを集注して居ると云ふ傾向があつたのてある。

其後一八七五年迄約一五年間は家事は之を採用して居る學校はあまり增加もせなかつたし、又教授の方法は單に學說を授くるに止まつて居つたと云ふ有樣てあつたが、此年になつて文部省は教員養成の目的の下に料理研究所を組織し、一八七八年には小學校に割烹の中心組織の教室を設備した、其後洗濯實驗室や主婦の一家の管理も文部省は公然其必要を認めて學校に之を設置せしむる樣にし、斯て十有餘年の間は家事の名の下に割烹、洗濯、家事經濟、一家の管理、裁縫、手藝及び衛生等の實驗教科を取扱ふと云ふ有樣になり、次て一般に此教科が共立小學校に採用せらるるの狀況を呈し、一九一一年には house craft なる新らしき語は此教科の名として用ひらるる樣になつた、斯くの如くにして小學校に於ては十一歳以上の女兒に就て調べて見ると、一九〇九—一九一〇年には割烹を學べるもの三一六二三三人、洗濯を學べるもの一一八〇四〇人、組合はせたる家事の諸部門を學べるもの一六七〇七人を數ふるに至

り、手藝は必須教科となつた有樣であつた。

同時に教育養成の必要を喚起して着々其實現を見るに至り、割烹、洗濯、一家の管理、手藝及び裁縫の免許狀を下附する樣になつたのである。

(二)ウエールス

ウエールスの小學校の家事科の狀況は、エングランド地方と殆ど同樣であつて、一九〇七—一九〇八年には九〇〇〇〇人の小學校女兒に此教科を教へて居つた。

女子中學校の方では如何であるかと云ふに、混合高等小學校では家事科の名の下に三年間毎週四時此科の教授をして居る、他の中等學校でも割烹洗濯は多くは之を教授して居るのであるが、特に記すべきことは家事科の教育的効果として認められて居ることが應用的精神の陶冶を確實なる作業によりて授くるから、一般教育の上より見ても、家庭生活の上より見ても、偉大なる効果があると云ふのである。

此要求は女子の大學課程にも及ぼして、現に北ウエールスの大學では、之を學校に提供して居る。

家事教師養成の學校は早くも一八九二年にカーヂッフに設立せられてあつた。

(三)スコツトランド

スコツトランドの女子小學校では裁縫を義務的に課して居る、割烹其他に關しては其組織はエングランドと同樣であつて、それぞれ家事を課して居る。

此地方の特有なることは補習科であつて、小學校を卒業した女兒は試驗を受けて入學し、二年又は三年間毎週九時間位家事科を修むるのであるが、之の更に進歩したものとも云ふべき中心組織の補習學校がグラスゴーにあつて二〇〇〇人以上の女兒が出席して居ると云ふことである。

教師養成事業の方面では割烹教師養成學校と云ふのがエヂンバラに八校ある、此外教師養成の目的でブックマスター氏の講義を受けた女子の試驗を受けると云ふのもあるのである。

(四)アイルランド

アイルランド地方では一八八六年前からも隨意に家事關係教科を課して居つた樣であるが、明瞭に記載するに足る事實は、一八八七年にダブリン市の工業學校が割烹、洗濯及び裁縫を課し始めたと云ふことである、越えて一八九三年には女子工藝教育

學會と民間有力者との周旋によつて促され、皇立アイルランド學會はダブリン料理洗濯及び裁縫學校と云ふのを開始した、此學校は一八九三年後になつて此科の課程を授くる目的の外に、家事教師養成の目的で、農業及工業研究所の方に取られてしまつて、アイルランド家事教員養成學校となつたのであるが、其教授の內容に關して特に吾人の注目すべき點は、料理又は洗濯等の技術に科學的基礎を與へる樣に教授して居ると云ふことである。

以上記した外に、一八九六年には小學校に於て必ず裁縫を課する外割烹、洗濯、衞生に關することも適宜之を加味する樣になり、中等學校に於ける家事教育に於ては農業及工業研究所の下に、一九〇一年には家事の各分科に屬する課程は五八の女子中等學校に課せられ、一九〇九年には多くの工業學校でも之を教ふる樣になつたのである。

高等教育の方面では如何であるかと云へば、一九〇四年にはヴキクトリア大學がウオーターフオルドに、一九〇八年には同じくスリゴに、一九一〇年にはダブリンのアレキサンダー大學に家事科の設置を見るに至つたと云ふ盛運に遭遇した。

第五節　獨國の狀況

一七九二年ヒッペルに於てカント派の教育家が女子の高等教育の必要を唱導し贊助した時に、家事科の特別教育を必要なりとすとの注意を世間に喚起した、尤も家事教授の價値に關して始めて世人が覺醒したのは之より一世紀も前からのことである、かくて此趨勢の結果として、一八一五年から一八七五年の間に下婢養生學校の設立を持來たしたのである、斯くて婦人會の援護の下にカルルスルーヘに家婦學校の設立を見、一八八五年にはプラシアの皇太子妃殿下の奬勵により割烹學校樣のものをベルリンに設立した、妃殿下は其後一八八八年には家婦研究所を設立せられてあつた、翌一八八九年にはフラウライン・フホエステルは女子小學校に割烹を入るることを唱導した結果、ミウニヒ・ニウレムベルヒ及びオーグスブルヒに之を實現するに至つたのである。

斯る狀態から云ふと、假令獨國では二〇年後に於いて長足の進歩をなしたとはいへ、家事教授の發達は他の歐洲諸國に比すれば比較的遲かつたと云はなければならな

い、然しながら一九〇二年にはロート、ボスダム及びボーセンに模範州立家婦學校が設立され、次て獨國の一特徴とも稱すべき家庭學校の發達を見、更にコルツフライシュ夫人によりて唱導され、農務大臣によりて扶助された田舍地方の移動割烹學校と云ふのが設置せらるる樣になり、今も尙バーデン・パワリアにあつて活動して居る、更に又近年になつてベルリン、ライプチツヒ、ドレスデン、ミウニツヒ、スツツトガート其他に於て澤山の工業學校又は產業學校を見るに至つた。

教師養成の方はローカレー又は、ベルリンのレツテ・ハウスとペスタロツヂ・フレーベル・ハウスてやつて居るのが其主なるものてあるが、其州立の學校等の商業、農業學校てやつて居るのも少くはない。

第六節　佛國の狀況

一八五〇年に手藝は始て學校教科として採用せよと唱導せらるるに至り、一八八二年に至り家庭的應用教科として義務的に小學校及中等學校に誘導せらるる樣になつたのである、然しながらそは眞實なる効果を奏せりや否やは不明てあつた、一八八四——一八八七年には一樣に補習科なる課程は一般に組織さるる樣になつた、然しながら割烹とか一家の管理と云ふ樣な應用教科は、概して其教授の內容は簡略て且理論的だけであつて實驗實習を伴ふことが貧弱てあつたので、主として手藝の上にのみ緻密て濃厚な注意が集まつて居つたと云ふ形てある。

家事科の發達上特に記憶すべきは、一八四二年に巴里に企圖されて一八五六年に組織された學會が、一八八六年に至り急速に重要なる進歩をして、パリー市だけても自治區の設立になる工藝學校が八校もあつて、三〇〇人の學生を各校が收容して居ると云ふことてある、是等は午前は一般教育を施し午後には手藝、裁縫、帽子細工其他工藝上の各分科に亘つて專門的教授をなして居つた、何れにしても學生は三年の課程の間に料理、洗濯及び家庭管理の研究に八週間丈けは從事せねばならぬことになつて居つた。

一八八七年以後は何等特筆すべき發達もなく、平凡なる歷史を其紙面に殘したに過ぎなかつたが、一八九七年に至り、再び機運到來して此種の學校は五〇〇〇〇人の住民によりて各々の町に設立せらるるに至つた。

一九〇一年に一種の補習學校が開始され、小學校を卒業せし女子が入學して三年間手藝、裁縫、帽子細工及び衛生等を修めて居る、十六又は十七歳の女子は熱心に愉快に研究して居るのである。

一九〇三年になつてラィオン大學は女子の爲めに二年課程の學部を創設して、毎週六時應用生物學、細菌學、家族に對する主婦の任務及び衛生其他の學科を教授した。斯くの如くにして家事は次第に其教育的價値を一般に認めらるゝ樣になり、パリ小學校に於て十分に之を承認採用せらるゝに至つたのである。

第七節　我が國の狀況

(一)高等女學校

我が國に於て家事科を普通教育の學校に加へたのは中等學校から始つたので、明治十五六年頃と思はれる(教育辭典に據る)其當時は家政學又は家政科などと稱して居つたが、明治三十二年二月八日高等女學校令が發布せらるゝに至つて、家事なる名稱が一般に用ひらるる樣になつたと同時に、公立の高等女學校では家事科は必須教科目となつた譯である、然しながら、其範圍內容は必ずしも一定して居らなかつたと考へなければならない、如何となれば、文部省では其課程の標準を示さなかつたからである、然るに明治三十四年三月二十二日高等女學校令施行規則を發布し、其第一章第十條に

家事は家事整理上必要なる知識を得しめ兼て勤勉、節儉、秩序、周密、清潔を尙ぶの念を養ふを以て要旨とす。

家事は衣食住、看病、育兒、家計簿記其他一家の整理經濟等に關する事項を授くべし。

と指定した、そこで我が國に於ける公立高等女學校の家事科の目的及範圍は法令上決定された譯である。

私立の高等女學校では何うてあらうか、我が國の私立女學校は多く文部省令に準據して施設し認可されてあるのだから、其學科目及び程度等凡て公立女學校のそれと殆ど同一であると見るべく、從て此時代に盛に勃興した私立の中等程度の女學校では、家事を授けて居つたとすべきである、現にそれ等の女學校中には家政學校と云ふ樣に此科の名稱を校名にすら用ひて居るのがあるのを見ても趨勢を察することは

出來る。

越えて明治三十六年三月九日高等女學校教授要目の發布となり、同四十四年七月二十九日再度の發布ありて其家事の部では家内の整理、家事衛生、飲食物の調理、育兒、養老及看病、家事經濟、家計簿記を教ふる樣になつたのである。

(二)實科高等女學校

次て明治四十三年至り實科高等女學校を分立し得ることとなり、其教科目中に理科及家事を置き、此兩科を聯絡せしめて課し得べくし、翌四十四年七月二十九日には高等女學校教授要目と共に實科高等女學校教授要目なるものを發布した、其家事科の内容は高等女學校第三學年及第四學年に準じ、實習の度數を增すべしと示してある、さて修業年限四年の高等女學校と實科高等女學校との理科及家事の配當時間を比較して見ると

	(學校)	(第一學年)	(第二學年)	(第三學年)	(第四學年)
高等女學校	理科	二	二	二	一
	家事	二	三	三	三

(大正四年改正)

實科高女校(理科 家事)　二　二　三　三

であるから、實習の度數を多くするには、理科的取扱をなす普通教授を少しく減ぜねばならない、之を埋め合はす爲めに理科の方は家事的理科にして一般理科の教材を減じ、家事の理科的取扱をなすべき部分をこしてやつてしまはなければならないと考へらるる、兎に角に高等女學校の外に實科高等女學校の設立を見るに至つたのは、家事教授の擴張上から吾人の大に賀せざるを得ない次第である。

(三)女子師範學校

師範教育の方は如何であるかと云へば、明治四十年四月十七日に新に師範學校規定を改められ、其第二章第十八條に女子の爲に家事科の目的及範圍が示してあるが、高等女學校に於けるものと殆ど同一である、越えて四十三年五月三十一日に師範學校教授要目を發布してあるが、やはり高等女學校に於けるものと同樣である、唯育兒の部に於ては小兒の運動、睡眠、疾病、言語、動作、遊戯、玩具、躾方、就學等を省いてある、之れ師範學校に於ては此方面のことは心理教育等で十分に課せられてあるからであると思ふ、實習の方で違つて居るのは救急法の演習といふのが高等女學校以外に示してあ

る、之れ恐らくは女子師範卒業生は教師となるのであるから、生徒の救急上實習を必要とする見解から來たのかと思はるる、如何となれば若し家庭生活上此實習を必要なりとするならば、高等女學校も女子師範學校も敢て異るべき理由を發見することは能はざるからである。

(四)小學校

之より曩き、明治三十三年八月二十二日小學校令が發布せられ同令施行規則第一章第三條國語科に關する教則中に

女子の學級に用ふる讀本には特に家事上の事項を交うべし。

としてあり、同第七條理科の部に於ては、先づ理科教授の要旨を示し、次に尋常小學校に於ける理科の範圍を示し、次に之を受けて

高等小學校に於ては前項に準じ漸く其程度を進め、特に重要なる元素及化合物、簡易なる器械の構造、作用、人身の生理衛生の大要を授け、兼て植物、動物、鑛物の相互及人生に對する關係の大要を理會せしめ、女子の爲めには家事を併せ授く可し(四十四年改正、四十年追加)。

とあつて、小學校では獨立した家事と云ふ教科目は置いてないけれども、尋常小學校では、國語讀本中で、又高等小學校では理科の中で、家事に關する教授を授くることになつて居る、特に高等小學校に於ける理科中の家事は、恰も實科高等女學校教科目中の理科及家事と匹敵するものであつて、其範圍及程度こそ異なれ、家事教授上頗る有効な施設であると云はなければならない。

斯くの如くして我が國に於ける女子教育の家事は其名目こそ多少の違ひはあれ、小學校、女學校、師範學校を通じて現今一般に行き渡つて居るのである、大正元年度の文部省學事年報によると、小學校の部では

尋常高等小學校數……九、一四二校
高等小學校數……四五三校
計……九、三九五校
分教場數……二、九七四校

で高等小學校卒業の女子は、此年だけでも六七七二二人に達して居る、高等女學校では何うであるかと云へば

高等女學校數……二〇九校
實科高等女學校數……九〇校
計……二九九校

に達して居る、大正四年末の全國高等女學校なりと稱して新聞紙上に表はれた數は、全國三二三校であつて、東京府の二七、京都府の一三を最多とし、沖繩縣の一を最少とすと書いてある、之れは文部省の調査を聞いて書いたのか何うかは明瞭でないが、恐らくは左樣だかと思はれる、して見れば三ヶ年間に總數に於て更に一四校增加したることになる。

此外幾多の女子師範學校中や二つの女子高等師範學校でも家事を教授し、又東京女子高等師範學校附設の臨時教員養成所でも家事科を授けて居るから、我が國の家事教授は例令民間に多少の論議をなして其効果を云々するものがあるとはいへ、一般に其必要を認められて居ると云はなければならないのである。

第二篇　目的論

第一章　家事科の範圍

第一節　外國に於ける家事科の範圍

(一)概說

米國に於て學校の一教科目として家事科が設置された時には、料理(割烹)、裁縫及一家の管理の三部門は家事としては重要視されて、多くの學校で取扱はれて居つたが、是等は技術的である外に科學的根柢の上に立たしむることの必要を、次第に且痛切に感知せらるゝ樣になつて來て、家事的理科なる科名の下に化學、物理、生理をも課するに至つた、而して此家事的理科の學科程度は初步の平易なものであつたけれども、次第々々に家事科の發達するに連れて其要求せらるゝ程度は向上するに至つたのである。

家事教授が次第に發達し來ると同時に、個人及社會の幸福を增進するには其各個人

が從屬する所の家庭、即社會が組立てらるゝ單位とも見做すべき家庭の幸福其もの が極めて重大てあると云ふことが一般に承認せらるゝ樣になり、從て一家を適當に管理運用する爲の原理及び方法を授くるを必要なりとすと云ふことに歸着したる結果として、科學的工藝的てあるべく要求されて來た家事が、更に社會學及經濟學の一分科としての見解を附加して之を課することが、より善き効果を收め得ると云ふことになつたのてある、斯くの如くてあるから、吾人は一般に家事科の發達は左の三段階を通過して來たものてあると云ふことが出來ると思ふ。

一、實用的段階
二、科學的工藝的段階
三、經濟學的社會學的段階

如上の如き見解の下に、現今多く課せられ居る家事は、左の範圍に屬するものてある。

一、食物供給に關する事項
二、衣類及其附屬物に關する事項
三、住居に關する事項
四、一家整理に關する事項
五、一般管理に關する事項
六、家族に對する注意に關する事項
七、生產業に對する婦人の職分に關する事項

特に斷つて置きたい事は、以上の各部門中には、通常我が國に行はるゝ家事科の各部門に屬する事項の外に、他の異つて居ることも含んて居ることてある、即ち三に屬する事項中には住居即ち土地及家屋の貸借及賣買價額租稅並に火災保險等に關することも、五に屬する事項中には一家主宰者に直接影響する民法の一部の如き、市又は州の法律に關する事も、六に屬する事項中には一家が州又は市郡に對する衞生的責任及び負擔に關することも、七に屬する事項中には婦人の職業及給金、公民としての婦人、即ち市民府民又は國民としての婦人の本分に關することも含んて居ると云ふことが、次節に述ぶる我が國の家事科の範圍と其趣を異にして居るのてある。

要するに外國に於ける家事科の範圍は以上述べたる七つの部門に屬する實用的及び科學的工藝的事項て且經濟學的社會學的方面のものてあると概言することが出

來る、今次に之を各種各階級の學校につきて少しく細說して見ようと思ふ。

(二)小學校

小學校に於ては何の國でも裁縫と料理を主としてやつて居り、之に附帶して、洗濯掃除の如きを授けて居る、看病育兒の如きは決して重要視されては居ないのである、今之を獨國チャロテンブルヒて使用して居る教科書で例示して見やう。

一、住居
二、滋養
三、食品
四、料理用具の掃除
五、食事用布片の整理
六、災害に對する處置(應急手當)
七、家計簿記

と云ふ題目であるが其內容の精細は更に教材論の所で論述すべきてある、之を概言すれば、家事教授は何れの國の小學校でも其必要を認めて、之を課して居るけれども、其範圍は我が國の高等女學校で授けて居る家事とは多少異つて居て、主として裁縫、食物、衣服、住居の範圍に屬する一部分てあると云ふことが出來る、然しながら其範圍も內容も實は試驗的てあつて、研究時代だと云ふべきてある。

(三)中等學校

中等學校に於ける家事は理論と技術との關係上小學校に於けるそれよりも組織的になつて居るのてある、即ち家事的理科と家事的技術とを密接に相關せしめんと企圖せる傾向は、何れの國てもつて、先づ第一に一方に於ては同一てあつて、

一、裁縫
二、衣類製造、服裝
三、附屬品類製造(婦人帽類)
四、料理及獻立

等は必ず互に關聯して他の學科より分離し本科中にて之を課して居る、尙之に加ふるに

五、家の管理

六、家庭用什器(家具)

に就きて課する外、理想開拓上の必要から

七、家庭生活及國民生活を愛する精神

八、生產業に對する見識及素地

九、婦人の自活體に對する責任

といふ方面の教養に力を注いて居るのである、之と同時に家事的理科は他方に於て

一、美術

二、理科

三、產業發達史

四、地理

五、數學

六、家庭衛生

七、食物化學

八、營養論

の研究を課して兩方を相互に關聯せしめて居る、此點に於て我が國に於けるものより學術的であつて、且社會的國家的であると云ふことが出來得ると思ふ。

之を要するに中等學校の家事科の範圍は衣服(裁縫を含む)食物、住居、家事衛生、一家の管理及び家庭と社會との關係であると云はれるべきである、勿論小學校のそれと同一範圍のことでも、其內容の擴張され、且充實されて居ることは言ふ迄もない。

(四)大學

大學に於ける家事は、中等學校の課程を受けて更に根本的で學術的であると見ることが出來る、先づ大體から云へば

一、纖維の顯微鏡學的操作

二、纖維の化學的試驗

三、纖維の染色及び成纖

四、衣類圖案

五、室內裝飾

六、家具

七、家事經濟
八、手藝

の範圍に關する事項であつて、此外多數の大學では、一般化學や生物學を課して居る外に、又此家事科に關聯せしむるの必要上より、應用課程とても見做すべき食物化學、營養化學、衛生に關する研究を課して居るのである、然しながら、我が國に於ける家事教授は此程度の學校では女子兩高等師範學校及私立の日本女子大學校位のもので、女子普通教育の學校には適用すべきでないが、家事科の範圍並に之に對する態度を決定する爲めの參考としては、充分の價値はある。

(五)師範學校

師範學校に於ける家事科の課程は、國により又學校によりて多少の相違はあるけれども、何れにしても、卒業生には教員免許狀を與ふるか、學位を授くるか、或は此兩方共に授くる學校もある、故に家事科は單に家事科教師の養成をのみ眼中に置いて居るではなくて、家事科の高等なる研究をなさしむると云ふことも亦其目的の一であると云はなければならない、今其普通に行はるゝ教科について示せば

一、美術
二、食物及び纖維試驗に適用せる化學
三、生物學
四、細菌學
五、衛生學
六、食物營養論
七、割烹
八、手藝
九、裁縫
十、一家の管理
十一、洗濯

等であつて、此外に家事經濟も加へられて居ることもあるし、又家事關係事項として化學中には食物化學、營養化學及びあまり多數の時間を配當しては居らぬが、生理化學をも含めて、應用教科として教へられて居るのである。

以上の內生物學及び細菌學は、通常我が國に於ても獨立した一教科目として教へて居るが、食物及び纖維の試驗に適用せる化學、食物化學、營養化學及び生理化學をも獨立せる科目として取扱ふべきか、或は化學中に編入して一般化學を終りたる後に特別化學として課すべきか、將た又家事中に之を込めて適宜之を課するを以て價値ありとすべきかは、研究の餘地があることゝ思はれる、故に之を除外して考ふれば、師範學校課程の家事は、其範圍は矢張り衣食住家事衞生であつて、其內容は學術的であると見做すことは出來る。

第二節　我が國に於ける家事科の範圍

(一)小學校

我が國の小學校に於て現今行はれて居る家事科の範圍については、其尋常小學校に於けるものは讀方教授に於て國語科中で授けるといふのであるから、其範圍を論ずることは出來難い、然らば高等小學校に於て女子に課する家事科の範圍は果して如何であるか、此問題を解決するには大正三年四月文部省が發行した高等小學理科家事教科書の內容を提供すればよいのである、如何となれば此教科書は國內殆全部の高等小學校で使用して居つて、本科教授の標準となつて居るからである、そこで同書は二卷より成つて居るが、其教授題目を拔萃して見れば左の通りである。

第一學年……計三六時間

第一學期……一四時間

住居
住居の修理保存
戸締及火の用心
掃除
石鹼洗ひ及び灰汁洗ひ
疊建具の手入
木製器具の手入
金屬器、陶磁器、ガラス器の手入
雜具の手入

第二學期……一四時間

衣服
衣服の整理保存

家事教授法

白布類の洗濯
衣服の洗濯
しみ拔法
寢具

第三學期……八時間

看病の心得
藥用及び介抱
病人の衣食住
應急手當

第二學年……計三六時間

第一學期……一四時間

割烹の心得
野菜の切り方
野菜の煮方
味噌汁の作り方
飯の炊き方澄汁の作り方
魚の拵へ方及び煮方
魚の燒き方

牛肉の調理
酢の物の作り方
鷄卵の調理
漬物の漬け方
病人の食物

第二學期……一四時間

飲食物
献立
食物の貯藏
飲料水
嬰兒の取扱
哺乳嬰兒の飲食物
小兒の衣類

第三學期……八時間

小兒の疾病
小兒の躾け方
一家の經濟
善良なる家庭

今之を通覽すると、第一學年は住居、衣服及看病で、第二學年は食物、育兒及家事經濟事項であるから、小學校に於ける現行の家事科の範圍は、衣食住、看病、育兒、經濟であつて、食物に對して最も多くの時間を配當してあるから、特に食物に重きを置いて居ると見ることが出來る。

(二)高等女學校

高等女學校の家事も亦四十四年七月二十九日改定の同校教授要目中の家事科の範圍を見れば、我が國に於ける普通の高等女學校の家事科の範圍を推定することが出來る、如何となれば公立高等女學校は此要目を標準として居り、又家事教科書類も亦之に準じて出來上つて居る樣であり、尙又私立高等女學校も此要目に準據し此教科書を使用すると云ふ狀態であるからである、そこで其要目は如何なるものかと云へば、其大なる題目を列擧すれば左の通りである。

第三學年……毎週二時

家内の整理
家事衛生
飲食物の調理
實習　洗濯、張物、しみぬき、掃除、磨き物、飲食物の調理等

第四學年……毎週二時

育兒
養老及び看護
家事經濟
家計簿記
實習　前學年に準じ更に應急手當を加ふ

修業年限五個年のものにあつても、其配當が少しく違つて居るけれども、其範圍は四個年のものと少しも違つては居らない、要するに其内容及取扱方は、小學校と違ふべきは當然であるけれども、其範圍は衣食住の供給、衛生、育兒、養老、看病、家事、經濟事等であつて、範圍としては養老を附加したと云ふ點が違つて居ると云ふことが出來る。

(三)實科高等女學校

已に家事科設置に關する歷史的回顧の條に於て述べたるが如く、實科高等女學校が普通の高等女學校に併置され、又は獨立して設立されたのは頗る輓近のことであつて、一般の高等女學校の教育が目下研究的時期である内でも、家事科が特に此氣味が

あると予輩が信じて居るが、同樣の筆法で實科高等女學校の理科及び家事に就きて更に一層研究的試驗的時期であると云ひたいのである、然しながら之に關する意見を述べるのは本節の目的ではないから、先づ法令上指示されて居る範圍に就いて考へて見よう。

そこで明治四十四年七月二十九日發布の同校敎授要目中の家事科の部を見ると、高等女學校の第三學年及び第四學年に準じ、實習の敎授を增す可しと示してある、して見ると當局から示されてある家事の範圍は高等女學校に於けるそれと全く同一であつて、唯實科だから實習の敎授を增せといふのであると考へなければならない。

(四)女子師範學校

明治四十年四月十七日發布の同校敎授要目家事科の部には左の如く示してある。

第三學年……毎週二時

家內の整理

高等女學校のそれに比して要目中に、衣服什器の選擇及保存の二項を省き其終に次の如く記してある。

衣服什器の整頓に關聯して其選擇及保存に關する事項を授く可し。

家事衞生

高等女學校に於ける要目と同一だから省略する。

飲食物の調理

前同斷

實習

前同斷

第四學年……毎週二時

育兒

高等女學校のそれに比して小兒の衣服の下の運動及疾疾以下を省いてある。

養老及看護

衣食住の注意、起居の介抱、藥用、傳染病及其豫防、消毒法、危篤者の取扱、救急法

とあつて高等女學校のものに比して順序と名稱とは異つて居るが、實質は全く同一であると見られる。

家事經濟

家計簿記

實習

飲食物の調理救急法の演習等。

して見ると其範圍要目等殆ど高等女學校に於けるものと同一なのである、救急法の

演習が實習に加はつて居ることについては、前章に於て我が國家事教授發達の歴史的回顧を述ぶるに當つて記したから、こゝには之を省くのである。

第三節　家事科の範圍に對する斷案

(一)範圍を斷定するの必要

如何なることをなすにも、先づ第一に爲る仕事の範圍が限定せられ、第二に其範圍てゝ二の目的の確定は次章に論ずることとして、茲に第一の家事科の範圍を限定せなければならない、尤も吾人の日常行つて居ることの内には、習慣上から盲目的にやつて居ることが少くないのである、極めて卑近な事實に就て云へば、朝起きて顔を洗ふことや食事後に茶又は湯を呑む樣なことは殆ど習慣的で、一々の場合に理論上より其目的を追求し意識し、然る後に理法に適つて居るとの斷定の下に之を行爲に表はすと云ふ樣な仕事てはない、其始めは理論的追求の斷案を求め、之を意識して行ひしてとなるべきも、何回も何回も之を繰返して行ふ樣になれば、無意識に之を行ふことになり、而かも之が理法に叶ひ範圍を脱せず、目的を失墜せず、所謂心の赴くまゝに行ふて則を越えずと云ふ樣な譯てある、然しながら始めから全然盲目的ては何等の價値もない盲働てあるから、必ず少くとも一度は之を理論上より追求論斷して、之を意識しながら行動せなければならない、茲に之と關係した甚面白い話が大正五年一月二十六日發行の萬朝報紙上に書いてある。

遞信省技師工學博士廣部德三郎氏は、する事、なす事凡て研究的態度を採つて居るので知られて居る、曾て嚴君を鄉里から迎へた時、眞宗信徒たる家てありながら、佛壇がないので嚴君頗る不平、早速しつらへよと申しつけた、孝心深い博士は其を退ける事は勿論てきないが、さりとて無意義に設けることは研究癖ある博士の心が許さない、依て二日二夜冥想し先づ、信仰がなくて佛壇を設ける事の可否から研究し始めて、人生は果して神佛の存在を認むべきてあらうかに及び、進んて人は萬物の靈長として恥ぢない程完全に發達するものてあらうかと云ふ事に逢遇して、之を專門の電氣に就いて思索して見ると、人類が電氣を應用して幾多の事業に利益を得ては居るが、其は自然界の大から見ると細微な量たるに過ぎない、さすれば不

完全な人間の向上したるものと認むべき全智全能の佛や神の存在を信じなくてはならない、此見地からして阿彌陀でも、ゴッドでも、自分の信ずる神佛を祭ることが至當であると云ふ結論を得た、其から博士は早速佛壇を設けて嚴君を喜ばせたのみでなく、自身は必ず寢に就く前に低聲で念佛を唱へると云ふ立派な信者となつて了つたさうだ。

之は極端な一の逸話に過ぎないが、始めから盲目的に仕事をするよりは此種の心懸が必要だと思ふ、そこで其後は習慣的に行ふことが出來得る樣にならなければならない、特に教育上の仕事の如く大切な活きた人間を相手にして之を仕上げ行く場合の如きは尙更のことで、一度少しなりとも之を盲目的に習慣的に行つて仕舞つたならば其影響する所極めて重且大なるものだから、若し其行つたことに誤りてもあれば取返しのつかないことになる、然し始めから自分で、どれ丈けのことを何故にと云ふ樣に考へてやつたことなら誤なきに庶幾いのであるけれども、始めから他律的で他國でやつて居ることを眞似てやるとか、他人のやつて居ることを模倣するとか、或は一般の從來のやり來りに盲從するとか云ふ樣なことをば、他國と自國とは國情民度が異り、他人の仕事必ずしも熟慮を經たるものと云ふことが出來難く、從來の慣習必ず現下の事情に恰當するものでないから、動もすれば大なる誤を招くことが無しとも限らない、現今我國の教育的仕事について考へて見ると、世の多くの教師は此他律的態度の上に立つて居るやの嫌が少からずと斷言せざるを得ない事情がある、例令ば國定の教科書又は文部省認定の教科書を採用して、これを一ヶ年四十幾週に配當した細目を編制して其通りに教へて居る、何故に之れ丈けの範圍の教材を取りしか、何故にかゝる順序に排列するを可とするか、何處が此教材の主點であるか、本科の教授に於て如何なる觀念概念を造り上ぐれば其本領を完ふせりと云ふべきか等につきて、至細に研究熟慮して根本問題を捉へ之に觸れると云ふことが比較的少なくなつて居るではあるまいか、若し果して少しても斯る態度があつて、單に教科書があるから其範圍について其事實を教へて居ると云ふが如き不見識なことがあるなら、由々敗怠慢で、人の子を教へ、第二の國民を仕立上げる爲めの教育者としては、何とも云ひ樣のない不安な限りである、特に家事科の樣な比較的に新しく起つた而して未だ發達の幼稚な、而して未だ整理されない組織づけられない、而して目下世界各國とも

研究的試驗時代とも稱すべき教科に於ておやてある、例令ば現今の我國に於ける高等小學校の家事の範圍は、當局から標準として示されたのては、衣服、食物、住居、看病、育兒、家事經濟てあつて、高等女學校、實科高等女學校及女子師範學校ては、此外に養老を加へてあるが、過去はともなく現時現代に於ての世界列强の間に介在する一國の小單位とも見るべき家庭の健全發達を期する上に、果して此丈けの範圍内からだけ適當な教材を選擇して教授するのがよいのか、將た又一家の對社會關係などから考へ、此外に主婦として心得させなければならないことて、他教科目中に編入することの出來難いこと、即ち家事科にて教へざるべからざる新なる範圍のことがなからうか、換言すれば從來の範圍内のものて省略すべきものはなからうか、又新に加ふべき範圍のことはなからうかと云ふ問題は、活動變遷極まりなき社會を見るにつけ、絶えず吾人の眼前に往來するてはあるまいか。

元來之は家事科の範圍問題に就いて許りてはない、他の凡ての教科について同樣てあり、又學校て課すべき教科目は何々なるべきか、又其教科目を如何に配當すべきかの問題に就ても亦同樣てある、同一事情の下に同一原因は同一の結果を持來たすと云ふのは、因果律の命ずる所てあつて、千古動かすべからざる所の自然哲學上の一大斷案てある、勿論人事上のことは非常に複雜錯綜して居つて、一見此理法を脱する樣なことがないてもないが、而かも一大斷案としての價値は動かすことが出來ない、夫れ我國に於ける教育の大本は畏くも　先帝陛下の下賜し給へる勅語に明示されてある通りて、炳として明かてあるが、さて吾人教育の任にあるものは此聖旨を奉體して教育の業を實現する上の方法てある、詳言すれば如何なる教科目を如何に配當し、各教科について如何なる範圍を如何なる主義目的にて教授すべきかの問題てある、過去五十年我國は異數の發達をして來たが、過去に於けると同一方法を以て施す現在の教育は將來に於て過去と同一の好結果を持來たすことが出來るてあらうか、因果律の云ふ如く事情が同一ならば同一結果を持來すべきも、今日の我國の對外及對内事情は世界の事情の變遷移動と共に必ずしも同一てない、殊に歐洲戰亂の勃發以來益甚しきものがある、かくの如く事情を異にせる今日に於いて過去の盛運と同一の結果を今後に求めんとせば、同一方法の教育ては不滿足なりとの當然の結論を見出すべきてなからうか、其何種の教科に最も强大なる力量を注ぐべきか、又其教科に於て

如何なる精神を徹底せしむべきかを新に熟慮するの必要があるのてある、斯く考へると教育制度の改造なども必要になつて來るのてはあるが、こは教育行政論てあつて本書の論ずべきてはないが、唯輓近に於て或は全國中學校長會議、全國地理歴史教授協議會等の開催に際して、文部省當局から時局に鑑み將來中學校教育上特に留意すべき點如何とか、時局に鑑み將來地理歴史教授上特に留意すべき箇條如何とかいふ樣な諮問案があつて、それ〴〵討究の上回答があつたことや、學校系統問題とか大學案とか云ふことにつきて當局が專心研究して居らるゝのは、即ち此等の見地から來たのであつて、實に當然なことて國家將來のため、實に此種の研究は喜ぶべきことてある。

教育上の全體に關する大問題に就て、斯くの如くてあるから、吾人は同樣に家事科についても亦之を研究したいのてある、其第一歩としては即ち其範圍問題てあつて、今後に於ける家事は矢張過去に於けると同一の範圍て以て吾人の期待する効果を將來に持來し得るか、即ち其範圍は果して如何と云ふことを決定すの必要がある、然しながら特に茲に斷つて置かなければならぬことは、現今我國の教則として規定されて居る範圍を批判せんとするのてはない、學校の教師としては教則に示されたるものに準據して、完全に之を教ふればよいのてあるが、吾人は職に教育に忠實なる所以として、更に教則の精神を徹底せしめんが爲めに研究せんとするのてあると云ふことてある。

(二)家事科の對象

範圍の斷案を試むるに先き立ち、其必要なる條件として家事の目的物即ち對象は何てあるかを考ふることを要する、然らば家事の對象は何か、曰く家の仕事てある、詳に曰へば一家を整理するに要する一切の仕事てある、然らば家とは何か、吾人は之を血姻關係の者が相集まりて生活する組織的集團を家と云ふ。と解釋せんとするのてある、勿論此集團中には時として家僕、女中等の血姻關係以外の者も入つて居る樣に見ゆる場合もあるけれども、之は家族の本體てはない、附屬物てある、如何となれば此種の從屬者なくとも家としての存立の資格に何等缺くる所がないからてある、次に起る問題は家としては建物即ち家屋が其必要條件てあるか、及び家屋の建設されて居る土地即宅地が必要條件てあるかと云ふとてあるが、嚴密

なる法律上の解釋からは家としては、必ずしも之を容るゝ家屋及び家屋の建つて居る宅地がなくとも家の存在を認容しなくてはならないのである、例令ば一の何々學校と云ふのに就て考へて見ても同樣であつて、學校長があつて職員と生徒とが之に從屬して組織立てられた一の形が學校である、通常之に敷地校舍は伴つて居るけれども、時として其校舍が火災に遇ふて燒失したからとて、其學校が廢滅したと云ふべきではない、矢張かゝる場合には一時校舍などはなくとも法律上の所謂公法人だから、學校の存在を認めなければならない、同樣に家についても必ずしも血姻集團を容るゝ家屋がなくとも家は家であつて、假に石澤が家宅を失つたとしても石澤家は以然として石澤家としての存在を失はないのである。

果して然らば家事の對象とする所は、如上の意義に於ける家を整理するに要する一切の仕事でよいのであるかと云へば、左樣ではない、何となれば如何なる家でも家長は其家族を率ゐて戸口を構へて居る、即家屋に居住して居る、家屋がある以上は必ず之を建設してある宅地もある、そこで家には邸宅が附隨するのは普通であると云ふことになる、依て家事の對象としては此邸宅をも含めたる家を整理するに必要な一切の仕事であると云はなければならない、斯くの如く考へて來ると家事は

一、血姻關係の者が相集りて生活する組織的集團の安全と幸福とを企圖するに必要なる一切の仕事、及び其當然の結果として

二、此集團を容るゝ家屋を整理するに必要なる一切の仕事並に

三、家屋の存在する土地の整理上必要なる一切の仕事。

之れが即目的物即對象となるのである、吾人は此對象に對して如何なる希望を有するか、換言すれば此意味に於ける家に對して如何なる態度を有するかは極めて重要なる問題であるが、そは家事の目的論に關するから次節に於て論究せんとするのである。

(三)範圍の斷案

家事の對象に關する吾人の見解は已に前述の如くであるとすれば、次て其範圍の斷案を下すべきは當然である、然しながら先づ叙述の順序として茲に再び各國に行はれつゝある家事科の範圍を回顧し、之に對して世に行はるる代表的の論議を提供し、之を批判したる後に於てするのが、研究的態度で且穩健であると云はなければなら

ないさて現今行はれて居る範圍を概括すると凡そ左の通りてある。

小學校

外國―裁縫、衣服、食物、住居

日本―衣服、食物、住居、看病、育兒、經濟

中等學校

外國―衣服(裁縫を含む)、食物、住居、家人に對する注意(看病、育兒、養老事項を含む)一家の管理(經濟事項を含む)、家庭と社會との關係

日本―衣服、食物、住居、看病、育兒、養老、一家の管理、經濟

中等學校以上省略

之を通覽すると、日本の高等小學校の家事は裁縫科は獨立して居るから之を別問題として、外國のに較べると看病、育兒、經濟事項が多くなつて居て、中等學校の家事は同樣に裁縫を別にすると外國では看病、育兒、養老事項の要點を家人に對する注意の部門で、病人に對する心得、小兒に對する心得、老人に對する心得として授け居るに止まるが、日本では獨立した家事の一部門として授けて居る點と、外國では家庭對社會關係として其市町村等に關する自治體の心得を授けて居るが、日本では之を家事では授けて居らない點が異なつて居る、そこて今內外各國に行はれて居る全範圍を總合して見ると左の通りてある。

小學校

裁縫、衣服、食物、住居、看病、育兒、經濟

中等學校

裁縫、衣服、食物、住居、看病、育兒、養老、一家管理、家事經濟、家庭と社會との關係

此範圍に對する意見として教育雜誌又は教育研究に關する議席等に表はれたる說は種々ある樣てあつて、吾人が家事科の範圍に對して懷くべき定見の構成上參考とすべきものも少くない、今其主要なる點を次に叙述しよう。

第一は裁縫てある、之は家事教材の範圍內に置くべきか將た又範圍外に置くべきかは殆ど論ずる必要がない、如何となれば裁縫は家庭の日常生活上女子に極めて必要なことてあつても、家事科の名目の下に統合せし事項は、上記の事項中他教科目に於て教授すること能はざるか、或は教授するを不便なりとする事項のものてある、然るに

我國の學校では小學校も高等女學校等の中等學校も、裁縫は獨立した一教科目で、隨分多數の時間を之に配當して居るからである。

第二は看病である、之は理科特に生理衛生と密接の關係がある、由來家事は其部門甚だ廣濶にして且つ理論と技術との二方面を含むから、其教師たるものは基本學科適用學科及び應用學科の凡てに精通して居なければ完全に之を教授することは頗る困難である、若し苟も家事の名目の下に統合し得べき家庭日常生活上凡百の事項を網羅せようとするならば、其部門廣濶になつて來て、限りある一人の教師は其凡ての部門に亘りて精細適確なる研究を遂げ、正確にして健全なる知識と技能とを蓄へ、且絶えず世の進運に伴ふてこれを研き上げて行くことは出來難いことになる、依て他教師の受持つ他教科目に讓ると云ふことは、內容の連絡上より考へても、生徒の理解上より考へても、教授の容易なりと云ふ上より考へても、從つて又其教授の効果上より考へても利益である、此見地よりして看病の如きは之を生理、衛生事項を授くる理科に結付けて、理科教師が之を授くるを最適當なりと云ふ議論である。

第三は育兒であるが、之に關して二樣の議論がある、一は育兒に關する事項は未だ母としての務を理解すべき相當の年齡に達せざる少年子女に、姙娠中の心得とか、產室の設備とか、產時及產後の心得とか、嬰兒の取扱とか云ふことを授けると云ふことは、獨り不適當である許りでなく、殆ど無効ではあるまいか、恰も哺乳兒に無理に米飯を喫せしめんとし、哲學的疑問を有せない者に哲學上の議論を上下する樣なものであつて、特に小學校の兒童に對する家事に於て此感が甚しい、宜しく相當の年齡に達したる日を待ちて母自らが之を教ふるか、又は高等の程度の學校に於てするがよい、又之に關する事項中には教師が學校にて教ふるに不便にして、母身らが家庭に於て教ふるを便なりとするものありと云ふので、他の一は小兒の玩具又は躾方言語といふ樣な心育的方面のことであるが、目下氣儘な生活を續けつゝあつて、今現に或は撓め或は助長せしめられつゝ教育されて居る未成育の子女に向て、第三者に對して施すべき理想的の仕事を教ふると云ふことは不合理である、少くとも或程度迄本人が教育され修養された曉に於て、他人即小兒を躾くる方法を知らしむるのは適當な道理でないか、之を料理法に譬ふれば、未だ食物料理の方法を自己が習得して居らない者に對して、他人に料理を教ふる方法を說くの愚を學ぶものはあるまい、之を軍人に譬ふれば、

昨今入營した許りの新兵に對して、恰も將校を教育する樣に新兵教育法を授くるが如き誤りをするものはあるまい、心身の教養甚しく未熟なる子女に、小兒の心育法を授くるは之と五十歩百歩の差てはあるまいか、其身體養護上學校教育が育兒に關し新に努力せざるべからざることがありとすれば、そは第二に述べた看病と同樣の理由て、理科中の生理衛生に附帶して授くるがよいと云ふのてある。

第四は養老に就てゞある、養老即老人奉養のことは決して其必要を認めないと云ふのてはない、親から自己に自己から子孫に連結したる一家血姻の者が、家族として一家を構成して居るのてあるから子は老親に孝養すべき事項を充分に心得て居らねばならぬことは言を待たない、孝は百行の本てあつて忠孝一致の我國民的精神は、何處迄も之を一途に押通して行かなければならない、然しながら其心身兩方面に關したこと即精神的孝養と物質的孝養とは、共に先づ修身作法て充分に之を授くるのてある、又身體養護に關する特別のことは生理衛生に於て之を課することが便利て且有効てある、元來第二の看病についても縷々述べた樣に、家事は他教科て授けない、又は授けられない家庭の日常生活的事項を統合した教科てあるから、養老事項の如く一方ては修身て充分に之を授け、他方ては生理衛生て之を授け得る事項は、宜しく之を修身理科等に讓つた方がよいと云ふのてある。

第五は家事經濟てあるが、之も第二看病及第四養老に就て述べたと同樣の理由によつて、之を數學に附帶して課するが便利て且有効てあると云ふのてある。

以上列擧し來つた異說を概括すると、從來我國て課し來つた家事科の範圍てある所の衣食住、看病、育兒、養老、一家の管理、經濟事項中て、看病、育兒、養老、一家の管理經濟等は、其他教科に附帶せしめ得べき事項は之を附帶教授し、其家庭の母に任すべきは之を讓りて、學校の教育に於ける家事なる教科目中て課する範圍は、之を其に讓り若くは附帶せしむると能はざる、若しくは之を不可なりとする衣食住に限定するを可なりとすと云ふことに成る、勿論凡ての異論者は斯ふ云ふ樣に結論が一致して居るのてはないけれども、異論者の凡ての意見を總合すると斯うなるのてある、然して此種の議論をする人は、女子教育者以外の人にもないてはないが、新聞雜誌其他の言論に表はれた所ては、主として女子教育特に高等女學校の教育に關係して居る人にある樣てある。

さて此說を熟慮して見ると、家事の範圍を衣食住だけした方がよいと云ふのには、其論據とする所は前述の如く種々あるけれども、

一、看病育兒養老及び家事經濟等を無用視するのではない。

唯家事なる教科の下に統合して、同一の家事教師が、かくも多方面の事項に亘りて教ふるのは數の免れざる結果として、勢其部分部分の事項について深き造詣を蓄ふることが困難である、即包容する事項が多ければ多い丈けそれ丈け局部に對して深く且精しく無くなる筈である、從て其教育の効果を減殺して來ることになる、それよりは寧ろ其効果を大ならしめんが爲め、其等の部門をそれぞれに理科、修身、教育等に附帶せしめて其道の專門的頭腦者に託した方がよいと云ふのである、然るに予輩の考ふる所では、學校でそれぞれに分立して授けて居る各教科目を見ると、

二、各教科目には皆それぞれの特質がある。

特殊の目的を追求し其完全陶冶を期して各教師は奮勵して居る、尤も各教師が各教科目に就て各專門の門戸を張つて互に相容れず互に融通のきかぬ樣にしてしまつては、普通教育としては甚だ嫌ふべきであつて、互に相倚り相助けて教育としての全體の目的を到達せんことを努力すべきは明白なことである、然しながら各教科を互に分立せしめて居る以上は各教科獨特の教育的効果を發揮する樣に其教科の特質に依て働かなければならない、此見解から打算して行くと、理科教授は如何なる目的を追求して居るかと云へば、自然の直觀から出發して主として歸納論理の方式により、實質的陶冶方面では自然を理解し人生との關係を知り、形式的陶冶方面では觀察思考の力を練り、更に情的方面に於ては自然及眞美を愛する情を養ふにあるのであることは、教則上理科の要旨にも示してある通りである、數學教授に於ては公理又は定理を基礎として、主として演繹推理の思考作用と計算とによつて、數理上の問題を解決することや、修身教授に於ては教育に關する勅語の聖旨に基き道德上の思想及び情操を養成し、女子に必要なる品格を具へしめ實踐躬行を奬むるにあることは、其に教則にも明示してあつて極めて炳然たることである、斯くの如く理科や數學や修身では看病、育兒、養老及び家事經濟の根本觀念ともなるべき基礎の理科觀念數學觀念及び道德觀念を充分に養成することに努力はするけれども、之等は國民生活上必須なる方面のことであつて、必ずしも家庭の日常生活に具體化したる所謂家事的事

項を教ぶるのではない、恰も理科は產業の基礎を教ふるが產業其物を教へないのと同樣である、又世には普通教育の諸教科目特に高等女學校の諸教科目を、家事科の下に統合して修身であれ國語であれ將た又地理歷史數學理科等の教授を家事科に引付けて、家庭生活の利用の爲めにすると云ふ家事中心主義を主張する人もないでもないが、こは獨り各教科本來の目的を沒却せるのみならず普通教育本來の目的を沒却した考で、吾人之に贊同し得ざること、恰も普通教育の諸教科目を曾て歷史中心主義の下に統合せんとした主張が誤りであるとして贊同されないのと同樣である、即家事の立場からは看病、育兒、養老等は其理論の外に技能としての意味の技術を要する、例へば繃帶のかけ方、交換の方法、檢溫、病人の狀態觀察、罨法、灌腸、泌泄物の消毒始末法等の看病に關することのみしても、技術に關する事項は甚少くない、之等は理科教師が理科として授くると云ふことは可能であらうか、又假に授け得るとしても理科教授の目的の上からかゝる方面に入つて行くと云ふことは教授上差支ないことであらうか、吾人は先づ一通りの理科なら理科、數學なら數學の教授を終りたる後に於て、應用理科應用數學或は日常理科日常數學とでもして、之を授け之を練習せしむることなら兎も角として、到底如上の方案には贊同することが出來難いのである、故に看病、育兒、養老、經濟等を普通教育を施す學校の何れかの教科目中に授くる必要ありとする以上は、吾人は之を

三、家事科の內で授くるを最も便にして且有効なり。

と斷定せざるを得ないのである。

第六には斯云ふ異說がある、家庭生活に關する精神的方面のこと、即ち家風を維持するとか、健全ならしむるとか、或は改良するとか、又は家憲を何うするとか、一家の向上とか、發展とか云ふことは、元來一家の家長の關與することである、戶主の宰ることである、主人としての男子の劃策すべきことである、女子としての主婦が自己の考のもとに自由に變更し左右し得べきことではない、幼少にして思慮熟せざる、而して一家對社會對國家關係を知悉せざるものに對して、徒に家事教師が輕々に之を說き之を導かんとするのは誤りであつて且危險である、よろしく家事は是等形而上の精神的方面のことを去つて、形而下の物質的方面のことである衣食住の供給整理に止むるがよいと云ふのである、此說によれば一家の精神的方面のことは男子の關與する所で、

女子の關與する所てはない、女子は主婦として須く衣食住の物質的方面のみに參與すべしと云ふのてあるが、これに對して吾人は二つの方面から異議を申立てることが出來る、第一に一家經營の根本精神は祖先の遺風を繼ぐべきは勿論てあるけれども、夫婦相議し相助けて之を定むるのが夫婦の本義てある、夫は唱へ婦は從ふ、成る程斯樣なとも東洋道德の美風には相違ない、然しながら此敎への婦從と云ふのを現時に當嵌めて之を適用解釋して見るならば、理も非もなく從へと云ふのては決してない、旨從旨動せよといふのては決してない、自己の信ぜない、自己の理解せないことに旨目的に從つて、之を運用し之を活用して家庭に有効ならしめ、一家將來の運命を開拓し、子孫百年の謀を立て、國家の期待に應ずるとは斷じて出來難い筈てある、故に從ふと稱するも、之は夫の唱ふる所を理解したる服從てなくてはならない、即ち自己の自覺せる服從てなければならない、此自覺的服從てあつて始めて運命の開拓百年の謀をなすことが出來るてあらう、換言すれば主婦たるものは此種の方面の家庭經營事項に對して、一定の理想一定の見識を持つて居て、家長たるものに建言し相議し諮問に應じ、倶に共に相携へて一家を提げて行かなければならないのてある、夫唱婦從だから家風の改良家事の向上などの如き精神的方面のことは、主婦の任務てないとして之を敎へないと云ふのは、餘り古風てあると思ふのてある、第二は家事的範圍と見做されて居る女子の任務中て、單に形而下の物質的方面のみから打算してやり得る事項と云ふものは殆ど無いてはあるまいか、例へば衣食住の衣に就て考へて見ても、衣類の目的は自身を保護し禮容を維持するにあるのてあるが、其衣類材料を選定するに當りては、單に衞生上の見地と經濟上の見地とからのみ選定して、其織物の地質、組織、色杉、模樣等に伴ふ表情が着用者の品位、禮容、季節、場合等に適合するや否やの精神的方面を度外視すると云ふことは甚しき矛盾てある、又育兒に就て考へて見ても女子が子を產み之を育つるのは自然の理て極めて重要なる任務てあるが、姙娠の當初に於ける貽敎から始まつて、乳兒期、幼時期を經て靑年期を過ぎ、獨立せる人間と成る迄の母の敎育から、精神的方面を取去つてしまつて物質的方面の保育だけだとして考へて見たならば、子女の將來は實に慘たるものになり果てて仕舞はなければならぬ、賢母の下に偉人を生ずるとか、家貧しうして良妻を思ふとか言ふことは無意義になつて、所謂良妻賢母主義が過半其價値を失墜して仕舞ふことに成るのてある、故

に吾人は家事教授に於て、

四、一家經營上の精神的方面の事項を省略することは不可なり

と斷言せざるを得ないのである。

然しながら茲に一つ考ふ可きことがある、それは修身科に於て家に對する務めと云ふが如き事項のもとに、一家の意義家風家憲、一家の向上發展と云ふ方面のことを授けるならばそは別問題であつて、家事科では教科目相互の連絡上此部分のこと丈け省略すべきは勿論である、けれども衣食住等の部分の精神的部分をも同時に省くことは不合理である、又高等女學校に教育科と云ふのが隨意科になつて課して居るのを補習科などで往々見るところである、又女子師範學校では教育科は必須なる重要學科である、かゝる場合に於ては育兒上の心育に關することは專門の教師が精しく之を授け得ることで、又現に課して居るのである、現に著者の奉職して居る學校の附屬高等女學校では、補習科生には教育として兒童心理學から始めて組織的に立派に教へて居る、故に此種の生徒に育兒を課するとせば、當然其精神的方面即ち心育は省略してよい譯である、然し之は補習科のことであつて本科生は悉く補習科に入學すると定まつて居らない以上は、女子師範學校以外は全然此心育の方面を省略して可なるものなりと斷言されない、唯本科生は年齢未だ少くして之を授くるを不適當なりとする、故に育兒としては身體養育のことのみに止め、心育的事項は補習科に入れる生徒に限り之を學ぶ樣な配當にするならば、又別問題である。

最後に尙一つの問題が殘つて居る、そは外國の家事で授けて居る一家と市町村等の自治體に關する對社會事項を課すべきや否である、一體我國の樣な立憲政體の國では其男子たると女子たるとを問はず、立憲政治の何たるかを解して居らねばならない、縣郡市町村組合等の自治體の意味は何うてあるか、各種議員の意義職責から、議員選擧の本義、自治體に對する義務又は權利、學校組合、衛生組合、町内又は村内組合等に對する各般の義務等を充分に心得て居るてなければ、一家は安全に存立するものてないそれのみならず自治體が存立し活動しない、從て國家の秩序盛衰に影響して來ることが明かてある、然るに我國の現狀から推定すると、果して此等憲政自治に關する思想は充分に國民に徹底して居るてあらうか、少くとも各戸各家が是等自治機關に對して直接必要な範圍のことが心得られて居るてあらうか、吾人は遺憾ながら心

得られて居らない部分が少くないと云はざるを得ないのである、例令ば各種議員の選擧に際して少からぬ違犯者が表はれたり、納稅を完ふし得る資力ある人でも其期限を重要視しなかつたり、自家の一時の誤りたる便宜の爲めに公衆衛生、社會衛生を度外視したりする樣なことが往々發見されるからである、こんな理由からか近時憲政の理解を必要なりとして、頻に其普及徹底を唱導し、或は青年會、學術講演會、遊說會等に於て力說しては居るけれども、普通教育を施す學校に於ては特に此方面に關する新たなる企圖を見ざるを遺憾なりとする、此意味に於いて一家の主婦たるべきものに、少くとも一家對各種自治機關の關係を理解させて置くことは、憲政の發達上極めて重要なことであつて、取りも直さず邦家の發達上極めて重要なことであると考ふるのである、然らば家事科で之を、授くべきであらうか、著者は我國の普通教育の學校に於ては、修身とか地理歷史の教科で授くるを最も適當だらうと思ふ、如何となれば先に論述した看病育兒の樣に、技能に關する事項を含んで居らないからである、然しながら對社會關係といふも、憲法とか民法とか云ふ樣な、八釜敷ものを逐條授けよと云ふのではない、唯其大體の必要なる組織及精神と必要なる個條とは是非知らせたいのである、加之近隣組合、親戚知友との交際及義務と云ふ樣な方面のことも含むのである、故に修身又は地理中の總論とても云ふべき部分即ち政治地理の意味で授くることは少しも困難でなく、又理解されないこともないと考へるのである、帝國主義の教育、國家主義の緊張した教育を特に必要なりとする現時に於て、單に倫理學、地理學の樣な授け方をするよりは、國家的に具體化した授け方をすることは必要であると信ずるのである、故に外國に於ては事情が違ふから此種のことを家事科で授けて居るとしても、我國の學校では

五、一家と自治體との關係は家事以外の教科で授くるを可とする

のである、勿論國語の內などで、之に關する事項を書いて知らしむることの、現時も行はれて居ることは、世の教育者の善く知つて居らるゝことと思ふ。

之を要するに我國に於ける普通教育の學校の家事科の範圍としては、

六、高等小學校にありては主として衣食住に關することを課し、

看病、育兒、經濟に關することは基礎觀念の不足から、之を課しても殆ど機械的で理解にならない患があつて、其効果が甚だ貧弱だと思ふから、省略したらよからうかと思

はるゝのである、高等女學校、實科高等女學校、女子師範學校等の七、中等學校にありては衣食住、看病、育兒、養老、家事經濟、一家の管理等に關することを課し、

一家對社會關係等は他教科目で之を授くることゝし、就中衣食住に重きを置き、看病、育兒、養老は現今世間一般に行はれて居る樣に、家事教材の半ばを之に費す樣なことをせず、其他教科に連結し得べき部分は之を連結せしめ、家庭の母に讓り得べき部分は之を讓り、唯他教科と家庭とに於て教ふること能はざる部分のみを一括して家人の養護と云ふ樣な總括的題目の下に、之を一括して授くる樣にしたいと思ふのである、換言すれば以上の所說は其內容上に於てこそ多少の差はあれ、大體の範圍に於ては現行の家事とあまり違つたことはないことになるのであるが、唯小學校の家事特に育兒の如きについては、著者は前記の如き意見を有して居るが、之に對しては尙世間幾多の有識者と共に研究するの餘地があることゝ思ふのである。

第二章　家事教授の教育的効果

第一節　家庭生活に對する吾人の態度

家事は家及之を容るゝ家屋並に家屋を建設せる土地を對象とするものであるが、此家及邸宅に關して教ふる家事の目的を論定するに先だちて、吾人は家事教授に對して如何なる教育的効果を期待し居るかを考へなければならない、此期待を論述するに先だち、先づ吾人は家及邸宅に對して如何なる態度を有するかと云ふことを考へて見ることは自然の順序であると思ふのである、即ち態度から効果を、効果から目的を結論したいのである。

扨て家事の對象は家と之を容るゝ邸宅との結合であるが、之に精神的結合と物質的結合との二方面がある、故に吾人は之に對して精神的要素と物質的要素とを認め、此二方面に向つて種々の態度を持つて居る、即ち精神的方面では道德的態度と審美的態度とであつて、物質的方面では利用的態度と向上的態度とである。

一、道德的態度

家は親子、夫婦、兄弟、姉妹の血姻關係を有する者が結合されて居つて、親子は相敬して

よく孝養し、夫婦は相和してよく睦び、兄弟姉妹は相友としてよく愛し、長幼の序亂れず道義こゝに行はれて和氣洋々たる內に精神的化育を遂げ、上は祖先に繫がり下は遠く子孫に連りて現今の我身を保ち、玆に祖先に對して崇高なる敬虔の念を專らにすると同時に祭祀の禮を忘れず、斯くの如くにして、古來我家族制度がよく一家の美風を造り、一國の美風を濟し來れるものである、忠孝一致は實に我國の大道にして實に人間百行の根元である、吾人は家にありて此道德的態度なかるんか、家族の集團は彼是互に相食し禽獸の群と殆ど擇ぶ所なきが如くであるまいか、然るに孝道、和親、友愛の道義行はれ、禮讓流布し、敬神祭祀の儀ありて、一家は始めて意義あるものとなり、人道發源の本となるのである、我國人が家に對する此態度に於て他國人と大に其趣を異にする所があると思ふのである。

二、審美的態度

人が其家庭生活が整ふて來て、道德的態度て之に對する樣になると、之と同時に審美的態度て之を眺むる樣になるのてある、而して之に依つて生じたる感情は、又は單獨に或は道德的感情と結び付けられて、文學的又は藝術的作品となりて表はれ、或は高尙清楚の品位を人に與へ、又は溫情閑雅の風姿を人に與ふることとなつて來て、家族の性情の化育に至大なる効果を及ぼすものてある、彼の前庭の奇石相連なる傍ら池水靜に流れて青松四時其綠を失はざる所に、春每に忘れもせて花を開く梅櫻の枝を交ゆる、或は後庭の花園に紅き白き或は黃なる、名も優しきダリヤ、チユリツプ、シネラリヤ等の咲き誇りたる、朝な夕なに雜草を拔き水を灌ぎて仁草木に及べる、さては床間一幅の書畫よく無限の趣味を物語りて花瓶に挿せる花の風姿と相對せるなど、數へ來ればそれ豈數員の紙面よく之を盡し得べきてはない、是等はよく我が淳美なる家庭生活に於て、其家族制度が我が國民性の基礎を道德的態度と共に形造るものてはあるまいか、斯くの如く觀じ來れば、一家に對する吾人の審美的態度は、決して輕々に看過すべきものてないことが明かなのてある。

三、利用的態度

人類は自然界を利用せんとする態度は、一家の生活上日々衣食住其他一切の物質及びエネルギーの供給を自然物及び自然現象から求むるばかりて無く、家庭生活以外、農工商漁業等の殖產業及醫術、交通、通信、軍事等凡て同樣てある、然して此利用の最も

巧妙にして最も遺憾なきことが、其國の隆昌を致す有力なる一要素であることは、今更新らしく極言する必要はあるまい、之と同一理由によりて、其利用の巧みなる家庭生活を營爲する一家は、矢張隆盛を致し其生活が安全である譯である、勿論吾人は家庭生活上、自然物及自然力を其儘衣食住等に供することは出來難い場合が甚だ多いのである、尤も昔時未開の時代に於ては、或は食物に或は衣服に將た又住居に、自然物を殆ど其儘に使用した樣な時代がないでもなかつたらうけれども、人智漸く開くるに從て、多少なりとも之に人意的加工を施して利用する樣になつて來たのである、故に人意的加工を施すことを工夫する法を知れる人類ほど、其利用の範圍廣く利用の程度高くなつて來て、生活上の便利と安全とを招いて來た譯である、現今社會の經營上自然界の利用されて居る方面を見ると、力學、物性、熱、光、電磁氣から、あらゆる有機、無機物質の關係を研究探明して、社會百般の事項に應用して居る、特に世界の一等國と云はるゝ樣な諸國に於て最も著しく、今後尙如何に其研究利用の度が進歩發達するか殆豫想することが出來ないのである、家庭生活上に於ても亦同樣であるべきであるが、吾人は家庭の日常生活に關する衣食住に對しての利用は、社會生活に對する利用に比して、其社會團體から供給されて居る電燈とか、瓦斯とか、水道とか、工業製品とか云ふ物以外には、比較的貧弱な感があつてならないのである、即ち家庭の範圍內だけて利用を講ずべき事物は、甚しく其研究幼稚にして不完全なる傾向があるのである、之れ前者は其道の專門達人が之に當るのであるけれども、家內事項に對して各戸其通りには行かないからであると思ふ、然し行かないのではあるけれども、行かしむべく利用的態度を充分に維持して居ることは、誰人も之を否定することはあるまい、今後人文の益〻發達し教育彌〻普及して、各戸各人がぞれぞれに相當の知識を供ふるやうになつたならば、其利用法も驚く可き發達を來たして、益〻其生活が安全になつて來るのである、斯樣な譯であるから、吾人は吾人の一身を託する家庭生活に對して、巧妙なる自然界の利用者であるべき態度を以て、常に研究して居り又研究せんことを希望して止まないのである。

四、向上的態度

自然界はすべて發達し進化し向上して行くものである、大きく考ふれば宇宙は全體として其通りである、已に宇宙全體が此大法則に仕配され、此一大進路の途上にあつ

て驀進しつゝあるものとすれば、微々たる宇宙の一塊としての吾人々類も亦此宇宙の一圏に伴なはれて、共に同一進路を進むべきて、又現に進みつゝあることは自然哲學が證明して居ることてある、之れを小さくして動物や、植物や、空中物理學の樣な學問が見付けて居ることを考へて見ても、又少しく大きくして星學や宇宙物理學が論定して居ることを考へて見ても判ることてある、果して然らば其宇宙の一物てあつて此地球表面上に其生を營む吾人は、其生涯を通じて奮勵努力して、自己の應分の力を盡して此進化向上の進運に貢獻すべきは當然の理てあつて、此大傾向と一致するにあらずんば其存在を完ふし其生を維持することが出來ない譯てある。

果して然らば、一家の生活に於てもよく自然界の利用を勉むると同時に、一家の生活の向上的態度を持すると云ふことは亦當然のことてある、即ち吾人は自然物及び自然現象を家庭の日常生活に應用せんことを勉むるのみならず、常に自然界の間に行はるゝ理法を探究し、之を家庭生活に應用せんが爲めに絶えず發明工夫の能力を習練して、生活能率を大にし生活効果を増さんことを勉めて居るのてある、文明の度未だ幼稚なる人類にあつては、已に述べたるが如く自然物を其儘に使用するに止まつて居るから、其生活能率は甚だ小にして頗る低級たるを免れないことは、地理や歴史を一通り學んだ者のよく知つて居ることてある、然るに人文の進むに從て、更に自然物の外に自然現象をも次第に利用する樣になり、進んて自然界に行はるゝ理法を探明して之を日常生活に應用すべく、絶えず發明工夫の腦漿を絞つて居るのてある、斯くの如くにして其生活能率が増大せられ生活効果が廣大なるものになつて來るとが、我が國の過去五十年の變遷を回顧して見ても明かなことてある、特に生存競爭の劇甚なる現代に於ては、一歩ても此趨勢に後るゝならば所謂生存上の劣敗者となつて慘たる最後を招がずに居られないのてある、是等の傾向は獨り物質的方面に於てのみならず、精神的方面ても亦同樣てあるから、物質精神相携へて次第に家庭生活の發達進化を來たし、益〻其能率効果の増大を招かんが爲めに、吾人は常に健全なる向上的態度を維持して居ることが極めて必要なることてある。

第二節　教育的効果に關する吾人の見解

一、効果の二方面

吾人の家庭生活に對する態度は已に前節に述べ來たつた通りてある、故に家事教授は此態度に滿足を與ふる樣なものてなければならない、從て其教育的効果を此見地から解釋すればよいのてある、今次に實際の教育上の便宜から先づ之を二つの方面に區別して述べようと思ふ。

知識技能に關する教育は、實質陶冶と形式陶冶との二つの方面から考へられるのてある、實質的陶冶と云ふのは教授した事項其のものが直接に用立つ樣なことを理解せしむるのてあつて、形式的陶冶とは或る事項を教授することに依つて生徒の精神的能力を練磨することを云ふのてある、例令ば白木綿足袋や白木綿手巾の洗濯仕上法を授くれば、他の白木綿物てある襦袢とか、シーツとか、作業服とかの洗濯仕上法も自分から了解し、又實際之を洗ひ且仕上ぐることが出來て用立つものてあるが、斯る教授をなすと同時に、何故に斯る洗濯劑を用ひ斯る順序方法を採らなければならないか、若し此順序方法を採らないならば、結果に如何なる惡影響を來すてあらうかと云ふ樣に、生徒の直觀又は考察に訴へて、觀察推理の思考作用を練磨させることが出來るものてある、前者の如き實際に授けた知識技能其物が用立つ樣な教授の作用を實質的陶冶と云ひ、後者の如き生徒の或精神能力を練つて其練られた精神作用はやがて幾多の他の事項に遭遇して觀察思考を誤らず判斷行爲する樣になる、斯る教授の作用を形式的陶冶と云ふのてある、故に此兩者は別々の教材によつて別々の時に行はるゝものてなく、多くの場合には或教材を取扱ふ場合に、實質陶冶を行ひながら形式陶冶を行ふものてあつて、形式的陶冶は決して實質的陶冶を離れて獨立して存在し得るものてはなく、又實質的陶冶は形式的陶冶を離れて其効果を完ふすることは出來ないものてある、畢竟教授の作用を考究上の便宜から之を二つの方面より見ると云ふに過ぎないのてある。

(二)實質的陶冶方面より見たる効果

吾人は家庭に對して道德的態度審美的態度及び利用的態度向上的態度を有つて居ると云ふことは已に之を述べ、且家事教授の効果は此態度に對して滿足を與へねばならぬと云ふことも亦已に述べた通りてある、依て此効果を實質的陶冶と形式的陶冶との二方面に分ちて論究せなければならないのてある、先づ實質的陶冶から見て、

第一、家事的知能を修得し之を運用することによりて、家庭生活に便にし且一層安

吾人の家庭生活の物質的方面に屬して居る主なる事項は、衣服・食物・住居・看病・育兒・養老・經濟の大部分であつて、衣服には選擇・調製・洗濯・色揚・整理・保存等の事項あり、食物には食物の必要・食素・食品の性質・作用・貯藏・食物の料理及食物の獻立・保健食料・食料計算等に關する要件並に方法があると云ふ樣に、其細目に渉り一々之を列擧し來つたならば、日も亦足らざるべきである、然るに從來我が國に行はるゝ家事は、其主婦により自ら處理せらるゝと、女中炊婦の如き分業者によりて行はるゝとを問はず、自然科學的知識を有して之を應用すると云ふ企ては極めて少なく、單に經驗的知識や慣習的形式にのみ準據して之を處理し、殆ど利用進歩の形成を認むることが出來ないのである、其甚しきに至つては、相當の教育あり見識ある一家の主婦であつて、自ら衣食住のことに日々關與することを以て自己の品位を下落せしむるとても考へて居るためか、全く無教育な女中下婢等に一任して置いて敢て恥ぢず、日用品の價額すら知らざるを以て上品なりとするの、誤まられたる東洋的思想に捕はれて居る者も無いではないと云ふことである、豈歎かはしきの至りではあるまいか。

一家は國の單位にして人間活動の源泉なることを知悉し、人口六千萬其半數は此等の任務に當り其發達進歩を圖るべきの婦人であるに係はらず、他の半數の男子が企圖して居る產業・工業・漁業・軍事・交通・醫術等に比して殆ど何等の進歩發達の稱揚するに足るものがないのである、偶々家庭生活の擴大され充實された樣な感があるのは、徒に和を排し洋に就くか、儉を離れて奢に赴けるに依つて斯く見ゆるのが多く、我民族的習慣・體質及國產的關係並に家產の程度等より考へて、未だ決して其生活効果が充實せられたと云ふことが出來ない、此の舊來の方法を盲目的に墨守するか、外來の方法を模倣的に採用すると云ふ兩極端の遺り方であつては、眞に我が國現下の家庭の要求に適せるものだと認むることが出來ない、健全なる國民的精神は健全なる國民の身體に宿り、健全なる國民の身體は家庭生活上家事的知能の運用如何によりて左右せらるゝことが極めて大である、大に用ひんとする器は先づ堅固に之れを造らざるべからずである、世界の列强互に相對待し相競ふの時に方つて、內に外に吾人の力を極めて活動せなければならないことが甚だ多いのである、之れ先づ吾人の身體を堅固に造らざるべからざる所以である。

見よ我國民の體格の變遷如何を、今之を壯丁檢査の結果に徵するも、年々其成績の低落するものがあつて、疾病率に於て增加し身長度に於て減少すると云ふてはないか、僅に女子の體格に於て近年稍〻發達の見るべきものがあつて存するのは、吾人の意を强ふするに足るに過ぎないのである、之れ果して何の爲めであらうか、予輩の考ふる所では、所謂生活難の結果殆ど粗食弊衣茅屋に其身を託し、他を顧みるに暇もなく、漸く其生活を持續するに止まつて、過度に其心身を勞するの結果が其主要なる原因をなすのであると思考すべき理由があるのである、之から考へて見ても、此危急を救濟する爲に、家事整理の任務に方るべき婦人は、大に奮勵努力して、少數の經費を以て多數の効果を收め得べく、衣食住其他一家の處置をなすことの急務なる所以を理解し得らるるものと云ふべきでは無いか。

衣食住其他一家の整理上必要なる知能は、家庭に於て之を授くることが出來難ひ性質のものではない、然しながら一般の家庭に向て之を期待することの出來難い理由が二つあるのである。

第一は徒に舊態を墨守するに止まつて居つて、其生活効果が勞力と經費とに供はないものがあることで、

第二は自然科學的知識の根柢貧弱であつて、其正に然るべき理由を說明することが出來ず、從て其効果の判定を正當に下すことが出來ず、徒に亂用するか盲從するかの嫌があつて、他を導くの明を缺くものがあることで、

第三は所謂生活難に戰ふて奔命に疲れ、殆ど子女の敎養に充分なる注意と時間とを割愛することが出來難い事情があることである。

英人バースタル氏は、其著英國高等女學校(Burstall's English high school for girls, 1907)に論じて曰く、英國の子女に家事を學ばしむるのは、恰も男子をして國を保護するに必要な軍事を學ばしむるのと同樣であつて、女子は須らく一家を保護するに必要なる凡ての業務を學ぶべきである、然して英國の母は其子女を學校に託して家事を學ばしめる所以のものは、其家事的技術よりは寧ろ母自らが敎ふることを難しとする學理を學ばしめんが爲であると、……吾人は家事に對して必ずしも之と其見解及び範圍を同一にするものではないけれども、我が國の母は其子女を學校に託したる以上は、一切萬事皆學校の家事て之を敎へ盡し練習熟達せしめて呉れる者であるとして、少

しも其子女を督して家庭に於て家事を見習はしめ家事を練習せしめんとはせず、然かも學校の家事教授の効果に對して不滿不足を併べ苦言を呈して、三度の米飯すら滿足に炊き得ないと云ふが如きは、甚しく其心得が誤つて居て、學校の家事教授を解せないものであると思ふと同時に、此英國の母の態度は取て以て他山の石とするに足るものであると云ひたいのである。

斯くの如く考へて來ると、茲に一の考慮すべき問題に遭遇するのである、即家事は衣食住看病等に關する知能を授くるのにあるけれども、其知識技能は如何なる程度に迄授くべきであらうか、將た又知識技能何れか一方を特に重しとすべきであるかと云ふことである、普通教育に於ける一教科目の教授は、他の教科目の教授と相待て普通教育全體の目的を到達するのにあつて、かの專門教育及び職業教育と全然其趣を異にして居るのである、例令ば圖畫は眼と手との一致を練習し意匠力を練るけれども、決して畫工圖案家の養成を目的とはして居らない樣に、家事も亦衣類の仕末や食物の料理に關する事項を教ふるけれども、衣類整理業者や料理人の養成を目的として居らないことは明かなことで、何故に斯る材料を用ひ斯る順序によりて操作せざるべきかを、基礎の知識から演繹し之を實驗に訴へて驗證し、更に實習に訴へて之を技術化するのであるから、其技術を充分に練習せしめて圓熟せしむると云ふことは出來ない、又之を圓熟せしむることを學校教育が期待すると云ふことが考ふべき問題で、即ち可能か不可能かが疑問である、かの實業專門教育に於てすら、此練習圓熟の目的で卒業後一定の期間丈け工場に入つて現業練習をなさしめられて居るのである、況んや普通教育を施す學校の家事教授に於ておやてはないか。

以上は物質的方面に就て述べたのであるが、更に家庭生活の精神的方面から考へても、育兒上に於ける心育と云ひ、愛家の精神と云ひ、家風の維持發揚と云ひ、將た又家人の勤勞清潔秩序及び整頓等の美風と云ひ、皆之れ一家の安全なる生活をなすに必要なる所以てないものはないのである。

之を要するに物質的方面から考へても、精神的方面から考へても、其修得した家事的知能は、やがて之を家庭生活の實際に運用せられて、獨り一家の生活に便にするのみてはなく、其取るべきは取り捨つべきは捨てると云ふ理解的合理的自覺的の處置をやつて、旨目的てない點に於て大に一家の家庭生活を安全ならしむることを得るの

てある。

第二、基礎の知識を家事に應用し、家庭生活に關し研究工夫するの能力を養ふこと

によつて、其生活効果を增大させることが出來る。

研究工夫の心的能力と云ふ點に於て第二の効果は形式的陶冶に屬するのてあるけれども、其結果てある生活効果の增大は實質的陶冶に屬するのてあるから、此所に論ずるのてある、元來此兩者は已に述べた通り互に相關聯するから止むを得ないのてある。

さて觀察力貧弱にして思考力に乏しき人は恰も單一なる器具の如くてあつて、一は一に止まり其活用應化を望むことは不可能てある、之に反して有力なる觀察力を有し思考力を練磨された人は、一を聞いて十を知り百を得て千を望むことが出來る、斯くの如き人てあつて始めて文運の進歩絕ゆることなき社會に處し、よく一家を之に適應せしめ優勝の位置を占めしむることが出來るのてある。

高等女學校又は高等小學校に於ける教科は其數少くはない、今之を其性質の上から考へると、基礎的教科適用的教科應用的教科と云ふ樣にオストワルド流に三つに區別することが出來得るのてある、基礎的教科と稱するのは所謂他教科學習の基礎となるべきものてあつて、數學及び理科てある、前者は數量に關する思考力を練磨し、後者は自然物及び自然現象を研究し、自然科學的文明を理解せしめ其法則及び原理を會得せしむるものてある。

適用的教科と稱するのは、博物の如きものてあつて、其動物教材たると植物教材たると將た又鑛物生理衛生の教材たるとを問はず、基礎的教科に於て得たる概念法則及び原理を、其等の自然物に適用し考察して、始めて之を正當に理解することの出來る教科を云ふのてある。

應用的教科と稱するのは、家事科の樣なものてあつて、基礎的教科并に適用的教科に於て得たる知識を、人生關係に直接に利用せようとする教科てあつて、恰も物理學・化學・數學の如き基礎教科と、動物・植物・鑛物・生理の如き適用教科とから出發して居る、醫學・土木工學・機械工學・採鑛冶金學の樣な位置にあるものてある。

故に家事教授ては、其關係範圍の上から、當然數學理科圖畫裁縫等の教科と相連絡し、修身教育等と其步調を同一にして、此教科を授けなければならないことになるのて

ある、然して其教材取扱上の形式から云ふと、應用的教科必然の結果として、演繹的推理を主とせなければならないのである、由來歸納的推理は基礎教科の主として練磨する所であつて、所謂發見なるものは此思考作用によつて得らるるもので、演繹的推理は應用教科の主として練磨する所であつて、所謂發明なるものは此種の思考作用によりて產出するものである、故に家事教授に於ては家庭の日常生活上必要なる事實を、其教授及び實習によつて會得せしむるばかりでなく、大に此演繹推理の能力を練磨せなければならんのである、斯くの如くにして始めて家庭生活に處したるの時に於て單に學修して來た事實其儘を家事に適用して生活に便にする許りでなく、將來自ら工夫し發明しつゝ生活することが出來て、器具機械の改良、諸種の家事整理の方法の改良をもなすことが容易であつて、從て其生活能率を高め、家庭生活の効果を一層增大せしむることが出來るのである。

(三)形式的陶冶方面より見たる効果

以上第二に述べ來つたことは、觀察推理の能力を練磨したる結果の賜物である、其實質効果に關することは勿論であると同時に、大に形式的に陶冶に關する効果である

ことは、特に茲に斷つて置かなければならないのである、今次に是以外の形式的陶冶方面の効果と見做すべきものを順を追つて述ぶるのである。

第一、家事的訓練によつて、勤勉節儉、秩序、周密、清潔等の良習を養ふことによつて、家庭生活を健全ならしむることが出來る。

吾人の一家は、之を大にすれば恰も一國の如くであつて、上下長幼の別、每日行事、又は年中行事の順序等、整然として亂れない所に道義も行はれ、各人の任務もそれぞれ遂行せられ、勤勉なる所に生氣もあり活氣もあつて、主婦自身がよく一家整理の任務を完ふし得る許りでなく、又家人を率ゐて之を感化誘導することが出來る、又節儉にして無用の費用を節し、有用の資に供用し、廢物を巧に利用することによつて、よく一家の財政を維持し蓄財の餘裕をも見出すことを得て、一家將來の謀を廻らすことも出來るであらう、又清潔の良習慣に依つて衞生上の危險を避け、精神上の爽快を招ぐ等、有形無形を通じて能く一家の衰退を未發に防ぎ、向上發達の形式的素因を建設し、所謂家庭生活をして健全ならしむることが出來るのである。

勤勉、節儉、秩序、周密、清潔等の良習は、獨り家事教授だけが馴致する德目でないことは

勿論であつて、修身は言ふを待たず裁縫の如き理科の如き亦然りである、然しながら家事教授が特に此の方面に關して有力であると云ふのは。

一、其教材は直接に一家整理上必要なる勤勞教科であるとこと、

二、其實習時間が比較的多くして、之を馴致する機會が頗る多い、

と云ふ二つの理由があるからである、故に家事教授が齎らす形式的陶冶の効果は、蓋し大なりと云はなければならない。

第二、家庭生活の趣味を養ふことによつて、意義ある家庭生活をなさしむることが出來る。

一家は旅館や合同宿の樣な一時の便宜上の集合物ではなく、吾人の大切なる慰安所であつて、又人間活動の源泉地である、此點に於て重要なる意義のあるものである、晨には星を戴いて出て、終日世に奮鬪して、夕に月を踏んで歸り來つた疲れ果てた吾人の心身は、此暖かな家庭に入つて慰藉せられ、其疲勞を忘れて、再び來らんとする翌日の奮鬪行爲に向て猛然として驀進するの勇氣を回復されなければならないではないか。

春の花、秋の月、自然は常によく其美を飾りて觀賞を恣まゝにせしめ、手向山の紅葉、春日野の鹿は、行路の人の足を留めしめ、淺茅ヶ原の夕涼は南都數萬の人士を誘ふ、凡て皆之れ自然の美が吾人の趣味を刺戟せるにあらざるはないのである、自然已に然り吾人の一身を投じて其慰安所とし活動の源泉地とする所の一家の生活に於て、焉んぞ何等の趣味なくて可なるべけんやである。

清楚たる主婦の容姿、溫情に富める其言語、誠あるもてなし振り、親しみて失はざる禮讓に接するすら無限の慰藉なるべきに、子女は左右より己を擁して之を慕ひ、己は亦父母に待して終日の世の出來事を述べて其安否を訪ふなど、得も言はれぬ精神的團欒は、實にも計るべからざる威力を以て吾人を慰め吾人を勵ますものでなくて果して何であらうぞ。

床間一幅の掛物、花瓶に挿せる一枝の花、彼は能く云ひ知れぬ幽雅を語り、是は能く清楚の光彩を放つのではないか、塵一つだになく整然と掃除されたる室内に、一家團欒して婦は夫を呼び、子は親を呼びつゝ、心盡しの夕食を共にし、くさぐさの物語に世の憂さを忘る、人世の幸福何ぞそれ大なる、晨に後庭に立てば、露を含める草花のほころ

びたる、皆之れ吾人を慰むる料てないのはない、如露の水之を培かひて仁草木に及ぶ所、子も亦之に倣ひて雜草を拔き害蟲を去る、斯くて一家族相共に家を愛し家を思ふ又樂しくはなからうか。

家庭生活は獨り如上の方面に於てのみ意義あるばかりてなく、主婦の心掛が善良てある結果としては、衣食住萬端の調度其宜しきを得て、家人の健康を增進し、家產を保ち、子女の養育を完ふし、家風の向上する所にも亦無量の趣味を感じ、無限の努力を促すものがあつて存するてはあるまいか、之を思ふたならば、主婦たるべき運命を有して居る者は、常に家庭生活の趣味を養ひ、之に處するの用意がなくてはならない譯てある。

斯くの如き理由に從つて、家事教授は獨り衣食住看護衛生等を授くる許りてなく、其教授實習の間に於て、能く家庭生活の趣味あることを自覺せしめ、之を培養することの價値を認めて、此方面に向ても亦大なる注意を注ぎ、以て家庭生活をして健全ならしむることを企圖せなければならないのてある。

四　効果に對する結論

之を要するに家事教授に於ては、能く其實質的陶冶と形式的陶冶とを完ふすることによつて、知的方面に於ては、

一、家事的知能を修得せしめて、家庭生活に便にし、且一層之を安全ならしめ、

二、基礎の知識を家事に應用し、家庭生活に關し研究工夫する能力を養ふことに依つて、家庭生活の効果を增大せしめ、

又情意的方面に於ては、

三、家事的訓練によつて、勤勉、節儉、秩序、周密、清潔等の良習を養ひて、家庭生活を健全ならしめ、

四、家庭生活の趣味を養ふことによつて、一家を愛し、意義ある家庭生活をなさしめ、よく之を向上發展せしめ、健全なる國家の發達に應分の貢献をなさしむることを得るのである。

我が秋津洲は、一國の單位を一家に取り、歷史的の家族制度を持つて居るのてある、之れ古より家名家門の重んぜられ來つた所以てあつて、個人を單位として居る國家と其趣を異にして居るのてある、例令將來に於て家族制度の形式が國運の發達文物の

進歩と共に多少の變遷があつたとしても、此家族制度の精神は永遠に我が國體と共に動かざる所のものである、忠は即ち孝にして孝は即ち忠なりとし、忠孝一致の大精神は、即ち此本義に外ならないのである、之れ取りも直さず一國の幸福は一家の幸福なる所以であつて、一家の幸福はやがて一國の幸福なる所以である、此意味から一家の主婦たる者よく其本分を自覺して之を實現し、一家を向上發展せしめたならば、之れ即ち健全なる國家の發達に應分の貢献をなす所以の道であると云ふことが出來るのである。

第三章　家事教授の目的

第一節　目的に關する歴史的回顧

已に家庭に對する吾人の態度から出發して、之に適應すべき家事教授の効果を要求したのであるから、吾人は更に一歩を進めて此等の効果を充分に發揚せんが爲に、如何なる目的を追求して努力すべきであるかとの問題に到着せなければならないのである、先づ此問題を解決するの一般の順序として、諸外國に於ける家事教授の目的を

を瞥見して之を概言する必要があると思ふ。

扨て第一篇第二章で、家事教授の歴史的發達に關する回顧を述べたが、其如何なる經路を踏んで次第に發達して來たかと云ふことから考へて見ると、家事教授の目的が如何なる見解を下されて居つたかと云ふことも、同時に窺ひ知ることが出來るのである即ち第一に、

家事は實用的教育と稱すべき所のもので、日常生活に最も適切に應用さるゝ教育を施すべしと云ふ近世的の傾向の一部として實行されたものである。

と見做さなければならないのである、尤も普通教育を施す學校のあらゆる教科を悉く實用的教育視すると云ふのでない、多くの教科の内の一―二を實用視すると云ふのであつて、此實用教科中の一つは家事であると云ふのである、英國の文部省で發行した教育の目的に關する特別報告(Special report on educational subject)と云ふ印刷物中に、次の樣なことが記載されて居る、世界各國に於ける普通教育の目的は、各自の國家の狀況上其要求を多少異にして居る點がある、如何となればこれ等の諸國に於て人間の價値を判斷する要件の一として、斯う云ふ尺度を持つ來るからである

獨國では彼人は何を知つて居るか、

佛國では彼人は何學校を卒業したか、何試驗に合格をしたか、

米國では彼人は何を爲し得るか、

英國では彼は如何なる人であるか、

と云ふのである、實に社會傾向から考へて、教育上頗る面白きことで、之に對して教育上からは種々の議論をすることが出來るけれども、そは本書の問題でないから省略するが、然しながら米國の教育主義は、教育全般に關して何を爲し得るかと云ふ實用主義の傾向を持つて居ると云ふことに、特に注目する必要がある、蓋し米國が斯る必要を感知し、斯る主義を採つたと云ふことに就ては、幾多の源因があるのであるから、簡單に之を說述することは困難ではあるが、米大陸は所謂新世界であつて、歐洲から移住した人民が、此廣漠として肥沃なる且天產物に富んだ國土に住んで、之から新らたに政治を敷き農工漁業に商業に、交通運輸、軍事、教育等あらゆる事業を創始して、歐洲の先進國と對比せなければならないのであつた、出來得る丈け短時日の間に强大なる加速度を以て之を進めねばならないのであつた、之が爲めに凡ての教育は單に社會設備の殆ど完成して居る他の國の樣に、精神的欲望を滿足すれば足ると云ふ譯には行かないのである、大なる手腕家を要し大なる事業家を要するのである、唯に何事かを知るのみでは足らないので、知つて且つ之を成し得る人でなければならない、頃日最近に於ける世界の教育思潮と題して或教育雜誌に斯う云ふことが述べてあつた、米國に於ては、

教育の目的は偶然の結果を去るにあり、

と云ふのである、換言すれば必然の結果を要求すると云ふ事になる、人生の何事でも、偶然に或事が成し遂げられたのでは、再び之を成し遂げることは出來ない、或事情の下に或原因を與へて置いて出來た結果であれば、同一事情の下に再び同一原因を與へさへすれば同一の結果を再演せしむることが出來るのである、此原理を生徒の卒業後に於ける職務職業にも適用して考へて見ると、或る人は卒業後に有附いた職業が、都合よく在學中に學びたる事に直接關聯して居つて、偶然にも好都合であつたと云ふやうなことではいけない、學校教育は凡べて其本人が卒業後に從事せんとする職業に對しての準備に成つて居る樣にし、卒業後社會に出てたる時の彼等の職業は、偶

然てはなく、學校教育必然の結果として之に從事し、其便宜を得るものでなければならないと云ふのである。

斯樣な見地を持つて居るのであるから、家事の如きは勿論であつて、卒業後家庭の人となつた時に、遇然にも學校教育が授けた理科や裁縫が家事整理上用立つたと云ふことを排斥して、家事整理上必然用立つべき樣に授け置かなければならない、之れ特に家事なる教科を設置した所以であるから、家事は宜しく家事整理上必要な實用教育でなければならぬと云ふ議論になるのである、これは米國についての見解であるけれども、家事を實用教科として課すると云ふことは、知識を重んずる獨國でも、資格を貴ぶ佛國でも、人格を敬する英國でも此點に於ては相違あるのではなく、近世に於ける實用教育的傾向の一部として之を採用して居る點は一致して居つたのである、然して他の教科よりは、特別に本科の教授は家庭生活に貢獻して之を善美ならしむる効果を豫期し期待されたのである。

元來學校教育が家事なる教科を採用するに至つたのは、勤勞教科としての手工科の發達に伴はれたものである、即ち當初の目的は男兒に向て手工を要求したと同樣に女兒に向て手工科として包含せしめ得る所の家庭的手藝を課したことに其端緒を置いて居る、實は此種の家庭的手藝に關して、系統的に學校教育が女子を訓練すると云ふことは、望ましきことであるとして一般に認められ、多少免れざる反對は遂に驅逐されて仕舞つて、次第に此教科の發達を促し、本教科の採用に對して次の如き結果の要求を見るに至つたのである。

一、豫防的醫療及衛生を發達せしむること、

二、家庭生活上無益なる勢力の消費を去り、近世に於ける產業的社會的勤勞を願望すること、

三、工業及び職業教育に關して女子も其必要を承認すること、

四、家事的任務の問題を解決すべく企圖すること、

斯くて家事は都市より村落に次第に普及せられ、一方に於ては先覺者によりて研究せられ、他方に於ては政府又は民間の資本によりて助長せしめられて、其內容も亦次第に充實するに至つたのである、當時に於ては世界各國が、十五歲乃至十六歲の子女に授くる家事科の目的は、之を次の三種に概說することが出來る。

一、家庭組織の改良及び家事的仕事と方法とを成立せしめ存在せしむることの經驗的改良を目的とせるもの、;—United states, Great Britain, Ineland, Germany, Belgium, Finlund, Denmark, No-ruway, Rusia,

二、第一の所說の傾向を帶べる家事的任務上の問題の解明を目的とせるもの、;—Sweden, Holland, Aus-tria,

三、將來に於ける職分又は職業の準備を目的とせるもの、;—Flance, Italy, Hungary 及び Belgium. Switzerland 一部、

スペイン、ポルチユガル、グリーキ及びルーマニアの家事科の目的に關する研究は、現今未だ幼稚であつて、實際他の諸國が課して居る内の、一—二の部門に就て授けて居るのみである、それからスキデン、ノルエー、フキンランド及びゼルマニー諸國の家事科の課程に關する事項の發達は、一八八九年英國から多大なる感化を受けたと云ふことが原因であることを斷つて置かねばならないのである、而して叙上の三種の家事の目的は、其到達點が各異つては居るのであるけれども、皆等しく此教科に對して實利主義が唱導せられ、實用的方法が主張されたのである、然しながら特に大なる注目を要することは、等しく實利主義實用主義であるとはいへ、ノールエー、ベルヂウム、ゼルマニー、グレート・ブリテン及びアイルランドの諸國では、其高等女學校の家事は、小學校に於ける家事よりも、理科實驗室に於ける實驗的作業と、家事實習室に於ける技術的作業とを、密接に連結せしめなければならぬ。

そうでなければ、技術は單に盲目的模倣であつて、理解もなく應用もなく發明も工夫もなくなるのであると云ふ考へで、大に努力して此科の教育的價値を向上發達せしめんと企てて居る傾向があると云ふことである。

第二節　教則に示されたる家事科の要旨

(一)要旨を明にするの必要

以上諸外國に於ける家事教授の目的を窺つて來たから、次に我が國に於て如何に其目的を斷定すべきかを述べなければならない、即ち家事教授の要旨如何と云ふことを考へなければならない順序となつて來たのである。

凡そ何れの教科たるを問はず、其教授の要旨を充分明瞭ならしめ置くの必要なることは、今更言を待たずして明かなことてある、特に家事科に就きて其然るを認むる、何となれば、

第一　家事科は其關係する範圍が極めて廣汎てあつて、之が爲めに其教授は屢散漫に失して、要領を得ざるの弊に陷り易いのてある。

第二　家事科は其基礎學科は甚多く、動物學、植物學、鑛物學、生理學、數學、物理學、化學、病理學、藥物學、診斷學、心理學、教育學等て、且之等の學科は比較的新たにして深遠てあるから、家事教師は部分的知識を充分に明瞭ならしむることが極めて困難てある、故に之を統一總合して家事科を組織し建設することも亦極めて困難てある

第三　家事科は之を實際の家庭生活に應用し利用することに依つて始めて其効果を現はすものてある、故に必ず實習を伴ひ之を技術化せしむることが必要になる、然るに已に述べたるが如く、其範圍極めて廣く、且基礎學科の發達に基く理論上の要求と、經驗及び實驗上の勸告とによつて、實習的技能の進歩改良は日々に新たなるの觀なきに非ずてある、故に家事教師たるものは、多くの範圍や部門に亘つて之を研究し會得し練習することは困難なるを免れない。

第四　家事教授の目的に關する異說が多く提出されて、或者は實用主義の方面から、或者は理論主義の方面から、或他の者は人格主義の方面から、各其要求を主張して居る、從て吾人の思想を混亂させるの觀がなきにしもあらずてある。

以上の理由に依つて、家事教授を研究するに方つて、其教授の要旨を明にするの必要が充分にあるのてあると云はなければならない。

(二)教則上の要旨

然らば、最も正當にして穩健なりと考へらるゝ家事教授の要旨は果して如何てあるか、明治三十四年三月廿二日に發布された、高等女學校令施行規則第一章第十條に、

家事は家事整理上必要なる知識を得しめ、兼て勤勉、節儉、秩序、周密、清潔を尙ぶの念を養ふを以て要旨とす、

と示してある、前半は實質的陶冶の要旨を示し、後半は形式的陶冶の要旨を示し、意義頗る明晰にして以て教授者の則とすべきてある。

(三)要旨の解釋

教則に示されたる要旨は、一見其意義頗る明瞭にして解釋上何等の不明質疑の存するものなきが如くである、然しながら凡ての事は一面だけからの觀察では、其眞意を充分に明瞭にすることは出來ないものである、故に反面から觀察し吟味して、其意義を充分に明瞭ならしめて置くことも亦極めて必要なことであると云はねばならない。

第一　家事整理上必要なる知識を得しめと記してあるのは、技術或は技能と云ふことを加へざるの意であるが、將又之をも含めるの意であるか、一體技能は即ち技術の能力のことであるが、家事の整理は一家の實務である以上は、知識だけでは足らない、之を處置する技術的能力を要することは勿論である、然じながら技能として之を併記するならば、技術に對して一定度の圓熟を要求することゝなる、之れ普通教育上過重の要求である、然しながら家事教授に於ける實習其物は、恰も理科教授に於ける實驗の如く、必要缺くべからざることは言ふ迄もなく明かなことである、故に教則に知識と稱するのは、普通教授及び實習教授に依て授くる所の一家整理上必要なる一切の事項に關する知識と云ふことを意味するのであつて、技能をも含めるものであると解釋するのが穩當である。

第二　兼て勤勉、節儉、秩序、周密、清潔を尚ぶの念を養ふを以て要旨とするとあつて、兼てと云ふ語を以て實質的陶冶の目的を示せる部分と、形式的陶冶の目的を示せる部分とを區分してあるが、之れ實質的陶冶を重しとし形式的陶冶を輕しとせるの意であるか、蓋家事教授に於て家事的知識を授くるのは極めて重要であることは勿論のことで、何等の説明を要せずして等しく世人の承認する所であるけれども、普通教育に於ける各教科目と云ふものは、先きにも一寸述べた通り、互に相倚り相助けて所謂人を教育すると云ふ大目的を到達するにあるのであるから、形式的陶冶も亦極めて重要なることであつて、實質的陶冶と敢て其輕重を比較論斷ずべきものではない、兼てとせるは文脈上前後に之を併列したのに過ぎないので、輕重を示したのではない、前後と輕重とを混同してはならないのである。

第三　勤勉節儉云々等を尚ぶの念を養ふを以て要旨とすとある、念を養ふと示してあるのは、是等の心的觀念を養へば足ると云ふの意であるか、凡そ何等の德目と雖も、唯之を知識とし觀念として持つて居る丈けで、之を行爲として表はすでなければ、其効果を奏するものでなく其價値は絶無であることは明かである、故に勤勉、節儉、秩序、

周密、清潔等の德目に關して、一家整理上極めて尙ぶべきものであることを會得せしむるのみでなく、其良習を反覆培養せしめなければならないのである、故に尙ぶの念を養ふとあるのは、吾人は之を尙ぶと同時に之を實行するの良習を養ふの意であると解釋するのが穩當であると考へるのである。

以上は教則上に示されたる家事教授の要旨に就いて、其解釋上世人の疑問となりはせぬかと思考する諸點に就いて、吾人の解釋を記述したものである、依て今之を總合して、最適當であると認むる說明的文言を以て之を記述して見ると、教則上の要旨は次の通である。

家事は其普通教授及び實習教授によりて、一家整理上必要なる事項に關し確實なる知識を得しめ、兼て勤勉、節儉、秩序、周密、清潔の貴ぶべきことを會得せしめ、其良習を培養するを以て要旨とす。

玆に普通教授と稱するのは、一般に基礎の知識から演繹推理の方式によつて會得せしむる教授を指したので、教材の性質によりては、此推理の論證を確かむる必要から、更に實驗に訴へる場合があることは言を待たないのである、實習教授と稱するのは、所謂實習であつて、普通教授に依つて論證し驗證したる事項を、實際の家事的任務として之を技術化せしむる所のものである、此知識を意味して居る教授と、技能を意味して居る實習と、何れが最も重要であるかと云ふことは、屢〻起る所の疑問であるけれども、已に唯今述べたる通り、一方に於て論證し驗證して置て、次に之を技術化させるのであるから、論證及驗證をする普通教授だけでも不可てあり、技術化させる實習教授だけて普通教授が其前提となつて居らなくても不可てある、恰も夫と婦とが同體一味てあるが如く、教授と實習、知識と技能、此兩者は言語上に於てこそ截然たる區別はあれ、事實に於ては川の上流と下流との關係であつて、決して輕重を分つべからざる一連のものである。

現今世界的生存競爭は日に月に激甚の度を高めて來て、平時に於て將た又戰時に於て、其多くは自然科學的の競爭をして居ると見做すことが出來るのである、故に此競爭場裏に生存して、優勝の位置を占め樣とする國民は、是非この自然科學的文明を理解し、之を活用せなければならないのである、然して其活用の方面は種々に之を細別し得べきてあるけれども、先づ大きく國家的生活と家庭的生活との二種に區別する

ことにしたいのである、前者は農業、漁業、鑛業、工業、軍事、交通醫術等を包容し主として男子の從事せる領域に屬し、後者は即ち衣服、食物、住居、看病、其他を包容し主として女子の從事する領域であつて、所謂家事的任務である、故に此任務を分掌する女子は、家庭生活の運用を自然科學的文明に伴なはしめなければならないのである、之れ一家整理上必要なる事項に關して、確實なる知識を授くる實質的陶冶を必要なりとする所以である。

然しながら家事教授は獨り此實質的陶冶のみを以て滿足すべきではない、其知識を運用し齊家の實を擧ぐる爲めに、必要なる勤勉、節儉、調度、秩序、清潔等の良習を養ひ、且凡ての事項に對して理性的の思考判斷をすると云ふ性格が又極めて必要であるから、形式的陶冶と云ふことも充分に考へて、始めて善良なる家事教授であると云ふことが出來るのである。

第三節　家事教授の目的に關する斷案

已に本章第一節乃至第二節に亘つて、歐米諸國及我が國に於ける家事教授の目的に關する各種の見解を叙述して來たばかりでなく、最後に我が國の教則に示された本科教授の要旨即ち目的に對して、穩健なりと思考する說明を加へて來たのであるから、教師諸君は之に依て家事教授の目的に關し一定の意見、一定の立場を見出だされたことであると信ずるのである、故に再び茲に之を論斷することは蛇足に過ぎざる感がある、然しながら議論を整頓して置く上からと、更に附言せなければならない說明がある上とから、次に之を再びするのである。

(一)知的方面より見たる目的

甲、實質的陶冶上の目的

實質的陶冶上の目的は、已に本章第一節に述べて來た歐米諸國に於けるものゝ三種の概括である所の、

一、家庭組織の改良及び家事的仕事の改良

二、家事的任務上の問題の解決

三、職業準備

と、我が國の教則第一章、第十條、前項の前半に示されたる意義である所の、

四、家事は普通教授及び實習教授によりて、一家整理上必要なる事項に關し、確實なる知識を得しむること。

との合計四種の結論に概括さるゝことになるのである、吾人は教育學又は教授法の原理は普遍的なものであるとしても、其實際上の問題は其國の國狀特に現下の事情に適切に合致する、其國に特有な具體的なものでなければならないと思ふ、此の見地から、此等の概括的結論を一應批評して、我が國の家族制の下に立つ家庭生活に適合する實質的陶冶の目的を肯定せようと思ふのである。

第一。職業準備としての家事教授の目的である、之は佛蘭西、伊太利等で認めて居るのであるが、吾人は之に贊成することは出來ない、如何となれば普通教育と職業教育とは全然其目的を異にして居るのであつて、高等小學校や高等女學校の普通教育を施す目的の學校は、卒業した生徒は社會に出て如何なる境遇に其の身を處するかは未定の問題であるから、女子に國家的生活や家庭的生活上須要な普遍的教育を施すのであつて、商業家を養成するのでもなければ、工業家を養成するのでもなく、文人畫工を養成するのでもない、故に生徒卒業後の或る特殊の職業を豫定して、其職業教育を施しはせないのである、例へば理科は產業の基礎を授くるけれども產業其物を教へないのである、同樣に家事は家事的任務に關して知識技能を授けはするけれども、家內職業の爲めに之を授くるのでないのである、蓋し職業教育は普通教育とは異つて居つて、單に職業其物を授けるので、職業家養成であるから國民的性格や女性的性格の馴致と云ふことを中心としては居らないのである。

我國には普通教育を施す學校の外に、別に職業教育を施す職業專門の學校が文政上定められ、又現に斯種の學校が多く設立されて居る、例へば男子が就學して居る方面では、工業學校、農學校、商業學校、水產學校、美術學校、蠶業學校、郵便電信學校と云ふ樣な類であつて、女子に關する方面では、女子農業補習學校とか私設のものでは女子美術學校、女子職業學校、裁縫學校、割烹學校、女醫學校、音樂學校と云ふ樣な類である、是等は全然卒業後の從事すべき職業に對して專門教育を施して居るのである、故に入學する生徒は先づ入學前に自己の將來從事すべき職業的目的を決定して、然る後入學し研究し練習するのであるから、普通教育の學校に入學せる生徒と異つて居る、斯樣な譯であるから專門的に職業教育を受けんと希望する者、職業教育を受けしめんとす

る者は、先づ普通の國民教育を受け終りたる後に、此種の職業教育を施す學校に入學するがよい、又入學せしむるがよいのである、此點に關して吾人は世の普通教育の學校の家事教師、及び普通教育の學校の家事科に對する父兄の希望に對して述べんとする意見を持つて居るのであるが、こは本節に於て述べるよりは、寧ろ第三節家事教授の論點に對する批判に於てするを適當であると信ずるのである。

第二　家庭組織の改良としての家事教授の目的である、之は米國、英國、白耳義等の諸國で唱導する所であるが、之に關して二つの議論が分派する。

其一は家族制度の改良と云ふことを意味するのか。

其二は家庭の管理方法の改良と云ふことを意味するのか。

である、若し前者を意味するのであるとしたならば、吾人は之に贊成することは出來難いのである、何となれば、我が國の家族制度は其由來する所甚遠く、其淵源甚深いのであつて、我が國民性及び國體と密接にして重大な關係を持つて居るものである、假令文運の進歩するに從つて其形式に多少の變遷移動があつたとしても、其精神は決して變るべきでないことは、前にも一寸述べて居つた通りである、孝百行本主義は我が國に於ける道德の美である、子は妻を迎ふれば新に一家を創立して親と別居するとか、親は自己の養老に必要なる財產を取つて其殘餘を子女に分配して各別居獨立させると云ふのではない、相續者は矢張其家に止まり、兩親と同居して、朝な夕なに之に仕へ之に孝養するのである、即ち人間の百行は幼少の時からの孝に始まるのである、此精神が中心と成つて人間の凡ての行ひが統合され、人格が建設されて行くのである、故に女子が結婚すると云ふのは、夫と共に新に一の家庭を造出すのではない、創始するのではない、夫の家に入るのである、夫の家庭に入るのである、即ち嫁入りするのである、斯くて夫の兩親を自己の兩親と同樣に孝養奉事するのである、吾人は文運の進歩發達に伴なつて我國家族制度の形式は或は少しづゝ變つて行くかもしれないと思ふけれども、此精神は決して變ずることがなからうと思ふ、否變じないと信ずるのである、そこで其形式に多少の變化はあるとしても、夫は有らゆる種類有らゆる程度の教育全體の効果として、國民的生活が進歩發達した必然の結果が自然に持來たしたものであるべきで、豈獨り女子教育中の單なる家事教授が我國家族制度の改良など云ふことを論定し企圖し實行さるるものではないのである、此見地から第二

の箇條は其一を意味するものとしては、吾人は贊成することが出來ないのみならず、家事教授の目的を誇大したものて穩健なものでないと信ずるのてある。

然らば後者を意味するものてあるとしたならば如何てあるか、家庭管理の方法の改良と云ふならば、家族制度の根本義には立入つては居らない、此根本義に依て成り立つて居る家庭を、世態の進歩に伴ふてうまく運用することの出來るやうに組織づけ、之を管理する方法の研究と實行とを促すにあるのてある、一體我が國の家庭は、物質的の或る意味ては清潔に整頓されては居るが、其毎日行事、毎週行事、或は毎月行事、年中行事と云ふ樣なことについて考へて見れば、何れの家庭ても之を豫定して規律正しく之を行事して居ると云ふことは云はれない、爲ること成すこと多くは臨機的てある、行きあたりの樣てある、必要が襲ふて來るとか差支が迫つて來たから止むを得ず之を爲し之を成すと云つた樣な風の氣味がある、斯くの如くてあるから、主婦は年中毎日朝から晩まて間斷なく而かも不規律に家事に奔走して居らなければならない、それても尙思ふ樣に整理がつかないので、日毎日毎に仕事に追はれ逐はれて居るのてはあるまいか、そんな有樣てあるから、讀書の餘暇さへ見出すことが出來ず、修養の暇がないばかりてなく、子女の勉學の指導監督や躾に向ける時間をさへ見出されない、吾人は外國てやつて居ることは、徹頭徹尾之を範とするのては勿論ないが、歐米先進國ては、家庭行事が豫め定められてあつて、ずんずん其豫定通り實行されて、讀書の餘暇も子女の監督も充分に出來、其家に雇はれて居る女中家僕の如きは、一定の勤勞時間に、すべき事を全力を盡して成し果し、其他は自由の時間として與へられて居ると云ふことを聞いて居る、其自由時間に自分の希望自分の心懸の如何によりて、讀書勉學をすることも出來、裁縫を習ふことも出來、作法見習をすることも出來るのてあつて、非常に此點は面白く有益てあると思ふのてある、然るに我が國ては、其行事は多く無方針て不規則てあるばかりてなく、其休息娛樂と云ふ樣なことも甚だ不規則て、何時如何なる休息娛樂を家人は取ると云ふこともなく、終日營々として奔命に疲れて居るかと思へば、無制限不節制に茶菓雜談に半日を過ごすと云ふ樣なことがあるのてある、斯樣な有樣が多數てあると考へらるゝ事情があるから、此其二の意味に於て、一家管理の方法の改良と云ふことならば、大に家事教授は之れを研究せしめて、充分有効に時間と勞力とを消費し、一家整理の實を擧げ得る樣にせなければならない

ことを極言するのである。

第三に考ふべきは家事任務上の問題の解決と云ふことであるが、之に對しては何等の異議がない、瑞典、諸威等で主唱されて居ることは前に記した通りである。

第四に考ふべきことは我が國の敎則で示してある要旨中の實質的陶冶の部分であるが、之は歐米諸國で唱導して居る目的の中、職業の準備、家族制度の改良と云ふことが含まれて居らないが、其他のことを概括して抽象的に述べてあるのであるから、異議がないのである、依て次に以上の諸說を總合して、吾人が家事敎授の目的とする所を分類して、其知的方面に屬するものの內、實質的陶冶に屬する箇條を記述せようと思ふ。

第一　家庭其物を理解せしむること

元來家庭なるものの存立には、無形の精神的要件と有形の物質的要件との二大要件が必要なのである、而して此二大要件が適當に調和して行つてこそ始めて家庭其物が正當な發達をなして向上するのである、其前者に屬する要件は主として修身歷史等が之を司り、後者に屬することは理科の基礎の下に主として家事が之を司るものである、斯くして始めて家庭上萬般の事を理解し且つ之を正當に判斷し實行して、所謂健全なる生活が爲し得られる、然るに我が國の家庭生活を見るに、其精神的方面のことと、詳言すれば人と人との交涉に關する精神的關係、換言すれば祖先と自己との關係、親と子、兄姉と弟妹との關係と云ふ樣な方面の道德的要件などは、比較的豐富に比較的堅實に成立つて居るのに反して、其衣食住衞生と云ふ樣な物質的要件の方は遲々として殆ど進步しないので、甚しく缺けて居ると云はなければならない、武士は食はても高楊子との諺の如く、精神の高潔をのみ之れ貴び、食物の如き物質に左右せらるゝことを甚しく賤しんで居つたのである、五斗米の爲めに腰を屈すると云ふ卑劣なる人格は、吾人も亦之を取るを欲しないが、然し一概に物質關係のことをば之を賤しみ之を斥けると云ふことも、精神や意氣だけで身體が維持されるものでなく、而も身體と精神とは相併んで人間活動の根元であることを考ふれば、其誤つて居ることは自ら明になるであらうと思ふのである、又古來我が國の武士の如きは、金錢上のことを知つて居ることを非常に賤しめて居たのであつて、算盤勘定を知らざることを以て誇りとして居た樣なものであつた、當時商人を町人と云つたのであるが、其町人が商

品を持つて來るか或は商店て之を買ひ求めた時に、代價の計算や貨幣の計算などは出來ないから、財囊を投げ出して其内から必要だけ取らせたのてあるが、かゝる有樣てあるから一家の經濟財政など云ふことに腐心して居らないのてある、こんな事に腐心して居ては、精神が腐敗して仕舞ふと云ふのてあらう、蓋し封建時代に於ては、武士はそれぞれに其主とする大名から一定の食祿を受けて衣食の資に供し、何等此點に關しては心配はなくなつて居つて、專意專心武を練り文を磨き以て主家に事ふることを之れ事として居つたのてある、衣食に缺くることがあつては、心を文武兩道に專らにすることが出來難い患ひがあるからてあらうと思はれる、其時代は或はそれてもよいのてあつたらう、然しながら星移り世が變つた現時に於ては、そんな譯には行かいのてある、自からの奮鬪努力によつて自己の最も便なりとする、而して國家社會の最も必要なりとする、一定の職業に從事することによりて衣食の資を求めねばならぬ、而して文武の學事も研究せねばならぬ、家門によりて父の職分位置階級を相續すると云ふことは、一般臣民ては華族の族籍以外には出來ない、士族の如きは名稱のみ平民と云ふのと異つて居る丈けて、實質は何も異つては居らない、故に自からの努力自からの力量に依て職業位置を求めなければならないのてある、之れ即ち生存競爭の激甚となつて來た所以てあつて、亦他方から考へれば、世の進歩し人智の啓發する所以てあるのてある。

兎に角斯樣な譯て、現今に於ては超人間てても無い限りは物質的迫害の外に超然たることは出來ない、精神的形而上的文明の恩澤と、物質的形而下的文明の恩澤との兩方面に活きて居るのてあるから、此兩方面を理解することは國家的社會的生活の上からも、家庭的生活の上からも必要てあるのてある、之れ始めに家庭生活の完全なる存在には、精神的要素と物質的要素との二つがなければならないと前提した所以てある、故に吾人は此家庭生活に關する物質的のことを至細に研究するのと同樣にして、よく之を理解的社會的生活に關する物質的のことを至細に研究することは、恰も國家して行つたならば、其結果は恰も明治維新後から、此大正の聖代にかけて、物質的文明が我國の進運に世界異數の發達効果を持來した樣に、同樣の異數の發達効果を家庭に持ち來すべきてある、之れ家事教授に於て家庭其物、特に其物質的要素の方を新に理解せしむることを目的とせなければならない所以てあつて、之はやがて精神的要

素と相待つて正當なる家庭觀を與ふるに至るのである。

第二　生活に關する利害關係を知らしむる事

家庭其物を理解せしむることが出來れば、次て家庭生活に關する利害關係を知らしむることが出來るものである、凡そ專門の學者として、物理學とか化學とか動物學とか植物學と云ふ樣な、純正な學問純正な科學を研究する學者は、學問其物の爲めに學問するのであつて學理の開拓を目的とするのであるから之を別として、通常普通教育に於て生徒に課する學問はそんな純正なる科學を學究的に課するのではない、物理なり化學なり動物、植物なりを授くるとしても、それ等はそれぞれに物理學、化學、動物學、植物學として授くるのではない理科である、故に他の一面から云ふと普通教育に於ける有らゆる教科は學問其物の爲めに研究せしむるのでなく、直接なると間接なるとを問はず之を人生に利用せんとする爲めであると云ふことが出來ると思ふ、第一に述べてある家庭其物を理解せしむると云ふことも、畢竟家庭の人間生活に裨益する所多からしめんとする爲めである、特に從來有り來たつた又は行ひ來つた家庭百般の事項中には、直接に間接に吾人に不利益なる事や危害を與ふることも少くないであらうし、又多少其處置の方法を換へれば利用の度を增さしむることを得る事もあるであらうし、又新に取り入れて生活上に利用し得る事もあらうと思ふのである、否利用し得ることが實に少くないのである、小さい臺所について其一―二を數へて見ても、食品の選定や料理の方法や配合の仕方などにも、徒に高價を拂ふて其割合に營養的効果の少ない食物を取つて、然かも之を知らずに不利を招いて居ることもあるし、燃料の使ひ方、燃燒裝置などについても一向研究されて居らない、研究されて居るかも知らないが實行されて居らないのか、竈の如きは幾世紀か前より使用し來つた土竈の非學理的で通風口も火床も煙突もない、然して薪の大半は不完全燃燒に終つて烟煙となつて仕舞ふ樣なのが、依然として何等の疑も不安もなく使用されて居ることが多數である、大都市の臺所で石炭瓦斯が使用されて居るとしても、酸化焔、還元焔の何れは最熱が大であるか、鍋の底を焔の何れの部分に觸れしむれば最も多く熱を利用し得るか、通風側口を如何なる程度に開口せしむれば焔の熱度が有利になるか、物を煑るにしても沸騰し始むる迄、即ち沸點に達する迄の焔の大さと、沸點に達せし後單に沸騰を持續して食物を煑沸せしむるための焔の大さとに於て括栓を

如何に加減し調節するのが利益であるかは、臺所を司る人に於て少しも會得されて居らない樣な事實は、吾人の經驗した範圍内で認めらるゝのである。

斯くの如く考へて來ると、獨り臺所の方面許りではない、一般に衣類の方面でも、食物の方面でも、住居邸宅の方面でも、看護育兒の方面でも、個人衛生や社會衛生對家庭衛生の方面でも、一家の管理經濟の方面でも、其取去るべき危害ある不利益な事項や、改良して利用度を高むべき事項や、新に家庭生活に利用すべき事項等が甚だ多いのであつて、つまり炭火を一つ起すにも釘を一本打つにも手拭一筋を洗ふにも、皆それぞれに一定の理屈があつて無駄のない樣に時間と勞力と金錢とを不經濟に費すことなく、然かも其効果が最も多い樣にせなければならないのである、斯樣な譯であるから、此利用的方面のことを理解することにより、家庭生活上非常なる便を得るのみならず、之を安全ならしむることが出來、且吾人の生活効果を增大し、生活能率を高むると云ふ教育的効果を收むることが出來る、之れ第二に生活に關する利害關係を知らしむることを目的とする所以である。

乙、形式的陶冶上の目的

家事教授の知的方面に於ける目的は、其實際に用立つと云ふ實用主義の見地から、實質的陶冶にも主として注目されて居るけれども、吾人は普通教育の一教科目としての家事科と云ふ點から考へて、其實質的陶冶は、形式的取扱が充分であつて始めて有効になるものだと確信するから、其の形式的陶冶を是非とも重要視したいと思ふのである、近時に至りて我が國でも、凡ての教科は其教科に關する知識を生徒の頭腦に詰め込むことをのみ主として勉めた過去の方針や主義の誤りであつたことを自覺して、教育の目的は寧ろ知識其物よりも知識を得る方法を知らしめ會得せしむることが主要なことで、教育上極めて有効なことであると云ふ樣になつた、換言すれば形式的陶冶の教育的効果と云ふことに充分に氣が付いて、教育主義の覺醒を招かんとする傾向を來たして居るのである。

小學校でも、中學校でも、乃至は女學校でも、大學でも、我が國のを歐米諸國のと比較すると、在學中に授けらるゝ教材内容は比較的多くして卒業の際に持つて居る實質的知識の分量は、我が國の卒業生を外國のそれに比べて見ると優るとも決して劣りはせないと云ふことを、世人はよく云ふて居るのを耳にするのである、然し乍ら其割合

に社會に供給された其卒業生は、仕事もせない、創成的發見もせない、學者も出來ない、偉人も少ない、社會百般の文化も彼に後れを取つて居る、之れ果して何の爲めてあるか、其知つて居り持つて居る知識は、教師から、書物から、出來上つた儘、整頓された儘、調理された膳立のまゝて注ぎ込んてもらつたのてあつて、身自ら進んて之を取つたのてはなく、研究したのてはない、故に師の膝下を去れば書物を離れて自ら研究して知識を求むることが出來ないことになる、曾て某教育家が歐米教育事業視察から歸朝されて、次の樣な話をされたことを教育雜誌て讀んて知つて居る、それは外國に行つて小學校の生徒に君は斯う云ふ事を知つて居るかと問へば、知らざる事てあれば、私は未だ研究しませんと答ふるのが常てある、然るに我が國の小學生に同樣の問を發したならば、私は未だ習ひませんと答ふるのてある、研究しませんと習ひませんとの差は、言語上に於てこそ僅てあるけれども、其心的立脚地の上に天壤の差があるてはあるまいか、之がやがて卒業後幾年の後に於て非常な差違を生ぜしめ、其教育効果に甚大の相違を來たさしむる所以てある、吾人は生徒をして習はしむるか將た又研究せしむるか、此點に於て世の教育者諸君と共に大に反省せんと欲するのてある、形式的陶冶の價値は斯くの如くてあるから、家事教授に於ても亦大に此方面を重要視せなければならない、從來の如く單に事實其物を教師から其儘に教へ込まれ、或は譯もなく實習せしめられて居るのてあるから、家庭に歸つて臺所に立つたとしても、各家庭が學校の實習室と事情が違ふから、其事情の違ふ臺所の下に於て何一つ變化適應の妙を發揮することが出來ないことになるのてある、さりとて有らゆる家庭に適用さるべきことを一々網羅し盡して、學校が生徒に教ふることは時間の制限からだけ考へて見ても出來得ることてない、そこて學校ては其基礎になる樣な事項について、例令少數の教材だとはいへ、充分に自から研究せしめて適應自在な心的練習をさせて置かねばならんのてある、之れ即ち形式的陶冶の必要なる所以てあつて、やがては生徒が學校を率へた後に於ても、自ら知れる方法手段によつて研究を進め、文運の進歩發達につれて、家庭を率ひて之に應化せしめて行くことも出來るのてある。

世には自學自習の主義を標榜して、生徒をして自ら學習せしむることを奬勵鼓舞して居る學校が少くないのは實に其當を得たることてあると思ふ、然しながら至細に其自學自習の方法を視察して見ると、吾人は甚だ失望せざるを得ないのてある、特に

家事とか理科とか云ふ、實物又は事實を實驗上の直觀に訴へ且考察を加へて研究し行くべき學科に於て其然るを覺ゆるのである、如何となれば此種の學科は學ぶ人自から手を下して實驗し直觀考察に訴へて始めて會得すべきものなるを、教師自身が之を說明し講義して仕舞つては、生徒は唯鸚鵡返しに之を繰返す丈けであつて、其知能は理解されたものにはならないのであるから、斯る實驗教科の教授に於ては生徒自らの發見し得べき事柄に對しては、教師は一言も之を說明し講義することあるべからずと禁じて居る、それを自學自習だと稱して實驗に訴へて觀察し考察をすることをなさずに、唯結果のみを記述した教科書又は參考書を自ら讀ましめて自習せしむるならば、之れ教師の說明講義によつて耳から教へて貰ふ代りに、教科書參考書の文字文章によつて眼から教へて貰ふことに成つて、其効果のないことは五十步百步の差よりも更に少いのである、故に自らの獨立したる研究に訴へて學び得る樣に導きつゝ、學校の教科目を授くると云ふことは、眞の自學自習の本領を發揮するものであつて、何等の思考に訴へず書籍に書いてあることを讀んで其儘覺ゆると云ふ自習法とは同日の談ではないのである、而して此自ら研究する方法を會得せしむるには、常に觀察推理の心的作用を練磨せしめて置かなければならない、此心的練磨は即ち形式的陶冶であるのである、今次に此陶冶の目的とする所を再說して、更に其効果につきて述べようと思ふ。

第一　觀察力を練磨すること

觀察は心理學上の語であつて、外部に表現せる事物現象を感覺器官の助けに依つて、有りの儘に誤りなく知覺し正確なる知識となす作用である、然るに吾人の感覺には往々にして錯覺と云ふのがあつて、誤りたる知覺をすることがある、故に感覺器官の助けによつて得た知識は、時には信ずるとの出來ない場合がないでもないのである、然しながら觀察の練磨をするに從て、次第に錯覺を避け得る樣になり、從て之によりて得たる知識は次第に其正確度を增して來ることになるのである、勿論事物は考へ樣に依つて異つて來るのであるから、或一派の論者の如く、宇宙の凡ての實在を疑つたならば、何事でも信據することが出來ないのであらうけれども、吾人の信ずる所に依れば正確なる觀察によりて得たる知識ほど信據す可きものはないのである、彼の冥想とか思索とかに訴へて直覺したと稱する知識は、其冥想思索の經路により考へ方

の如何によりて如何樣にも變り得るのである、故に之を基礎として建設さるる學問は、古往今來一貫した定論を生じたことがないのてないか、哲學、美學其他の形而上學は一般に此種に屬するものてある、然るに事物現象の直觀の上に建設さるる學問は、其直觀にさへ誤謬がなかつたならば千古不易てある、極めて卑近な例證を引いて見るならば、物理學が發見して居るエネルギー不滅則や、化學が結論して居る物質不滅則の樣なものてあつて、過去及び現在てはエネルギーや物質は之れを創成し又は消滅せしむる事は不可能て、此法則が信實てある、將來に於ても亦無より有を生じ、有を無に歸せしむることが決して絶無てあらうし又絶無てあると斷言することが出來るのてある。

斯くの如く觀察から出發した知識は極めて信ずべきものてあるけれども、時には誤つた錯覺を來たすことがあり、之れが練磨によつて次第に避くることが出來るとしたならば、吾人は勉めて此觀察の練習をなして此錯覺を避くることをせなければならないのてある、元來何れの覺官ても練習せなければ正確に鋭敏に働くものてはないが、練習をすれば非常に鋭敏に正確に働きをなすものてある、例令ば熟達せる化學

實驗家てあると、常人には殆ど同一の臭ひだとしか感ぜざる臭氣ても其差違を臭ぎ別けたり、其道に勘能な色染家や畫工てあれば、素人には全く同一色相としか見えない色の調子を明に見別けたり、熟練せる音樂家てあれば、素人には其高低强弱の區別の判明せざる音聲を容易に區別したりするのてある、之れ獨り上記の場合だけに然るのてはなく、家事的事實についても亦同樣てあつて、衣服、食物、住居、看病等一切の事項は主として觀察から出發した理法から之を處理する知識を得るのてある、其衣服食物の鑑定識別の如き、住居の適否の觀察の如き、病人の容態觀察の如き皆それてある、之を大體から考へて來ても家事は主として基礎學科としての理科の應用てあるから、理科と同樣に觀察に訴へずしては、一として是等の知識技能を得られないと云ふてもよいのてある、然るに女子の觀察力は非常に鋭敏にして精細てあると云ふ人があつて、又正に然るともあるけれども、吾人の知る所ては、其觀察は或局面に限られてあつて、且甚しく粗雜なるものあることを嘆ぜざるを得ないのてある、例令ば他の盛裝せる婦人と街上に行き違ふ際に、素早く其着て居る衣服が何種の織物てあつたか、半襟が何てあつたか、下駄は何うのと見定むるのてあるけれども、それは世の多く

の婦人の常に得んと欲して懊惱して居る服裝に關聯した事項だからである、如何なる婦人でも四六時中絶えず苦心して居るのは衣服である、衣服化粧なくては夜も日も明けないのは過去に於ける其常態であつた、故に此小局面に限つて幾年幾十年の間常に其感覺器官が練習されて居るのである、その練習された部分の觀察だけを見て、他の方面の觀察も亦同樣に鋭敏で精細であると推定するのは未だ早計である、吾人は多年の間理科教授及び家事教授に從事して居つて、種々の直觀材料を提供して居るが、常に其觀察の粗雜なることを嘆じて居るのである、如何云ふ風に粗雜であるかと云へば、第一は表面的であつて、第二は部分的に偏して居る、第三は靜的であることである、表面的であると云ふのは其觀察が外形に表はれて居る色彩と云ふ樣なことに止まつて居て、其實質が何うであるか、其物理性は如何、化學性は如何、將た又生理學的、衞生學的、美學的に何うであるかと云ふ風に、內省的に同一事物を各方面から觀察すると云ふことが不得手である、單に其外面の一を觀察して滿足して居り、進んで內面的に觀察する考へすら餘り起さない場合が少くないのである、衣服の例で云ふと立派な縮緬の何色であつたと云ふことは素早く見定めるが、さて其縮緬が鶉か、小波か、壁か、金紗かと云ふ樣な點や、色彩にしたならば其コントラストや表情の如何、さては模樣にしたならば其意義の適否と云ふ樣な方面の觀察はあまりやらないのは普通である、部分的であると云ふのは其觀察が部分部分に分かれて居つて、さて其部分的觀察を總合して全體として之を觀察すると云ふことが又不得手であるのである、住居の例で云ふと玄關の間は何疊敷で、客室が何疊、居間は何疊、茲は書齋に適し、彼處は小兒室と云ふ樣なことは非常に達者に觀察するのである、然しながら大體から見ると、此家の品位は果して自家に適確なるものであるか、恒風に對する關係如何、さては建築用材は如何、基礎工事は如何であるか、此方面の水派は何うなつて居るか、然らば水質は如何、されば全體から見て此家は品位上、衞生上、經濟上斯うであると云ふ樣な概括的觀察をすることが意外に拙ないことを發見して居る、靜的であると云ふのは、觀察は事物の靜止的方面に限られて其活動的方面に亘らない嫌があると云ふのである、一體事物は悉く靜物ばかりでないのみならず靜止して其用をなすものではない、其用をなすには多くは動的方面に於てなすものであるが、此動的方面を觀察することが割合に拙ないのである、假令ば家具として箪笥を選定する時に、重ね箪笥で體

裁がよいとか、鋏板が桐てあるとか、側板が何てあるとか、さては抽手が銅てある、價額が割合に高いとか安いとかは、觀察もし吟味もするけれども、其錠前は果して完全に動くか、抽手がガタガタせぬか、抽出が滑に動く樣に製作されてあるか、裏返しにさし込んても周圍に隙間なく嵌まつて滑動するか、等の動的條件に注意して觀察することなくして、其良否、適、不適を速斷すると云ふ傾向があるのてある、斯樣に大體から云ふても三通の缺點があるのてあつて、世の所謂女子は一般に觀察が鋭敏て精細だと云ふのは、單に日常腐心して居る衣類の方面や他人の顏色を觀察して其心情を讀むと云ふ樣な事に限られて居ると云ふ患がある、依て吾人は一家の整理を依托し吾人の身體を容るゝ一家を任かせる主婦としての家事を授くるに當て、先づ大に其觀察力を凡の方面に正確に働き得る樣に之を練習せしめなければならないのてある。

吾人は觀察を正確ならしむる樣に練習させると、獨り正確なる知識を得るの根元となるのみてなく、此練習によりてやがて凡ての事を輕々しく判斷し信據するの弊を避けしむることが出來るのてある、元來家事教授は實際の學問てあるから、書物を離れて研究する時ても、書物について研究する時ても、乃至は教師其他の說明指導を受けて研究する時ても、一々之を實驗に訴へて驗證をし、又實習に訴へて技術化せしむるのてある、其何れの場合たるを問はず、實驗實習に訴へて調べて見たことが、書物に書いてあること又は教師其他の說明と正しく一致して居る時に、始めて成る程と之を信ずるのてある、勿論家事は實際の教育てあるからとて、あらゆる家事的事項を悉く學校系統の家事教授に於て之を取扱ひ之を實際に照らして研究させ調べさせると云ふことが出來ないのてある、即ち家事上遭遇すべきあらゆる事項に關して限りある時間內に課する學校教授が一々之を實驗實習に訴へて學ばしむることは不可能な事てあるから、第三篇家事教材論て述べる樣な標準の下に選定して、少數の教材に就て斯種の研究をさせ、何等實際に訴ふることなくしては妄に他人の言ふことや、書物や文章に書いてある事を信じない樣な習慣を養ふのてある、尤も他人の言ふことを信じないと云ふ習慣は時によつては不都合なことがある、假令ば教師の說明や兩親の言はることを信ずべき場合の樣なものてある、故に此種の場合には直に眞てあるとして信ぜしむる樣にせなければならないのてある、けれども妄りに他人の言ふことや書いてある事を盲目的に信ずると云ふことは、日本人の著しき通弊ては

ありはしまいか、之れ東洋流の學問研究法が然らしめたものてある樣に思はるるのてある、蓋東洋の學問と云へば我が國の明治維新前の學問を考へて見てもすぐ判ることてあるが、學問と云へば殆ど全く倫理道德の學問てあつて四書五經さては女大學の書てある、是等の書は孔子と云ふ大聖人が其基礎を大成したのてあるから、後世後輩は唯其敎を遵守し其道を祖道するのを以て本分としたのてある、曾て根本的に之を研究して之に疑を挾み異說を立つると云ふことをすれば、直に異端の敎へとして斥けられて仕舞ふのてある、哲學的方面の佛敎の敎への如きも同樣てある、從て絕て新しい方面の研究と云ふものを見る事が出來なかつたのてある、然るに明治開國維新後になつて、諸外國からの刺戟によつて猛烈として起つた多樣多種の學問、其內に自然科學や適用科學や又之を應用した應用科學の如きもあるが、之等一切の學問に對しても我國人は經書の學問の仕方其儘を當て嵌めて、其書物に書き示してあることを讀んて講釋をして、之を其儘に信ずると云ふ風なのてある、之は今から二十年も前の話てあるが、著者は縣の師範學校を出て小學校に奉職した時のことてあるが、同僚の或る古い敎師が、理科を受持つて居たから、一度其を引繼ぐ前に其授業を參觀したのてあつたが、さて其授業の仕方は何うてあつたかと云ふと、先づ理科の書物中にある難字難句を板書して其讀み方と意義とを授けて然る後書物の素讀を課し、然る後之を講義して聞かせ、更に二、三の生徒にも之を繰り返させて講義せしめ、授業を終つたのてある、敎員室に歸つてから該敎師は說明して曰く、理科の授業もやはり讀書の授業と同樣にしてうまく行きますとの辯明てあつた、之は甚しき極端な一例に過ぎないのてあるけれども、我が國に於ける過去の學問の仕方の傾向を表はした著例てあると見ることが出來るのてある、兎に角古人先哲の書いて呉れた書物が、唯一の信據すべき金科玉條てあつて、之を讀解すること以外に學問の仕方が無いと信ずる樣に成り來つたのてある、歐洲に於ても昔時は矢張り同樣の誤謬に捕はれて、眞理は古書にありと信じ、希臘の古典や羅馬の舊書を讀むことを以て唯一の學問としたのてあつたが、十六世紀の後半に至つて、フランシスベーコンの出づるありて歸納論理の法を大成し、學問は自然より學ばざるべからずと喝破するに至つて、茲に始めて自然界の觀察が起つて、遂に現今の如く進步せる自然科學を產み出すと同時に、其應用より成れる有らゆる應用科學を見るに至つたのてある、吾人は今に至つて東洋に

一のベーコンがなかつたことを終世の怨とするのである。

之を要するに觀察を立脚地とせない學問に、正確にして信據すべき學問がない、觀察を主とせざる人によりて偉大なる千古不易の科學的發見をせられた事はない、觀察的知識に基礎を置かずして蓋世の發明をなした例はないのである、之に依りて考ふるも家事教授に於て先づ觀察力を練ることが極めて必要なりとする所以を理解し得ると思ふ、蓋し家事教授を觀察に訴へ、之れから出發して進むと云ふことは限られたる時間内に多量の知識技能を注ぎ込み得る方法ではない、併しながら確實なる知識技能を附與する根柢であつて、之に依て始めて家事研究の方法をも會得することを得て、自らの發明工夫をもなすことを得るのである。

第二　思考力を練磨すること

實驗上の觀察より得たる知識は、正確なれども個々獨立して相互に内部必然的連絡を有しては居らないのみならず、其因果關係が明でない、故に此連絡關係や因果關係を明かにして、觀察的知識を相互に一連のものとして系統だけ組織立てしめることが次に必要に成つて來るのである、此系統づけ組織立てる爲めに考察に訴へて思考を加へなければならないのである、斯くの如くして始めて其知識は活用さるゝやうになるものである、例令へば木綿絹毛織の種々の奇麗な立派に染色された織物や布片があつて、其織維の性質や組織の技術や模樣の圖案配色、さては染色法に至る迄一點の非難すべきものがない樣なものを吾人が持つて居た所で、何等吾人の日常生活に働きをなさないではないか、之は羽織に適し、之は袷に適し、之は襦袢に、之は帶にと、それぞれに考察思考を加へて衣類に仕立上げた所で始めて之を着用することが出來るので、其働きをなすのと同樣である、斯くの如く考へて來ると、觀察の必要なる所以は思考に其資料を供給するが爲めであつて、觀察力の練磨をするのは思考力練磨の準備として必要であるとも云ふことが出來るのである。

思考の形式は、之を歸納的推理作用と演繹的推理作用との二種に區別されて居るのである、前者は個々の知識即ち觀念から其共通して居る部分を抽象して來て、其等の觀念群に共通して居る普通的觀念即ち概念を構成する作用であつて、自然科學では此概念が往々にして自然界の理法や法則となるのである、後者は概念又は理法法則と云ふ樣な一般觀念を、特殊な一事實に當て嵌めて之を解釋し說明して行く作用て

ある、即ち一は個々の觀念から一般觀念の判定に進み、一は一般觀念から個々の事實の說明に進むのである、而して前者は科學上の發見を產み出し、後者は應用上の發明を產み出すのである、斯の如くであるから、歸納的推理は之に依て新に概念や法則を造り出すことが出來る、所謂發見的研究法であるし、演繹的推理は概念とか法則とかを造り出し得ないけれども、已に有つて居る概念法則を非常に明瞭ならしむことに向ては大なる價値があるのである、故に此兩種の推理的思考作用を充分に練磨するでなければ、創作的仕事や發明的仕事をすることが出來ない譯である、元來我が國人は模倣には非常に巧みであると云はれてある、明治維新後に於て廣く海外の學術を取入れて其後れたる文明を進めて先進國に追付かんとしたが、其爲めには此模倣と云ふことにも力を入れなければならない、依て模倣に巧みであると云ふことが此點に於て大に用をなしたのである、故に或る意味から云へば現今の我が國の文明は、模倣的文明であるとも云ひ得ないことはないのである、模倣に巧みな實例などは幾つでも列擧することが出來るのであるが、其最近に於ける一事實を記して見ると、英國に輸出して居る玩具である、此玩具は以前は英國では殆ど全部獨國から輸入して居つたのであるが、戰亂勃發以來其輸入が杜絕してしまつたし、又國內で之を製造することも出來難い事情がある、そこで英國當業者から獨逸玩具の見本を送つて我が日本に其の製造模倣方を依賴して來たのであるが、我が玩具製造業者は御手の內の仕事であるから、早速それを引受けて模倣製造をなして其需要に應じたのである、其製品は少しも獨國製と異ならない、品質から外形から價額から殆んど全く同一である、それで現今は英國では獨國からの代りに全部日本から之れを輸入して居ると云ふことが、或新聞に記載してある、斯樣にして我が國人は模倣することは頗る銳敏にして巧妙であるが、自ら獨創的に仕事をすると云ふことは甚だしく拙劣であると云はれて居る、成る程我が後れたる文明を歐米の先進國に追付かしむる必要のある時代は、此銳敏にして巧妙なる模倣力で間に合ふたのである、然しながら追ひ付いて扨て步調を併べてこれから先き新らしき文明を開拓して進んで行くには、是非この歸納演繹兩推理の練磨が充分に出來た、所謂發見的で發明的である研究法を會得して居る國民でなければ成らないのは明かなことである。

飜て考ふるに、歸納的推理は主として基本科學に屬する學問が練習する所のもので、

演繹的推理は主として應用科學に屬する學問が練習する所のものである、故に理科の如き教科は、歸納推理の練習を主として勉めて居るが、然らば演繹推理は何種の教科が之を練習せしむるかと云へば、即ち家事は最も之に適して居ると云はなければならないのである、如何となれば此教科は基礎科學の理法概念を日常の家庭生活に適用し演繹して、之を解決することを以て其特色として居るからである、吾人は一方に於て理科の如き基礎教科に於て大に歸納推理の思考作用を練磨させると同時に、他方に於て家事の如き應用教科に於て大に演繹推理の思考作用を練磨させ、以て模倣時代を去つた吾が文明を創作時代に引き入れなければならないのである、幾百千年前からの窯が黒烟を吐きつゝ其形骸を依然として臺所に存して、現今も尙其儘に使用されて居るとか、米の飯に馬鈴薯の副食品を食つて安んじて口を拭ふと云ふ樣な情けないことでは、焉んぞ此猛烈なる生存競爭弱肉强食の世界列强の間に介在して、よく其使命を完うすることが出來るであらうか。

之を要するに家事教授は、其特色として演繹的推理を練磨することにより、他教科がなす歸納的推理の練磨と相俟つて、大に發見發明の工夫をなしつゝ生活することを得せしむるにより、獨り家庭に於ける生活効果を增大せしむるのみならず、國民的生活の生活能率をも大に增大せしむることを得るのである。

(二)情的方面より見たる目的

吾人の精神作用は知情意と云ふ樣に別々に心理學では考へて居るけれども、それは研究上の便宜に出づるものにして、實際は互に相關連して働くのであつて始めて用立つのである、衣食住に對して斯くあるべし斯くせざるべからずとの知識を持つて居ただけでは其効果を奏するものではない、成る程面白い是非斯うしたい、斯くするのは自然であると云ふ感情が養はれなければ之を實現する意志がないので、死んだ知識たるを免れないのである、所謂教育的興味が養はれて居なければ實質的陶冶の目的も完全になし遂げられるものでない許りでなく、其實行を見ることも出來ないのである、故に知的方面の陶冶をやると同時に、情的陶冶をやると云ふことは、家事教授上非常に大切なことであると云はなければならないのである。

第一　勤勞、節儉、秩序、周密、清潔等の良習の情を養ふ事

道德的良習は先づ其道德的情操を養ふことによりて馴致せらるゝものである、家事

は其教授及び實習に於て、特に其後者の場合に於てよく勤勞、節儉、秩序、周密、清潔を貴ぶの道德的情操と、其良習慣とを實際に訓練馴致することが出來るのである。

第一に勤勞であるが、如何なる事業を遂行するにも勤勞に訴へずして之を成し遂げ得るものはない、座して帷幄の内に大事業をなすと云ふ經營企圖に關する參謀事業であつても、極端に云へば精神的勤勞である、況んや家事整理に關する百般の任務は一として身體的勤勞に訴へずして爲し得るものは無いのである、若し之を身體的勤勞に訴へずして爲し遂げんとするならば、徒に机上の空論たるに過ぎないものになる、家事的任務は口舌の仕事ではなく、筋肉的仕事は其大部分を占めて居る、衣服の裁縫は勿論の事、綻び一つ綴るにも、ハンカチ一つ洗ふにも、シャツの釦一つ着けるにも、野菜一つ切るにも、凡て勤勞の結果に依らずんば得られざる事である、故に一家の主婦たるべき者は、其知識を實現せんが爲に、此勤勞をよくせなければならないのである、例令婢僕を召使ふ身分の家にありても、主婦自らが能く勤勞なるに非ずんば、其婢僕をして能く勤勞ならしむる事を得られやうか、況んや身自ら其子女を率ゐて之を感化せし訓陶せんとするに於ておやである、然らば家事教授は如何にして此貴ぶべき勤勞の良習を養ふことを得るかと云ふに、修身科に於けるが如く懇篤なる教師の教訓に依て之を養ふのでない、衣類の洗濯整理、食物の料理、家内の掃除、器具の手入、看病救急等の實習に於て、不言不語の間に之を養ふことが出來るのである。

元來女子は其幼少の頃より家事に興味を有し、家事的遊戯をなして喜び遊ぶことは、讀者が自己の經驗又は見聞に依つてよく熟知せらるゝことであらう、未だ御下げ髪の幼兒が近隣の友と日陽暖かき春の日に、若菜を摘み取つて庭先の樣に座し、或は炎暑燒くが如き夏の日に綠葉陰涼しき庭上に跪座して、手元あやしげに小刀にて之を切りて料理に擬し、友と我と或は客となり或は主となりて、所謂飯事をなし、食事終れば更に洗ひ方の遊びをなして半日を過ごし、或は人形の衣裳を縫ひ、或は洗濯の眞似を演じ、湯浴をなさしむる等は、何れの地如何なる家庭の子女と雖も殆ど同樣なるものありて存するのである、故に家事教授は此等の本能を沒却し度外視することなく、口より耳に傳へて教授する多辯多口の講演的教育者たることを避け、此の顯著なるよく好む所の本能を利用して、益〻之れを發揚助長する樣にせなければならないのである、一體世間の學校では家事教授を理論と實習と云ふ名稱で二つに別けて居る、此理論

と稱するは微頭徹尾自然科學が認めて居る理論てはなくて、家事整理の方法を說明して居ることが多いのてある、理論は方法の外に別に存するのてある、此意味に於て理論と實習と云ふ樣な名稱て二つに別けることは甚だ穩當なことてはない、或る理法から演繹的に家事問題が論證さるる、そこて其方法手段が決定さるる、次てい彌、此論證的決定が誤りがないか何うかを實驗的に證明する、理科教師が理科の證明的實驗をすると同樣の方法て驗證するのてある、予輩は之を理論教授と云はずして普通教授と前章以來云ひ來つたのてある、已に驗證上確定されたことは直に之を實習に訴へて技術化せしむるのてある、之れ即ち實習教授てある、驗證は實驗室的操作てあつて、ビーカー・フラスコ・試驗管を用ふるが、實習は家庭の實際的操作てあつて鍋・七輪・洗濯盥を用ふるのてある、曾て或る舊式な家事的頭腦に捕はれた教師は、如何なる立脚地からてあるか、此傾向を防遏せんとして、家事教授にビーカー・フラスコを輸入するに至つては世は已に終はれりてあると云ふたのを聞いたが、其言や甚だ不可思議なりと云はんよりは、寧ろ家事教授に對する見解の誤れるを思ふて憐むべきだと云はねばならない、而して此普通教授と實習教授とは結んだ一の連鎖てあつて、決して引離すべきてない、又引離し得るものてないと信ずる、故に何曜日の家事は普通教授て何曜日の家事は毎週實習てあると云ふ樣な區別をして、日課表を定むべきてはない、必要な教材てその論證や驗證に二時間かゝれば第一次と第二次とは普通教授になつて來るのてある、而して第三次に於て實習教授に入ればよいのてある、之を技術化せしむるに四時間を要するならば、第三、第四、第五第六次は凡て實習教授にすればよいのてある、此點に關する詳細は更に方法論に至つて大に講究せんとする所てある、兎に角通常の場合に於ては普通教授が實習教授の前提てあつて、實習教授が普通教授の結果てあるのてある、已に前にも述べて居つた樣に、外國に於ても理科實驗室に於ける操作と家事實習室に於ける操作との間に、密接なる關係を持たせなければならないと云ふ理由は茲に存するのてある、然しながら幼稚な生徒に對しては始めから一々普通教授によつて理論的推究をやつて、實習に移ると云ふことの出來ない場合がないてもない、かゝる場合に於ては先づ其本能とも稱すべき幼少より喜んてする家事的作業を課して其結果から方法手段の將さに然る可き所以を理解せしむがよいのてある、能く之を喜び能く之に親しむが故によく之を知らんとする念も生ずる

譯てある、兎に角何れにしても非常に興味を有する所に依て導かれ行く間に、其勤勞の尙ぶべきことが不識不知實習によつて堅く強く深く養成せられ行くのてある、斯くの如くにして業を卒へやがて家庭の人となりたる後にありても、能く身を家事に盡して自ら家人婢僕を率ゐて勤勞の模範を示し、以て一家整理の實を擧ぐることが出來るのてある。

第二に節儉である、凡て實驗上に現はるゝ現象や實習によりて得る結果の良否は、其實驗材料又は實習材料の分量が極めて大切なものてある、洗ひ晒しの白布が帶べる微黃赤色を餘色の原理て打消して眼立たざらしめんが爲めに、ベレンスの青色溶液て青味つけをする時に、ベレンス量が適度てあれば恰も純白色てある如く仕上ぐるのてあるが、誤て或は無定見に其過量を用ひたならば、白布が青味勝ちのものになつて、他の純白な物と比較した時に甚だしく眼障りがするのてある、故に少量づゝ水に加へては染め、染めては加へて適度に達して之を止めねばならぬ、硫酸銅の溶液にアンモニア水を滴下する時に、適量を加ふれば水酸化銅の綠白色沈澱を生ずるが、若し一時に多量を加ふれば生ずべき沈澱が直に過剩のアムモニア水に溶解して水酸化銅アムモニアの錯鹽溶液を造るから、沈澱を認むることが出來ない、凡て實習ても實驗ても、之を用ふる材料は常に其の分量に過不足なき樣に用量を注意するのてある、故に常に此種の實驗實習によりて訓練されたる生徒は、使用する材料を過度に費すと云ふ樣なことを決してせないから、節儉の美德が自然に養成せらるゝのてある、少しても不注意に其使用量を過ごす樣なことがあれば、所要の結果は表はれて來ない、自然に虛りはない、口頭の辯明は時によりては、如何樣に曲げても一時を糊することがなし得ないてはないけれども、實驗上の結果は寸毫も之を許さない、許さないから之に注意する、之れやがて節儉の美風を馴致するのてあつて、千萬言の口訓に優る敎育てあると云つてもよいのてある。

第三は秩序である、一家整理上秩序は極めて大切なるものてあるが、我が國の家庭は如何てあらうか、一家長幼の序と云ふ樣な道德的方面のこと、特に其個人道德に關することは歐米諸國人に比しても遜色がないと迄云はれて居る程發達して居るが、毎日行事毎週行事或は毎月又は年中行事上の定め、若しくは之を實行する上に於ける時間の定めと云ふ樣なことは如何てあらう、一家三人の家族てあつたと假定して、朝

起き出ててより各其本業に從事すべく出掛ける迄の三人の仕事と云ふやうなことが秩序正しく行はれて居るてあらうか、假令ば家族一同は五時半に起床する、かくて一同洗面を終れば主婦は炊事の世話にかゝる、主人は運動の爲め庭に水を撒いて掃除をなし、終つて書齋に入りて當日の新聞紙の主要記事に眼を通す、長女は髪を櫛つて後、室内掃除等をなし、七時に終つて一同朝食、七時半主人と長女とはそれぞれに出勤出校す、主婦は八時より一時間書齋の掃除をする以下省略、之は著者の知つて居る或る家庭の實例てある、一家の事が整然と定まつて居つて、爲すべきことが片端からずんずん實行されて少しの停滯がないと云ふことは實に愉快なる極みてある、著者は學生時代には長く寄宿舍生活もし卒業後には軍隊生活もしたのてあるが、寄宿舍の制度は殆ど陸軍式てあつたから、此寄宿舍生活から軍隊生活にかけて非常に嚴重な規律的生活を繰返したのてある、衣服を疊むにも一定の寸法に據らなければならぬ、靴を磨くも外出をするも自習をするも、皆それぞれの定まりに依つたのてある、況んや起床食事等の時刻に於ておやてある、斯くの如く毎日毎週同一のことを繰返して多年生活したのが習ひ性となつて業を卒へ兵役の義務を果たして自宅に歸つてからも、在學中の規律的生活は決して取り去られない、其規律を亂すと不愉快て不安て仕方がないのてある、朝は寄宿舍起床時刻てある五時半には何時も目が覺める、夜は九時半の消燈時刻になると自然に眠りを來たす、夕食後は必ず一定時間丈け讀書に耽けらなければ、床に入るも心に安んぜざる所あつて熟眠することが出來ないと云ふ樣な習慣は、本日迄も依然として持續されて居るのてある、元來規律の正しいと云ふことは、非常に人生を愉快ならしむるのみならず、其業務を進捗せしめて其活動能率を大ならしむるものてあるが、日本人は概して此規律秩序と云ふ方面にあまり注意しない、一定の時刻に開會すると云ふ豫定の會合があつたとしても其時刻迄に集合せない、午後の六時に夕食を饗しますと云ふ招待を出しても、七時か八時頃にやつて來ると云ふ樣なのが多く見る實例てある、勉强時間だとしてあつても專心に無我無心に之に心力を集注すると云ふことをせない、從て休息時間になつても休息運動等をなすことをも出來難い、仕事を爲すてもなければ爲さゝるてもない、こんなことて事業成績の擧がるものては決してないのてある、時間は金なりとは一面の眞理を喝破したるものてあるが、我が國人の或る種の人には、眞に之が理解されて居らな

いのは實に遺憾なことゝ云はざるを得ないのである。

自然は秩序を違へず、春は花を開き、夏は綠葉繁り、秋は果實を結ぶ、水は高きより低き流れ、燕は春歸り秋來る、其間寸毫の相違あることなく、一絲の亂るゝ所あるなしてある、自然に從ふ物は榮え、自然に逆ふものは滅ぶとは自然の一大制裁にして、進化論が道破せる所の順應應化の一大鐵案である、宇宙の微、自然界の一物として生を保つ吾人は、豈此規範を脱出して其存在を完ふすることを得られやうか、試みに現今世界に其覇を稱する列强國と衰頽振はざる老弱國とにつきて、其國民的生活の秩序ありや規律ありやに一度心を潛めたならば、思ひ半ばに過ぐるものあるてあらう。

實驗及實習は、自然の一小轉寫である、混沌として進行して止まざる自然現象の一部を引拔いて、實驗室又は實習室に、特別の裝置特別の操作の下に之を出現せしむるものである、故に非常に嚴正なる順序方法を以て之を操作せなければならない、其條件の一つを缺くも結果は現はれない、其順序の一を前後するも現象は破れて仕舞ふのである、自然の順序と自然の條件とを寸毫も取り違ふる事なく、秩序正しく操作せなければ、何一つの實驗、實習も其正當な結果を認め得らるゝものではないのである、又實驗用具、實習材料の整頓てもさうてある、當然あるべき位置に或る一定の秩序の下に整理されて居るてなければ、必要に應じて容易に之を取ることが出來ない、其所在を探つて居る間に時期を失して仕舞ふのてある、殊に化學的變化現象の進行中てあつた時などは、其現象の進行に注目しながら、兼て定めて置かれてある位置から、容易に且安全に其必要な器具材料を手探りて取上げらるゝ樣に、秩序よく整理されて居る樣に訓練して置くことに、絶えず指導者は注意を拂つて居る、故に此等の實驗實習によりて慣らされたる者は、よく秩序づけられ、規則づけられ、眞面目な結晶形を有する性格になつて來るのてある、予輩は此種の性格を便宜上自然科學的性格と云つて居るのてある、家事教授は實驗及び實習を課する機會が甚しく多いのてあるから、此自然科學的性格を陶冶することが充分に出來るのてある、即ち秩序と云ふことに對して良習慣を馴致すると同時に、秩序の大切なことに對する非常に有力な信念を會得せしむることが出來るのてある。

第四は周密である、實驗又は實習に訴へて研究する學問は、其實驗中に表はるゝ變化及び其進行、幷に一の條件を入れ換へたる時に、結果に及ぼす影響等を至細に注意せ

なければならない、而して實驗實習に取掛かるゝ前に、材料や用具や及び實驗實習の裝置の組立や、其順序等を豫め非常に周到なる細心なる熟慮を以て之を準備しなければならないのである、一旦實驗實習に着手せし後に於て、思ひ掛けぬ不用意の爲めに裝置の不備を發見し、材料の缺けて居るものがあつたりするならば、全然其實驗實習が失敗に終つて、始めから新に準備を再び之れを遣り直しせなければならなくなることは少くない、此點に於て均しく直觀推理を特色するも、單に自然物を研究するに止まる博物の樣なものと大に其趣きを異にする、如何となれば一は自然物を觀察するにあれども、之は變化現象を觀察するにあるから大に實驗的でなければならぬからである。

處世上の事は、其生涯を通じて凡て周到緻密なる考慮の下に用意せらるゝことを要する、此方便を利用して不可ならば彼の方便に依らざるべからず、此方法にて成し得ずんば、彼の方法を採らなければならず、此順序て不適當なる時は彼の順序に據るを要すと云ふやうに、丁度戰爭に於ける參謀官の作戰計畫の樣なものてある、此生涯の處世的作戰は一通りの注意ては所期の結果を見得るものてはない、精密の上にも精密なる、周到なる上にも、周到なる注意を拂はなければならない、家事上に就て考ふるも、單に衣食住の供給に關してのみならず、育兒にも經濟にも考ふれば考ふる程周密なる用意を要する、殊に吾人の周圍には常に吾人を襲はんとする有害の敵があつて、絕えず隙間を窺つて居るてはないか、曰く傳染病毒、曰く有毒植物、曰く有害動物、曰く有害或は有毒瓦斯、更に眼を轉ずれば、曰く不良青年、曰く社會的誘惑と、殆ど數ふるに暇が無い、之等に對して相當の防禦の方法を講じ、絕えず周密なる注意を以て警戒するてなければ、一家の安寧幸福を企圖し得るものてない、故に主婦たる者は勤勞て節儉てある外に、又周密なることを要するのは明かなことてあるが、家事教授は此念を養ひ此良習を訓練するに甚だ適當な教科てあると云ふことが出來る。

第五は清潔である、一家の仕末に清潔の美風の大切なることは云ふ迄もなきことてあるが、兎角知識階級に屬せざる者は眼に見ゆる程の大さの塵埃汚物は、我が國人の特性たる潔癖から能く之を掃除することを怠らないが眼に見えざる物は之を度外視する、かの庭園の手入家屋内の掃除、乃至は身體の手入沐浴等は殆ど歐米人の驚嘆に値するほど、清潔に絕えず手入れをするとの評てある、之れ我が國人の長所てあつ

て大に之を助長補導するの必要がある、然しながら其清潔は多くは肉眼的範圍に止まつて、顯微鏡的細菌學的でないことを大に遺憾とするのである、衛生的に考ふるならば肉眼に見ゆる樣な大きな塵埃汚物よりも、肉眼に見えざるものに甚しく吾人の恐るべき害毒物のあることは多いのである、戸障子に附着せる或は茶飲茶碗に附着せる或は用水に流れ來れる傳染病毒の如き、或は施肥の關係上野菜に附着し居る寄生蟲卵の如き、或は肉類中に潜む患のある各種の有害菌の如き皆其例である、是等は如何にして消毒し得るかを知つて居らなければ、一家の安全と健康とを維持することが出來ないのである、故に吾人は肉眼的な物理學的清潔の潔癖ある長所を助長し、一歩を進めて顯微鏡的な化學的清潔を尙ぶ潔癖者たらしめたいのである。

さて實驗上に現はるる現象は、其器具材料等は極めて清潔にして痕跡だも不潔物、不純物があつてはならないのである、若し化學的の操作であつたとすれば、痕跡の不純物、不潔物の爲めには、全然起る反應が異つて來るのである、反應が異なつて來ては研究の目的を達することが出來ない、勢ひ清潔でなければならない、故に化學實驗者の如きには非常に潔癖者が多いのである、否な潔癖者が化學實驗家となるのでは無くて其學問が潔癖者たらしむるのである、家事實驗や家事實習の如きも實に此方面の訓練をなすに最も多くの機會を見出し得るものであつて、決して他の化學實驗などに劣らない、故に掃除の實習を課するとしても種々の道具を使用して室內の石鹼洗ひ曹達洗ひなどをするが、其掃除に依て室內が清潔になつたと同時に、掃除用具も亦最後に極めて清潔に掃除され整頓されなければならない、時とすると室內其物丈けが實習教授の目的である樣に考へられて、それが濟めば掃除用具の如きは無責任に汚れたまゝで取り散らして置かるることがないでもないのであるが、甚だ誤まられたやり方と云はねばならぬのでないか、斯樣な譯であるから、正當なる家事教授にあつては、充分に清潔の念及び其道德的良習慣を實行の上に於て養成することが出來るもので、又之を養成することを勉めねばならない。

第二　家庭生活を愛するの情を養ふ事。

人類發達の徑路に就て考へて見ると、衣食の供給を受くる物に對して先づよく之を知らんことを勉むるものである、太古自然界から衣食の供給を其儘受けて居つた時代には、其自然を十分に能く知らんことを勉めたのは即ちそれである、人間の一生は

人類の開化史的段階を縮小して繰返すものであると云はれて居る、故に現今に於ても例令其形式に於て變化はしても、やはり同一原理の規範を脱出することはなく、其衣食の供給を受くる所の家庭を十分によく知らんとするのは當然のことであると云はねばならない、十分に知らんとするには十分に之に親しむ必要がある、即ち家庭を十分に知る爲に其家庭に十分に親しむのである、親しむが故に尙一屬深く之を知らんとする情も起り、同時に之を愛するの情も亦起るのである、學友にせよ朋友にせよ、永く交際してよく其人と成りを知るに至れば、よく之に親しみよく之を愛するに至るものである、家に飼ふ猫や犬の如きてすら、朝夕之に親しんで居れば非常に之を愛するに至ることは世人のよく熟知して居ることで、自己の食事を分ち與へ、夜間は自己の夜具内に寢ねしむる人さへあると聞いて居るのである、善く之に親しむものは善く之を愛するものなりとは實に之を謂ふたのである。

家事教授は家庭内凡百の事項に關してよく之を知らしめんが爲に教ふるのであるから、自然に家庭其物に注意し之に親しむ樣に成つてくることは當然である、從て其結果として家庭生活と云ふことを興味を以て一層研究し、大に趣味を感ずるに至るべきである、家庭の暖か味を知らずに下宿生活のみをなし來れる樣な者は家庭の趣味を知らない、幼少の時より孤兒となつて養育院の樣な所に育てられた者も亦同樣であるが、一度家庭を組織し家庭生活をなせば直に家庭の趣味を十分に解して來るものである、況んや幼少の時より順境に其身を處し、家庭に人と成り小學校の教育を受けて、高等小學校に入るか或高等女學校の教育を受けると云ふ幸福な者が、更に家事的教育を受くるに於ては大に其趣味を感じ大に家庭を愛するに至るべきは理の當然である。

然るに世には家庭を持ちながら、家庭生活を嫌ふて家を外に遊び暮らす種類の人や、或は家事的任務を放棄して社會的活動をなさんと試みて居る類の人もあつて、而かも其は高等女學校の家事教授を受けて居るのも無きにしも非ずである、然しながら之等は或特殊の事情に制せられて居るのであつて、之を以て一般を律する事は出來ないのである、同じ庭園に多くの櫻樹を植付けても、大多數はよく生育し成長し春は爛漫たる美花を梢に飾り、夏は味ひ甘き實を結ぶは普通である、然れども多數の櫻樹中には特殊の事情によりて空しく枯死するものはないてもあるまい、この特殊の結

果を以て一般を否定することを許さないのである。

斯くの如くであるから、家事教授は能く家庭に親み、家庭生活に對して津々る趣味を感じ之を愛し之を向上せしめて、能く家庭の本領とする所を發揚するに至るものであると云ふことが出來る、同時に一家の向上はやがて國家の健全に應分の貢獻をなすものであると云はなければならないのである。

第四節　家事教授の論點に對する批判

第二章家事教授の教育的効果及び第三章家事教授の目的に就きて詳論し來れる所に依つて、家事教授の効果と目的とは明かになつた譯であるが、さて此効果を收めんが爲に、此目的を追ふて家事教授をなさんとする時に、如何なる點に最も重きを置く可きであるかを充分に考へて置く事が極めて大切なる事である、如何となれば其効果並に目的には實質的方面と形式的方面とあつて或者は實質的陶冶に重きを置く可しと主張し、或者は形式的陶冶が却て必要なりと叫んで居る、又實質的陶冶を主張する人にも、家事教授は恰も理科教師が理科教材を教授するが如く、須く理論的なるべしと稱ふる者もあり、或は之に反して家事教授は理論の教科にあらず徹頭徹尾實用主義たる可しと論述する者もあつて、其何れを主とすべきかは未だ決定せられざるの觀ありて、家事教授者の頭腦を混亂せしめ居るの患あるが爲めである。

(一)實質的陶冶か形式的陶冶か

家事教授は家庭の實務を授くる教科である、衣服、食物、住居、看病及び育兒、養老、經濟等の實際的任務を教ふるにあつて、觀察推理の如き心力の練磨は、數學、理科の如き學科で充分に成し遂げ得らるゝことなるが故に、家事教授は其知的方面中特に實質的陶冶を重んず可きであると主張する一派があるが、之に對する他の主張は、家事整理上の實務は其の事項極めて多くして、高等小學校又は高等女學校等に配當された限りある少數の時間内には到底之を授け得らるゝものでは無い、よしや之を教へやうとするも、生徒各自の家庭はそれぞれ事情を異にし且つ卒業後に於ける彼等の境遇の變化は豫定することが出來ない、依て如何なる境遇にあり如何なる事情の下にあるも遭遇すべき凡ての事項を盡して之を教ふることは不可能であると云ふことになる、故に寧ろ基礎となる樣な事項のみにつき授けるに止めて置いて、觀察思考の心力を

それらの事項につき練磨せしめ、他日の事情境遇に應じて任意に之を處置し得る樣な知識や技能を授くるのはよいてはないか、此點から考へると形式的陶冶を主とすべきてあるとの主張は即ち他の一派てある。

元來實質的及形式的の二方面の陶冶は、決して別々に引き離して行はれ得るものてはない、一の教材につきての教授作用を表裏兩方面から見て名づけたものに過ぎないのてあつて、實質的陶冶の目的を充分に有効に爲し遂げんとせば、觀察推理の思考を藉りて之れを充分に研究練磨せしめなければならないし、形式的陶冶の目的を充分に收めんとせば是非實質的知識を材料として之れを吟味させなければならないのてある、即ち形式的陶冶を離れて實質的陶冶の實を擧ぐること能はず、又實質的陶冶を離れて形式的陶冶の目的を果すことは到底不可能なことてあつて、此の兩者は恰も車の兩輪の如く鳥の兩翼の如きて互に相離るべからず、其の一方のみにては車としての働きや鳥として飛行が出來難いのと同樣に、家事教授としての任務を完ふしたものとは言ひ得られないのてある、然しながら此兩方面の陶冶は其一方のみを過重視して他の一方を輕視することが出來るものて、現に一方のみに注意して他方を忘れた教授の行はれて居ることがあるのてある、即ち過去に於ける我國の教授の方法は多くは此種に屬する方法てあつて、實質的陶冶のみに重きを置いてあつたと云ひ得る、蓋し少數の時間内に出來得る丈け多量の知識を授け終らんとせば、生徒をして觀察とか思考とかをせしむると云ふやうな、廻り遠い觀のある方法を取らずして、教師の方から豫定の事項を豫定の順序て滔々と說明し去ればよい、生徒は單に受け身の位置に立つて恰もパノラマの如く走馬燈の如く、應接に暇なく機械的に之を聽きながら、ダイプライターの如く之をノートに筆記して居ると云ふことになる、而して其ノートは徒に之を暗誦するに止まるの結果となるのてある。

吾人は前にも已に其例を述べてあつたのてあるが、我が國の學校の卒業生は、其卒業する時に持つて居る知識の分量は、其の正確の度と云ふことを別問題として、歐米各國のそれと同等の學校の卒業生に比して多いと云ふことを常に聞いて居る、つまり在學中に教へらるゝ教材及其内容の分量は非常に多いと云ふことになる、成る程著者も種々の報告書や教授法の書物などを取り寄せて調べて見ると、小學校ても、中學校ても、我が國のそれと比較して見ると、歐米諸國のは甚しく其教材の數は少いこと

とを發見する、等しき時間數內に配當されてある教授題目數が少いのである、之は教授の方法が違ふからであるが、兎に角少いと云ふことは事實である、高等の大學教育については調べて見ないけれども、矢張同樣であると云ふ事を外國から觀察を終つて歸朝された人の話で能く聞いて居る、然らば多くの分量の知識を持つて居れば果して卒業後世に處する上に於て、それに比例して用立つものであるか働きをなすものであるかは次に起る問題である、然るに現代に於ける歐米諸國の文物の進歩と、我が國のそれと比較すると大なる差があることは誰も否定することは出來ない、彼の文明は主として獨創的の發見發明であるのに反して、我の文明は主として摸倣なるか或は少しく之を變化したに過ぎない發明が多いのに見ても知られるのである、勿論少數の學術を專門とせる學者專門家にありては、醫學に理學に天文學に、世界的の大發見が發表されて居る事實も我が國にあるけれども、一般國民の傾向はさうなつて居らない、國民の發達は少數の專門家のみによりて存在せらるゝものではない、國民全體がさう成つて居らなければならないものである、斯くの如き差違を生ずると云ふのは果して何に基因するであらうか、卒業して社會に出る船出の際には、却て多量の知識を持つて居るに拘はらず、彌〻船出して社會の波間に進むに至つて其の用をなすことが劣つて居るのは、結極有する知識其物は活用をせないのと、持つて居る知識其物を基礎として他の未知の事項を類推研究することを知らないのとによると斷言せざるを得ない、教育が斯る結果を招くのは實質的陶冶にのみ重きを置きて、其形式的陶冶を度外視したと云ふ傾向が、自然に招いた當然の結果であると言はざるを得ないのである。

之を他の方面より考ふるに、明治維新後開國進取の國是によりて我が國は世界異數の進歩發達をなしたのである、文に武に農工商漁業に交通運輸業に皆然りである、就中物質的文明の發達は、世界各國をして驚嘆せしむるに値するものがあると云はれ、亦自らも信じて居つたのである、實に其通りであつて、吾人國民は其恩惠に浴して偉大なる幸福を享受して來つたには相違ない、然しながら歐洲の大戰亂の勃發以來、我が國も亦聯合國に加盟して海に陸に戰鬪に之れ勉むるに至り、東西兩洋の通商貿易は殆ど杜絕の有樣を呈して輸入品の大缺乏を招くに至り、特に化學工業品の一大沸底を來たし、市價未曾有の暴騰を來たしたるのみならず、全く求むるに品なく困難其

極に達して居る物すらあるの聲をさへ聞くの悲しむ可き現狀を呈して居る、燐寸の如きは一打三錢五厘の市價を有して居つた奈良地方では、開戰以後赤燐の缺乏より次第に騰貴して三年を過ぎざる間に一打五錢より五錢五厘を經て、大正五年二月始めには六錢と稱するに至り三月始めに於ては八錢を拂はざるべからざるに至つたのである、著者が奉職して居る學校の化學教室で實驗材料に使用して居る藥品や硝子器の如き凡てそれである、例へば鹽酸加里の如きは平時一磅純品九十八錢通常品四十二錢であつたものは、通常品ですら大正四年末に至つて一圓五十錢位に騰貴し、剩さへ品切れの狀態を呈し、醫師の如きは含嗽劑として非常の困難を感じて居ることを耳にして居る、同じく家事教室で使用して居るシバブリューと稱する建染々料は、平時に於て2Bの記號の物は一斤七圓五十錢であつたのは、大正四年末に於ては二十六圓と云ふ高價を呈して居るのであつたが、日一日に騰貴して殆ど價額不定であるのみならず品切れであるかも知れないのである、是等は僅に數例に過ぎないのであるが、多くは其類であつて殆ど皆同樣である、斯る狀態であるから、我が國に於ては化學藥品、醫藥品さては染料の製造等を盛に起す必要があつて、其起業又は奬勵の聲が非常に高いのであるが、其内の數種が已に成功されて居るけれども、多數の物質は未だ俄に之を製出するの幸運には至らない、特にコールタール染料に至りては現今の處では殆ど先望せざるを得ない有樣である、議會では此等の奬勵補助費に關する法案も成立つた樣であるから、今後に於ては或は成効するかも知れない、否な必ず成効することを希望して止まないのである、此過去から現在に至るまでの有樣から云へば、我が國の是等の教育機關も相當に備はつて居て、專門家も相當に社會に供給せられて居たに拘はらず、一向發達しては居らなかつた、勿論過去から現在までは輸入品で間に合ふたからだとの辯明もあるか知れぬけれども、國產奬勵の聲はずつと以前からあつたのに、今に之れが製造し得ないと云ふことは、獨り輸入の關係からばかりではなく、又資本問題原料問題等のみではなく、頭腦手腕の問題は大に之に關係して居るとして吾人教育者は反省せざるを得ないのである、換言すれば自から進んで研究する方法に於て吾が國人が概して缺陷があると言はねばならない、此自ら研究し自ら發見發明する方法を知らしむる心的態度は實に形式的陶冶の目的で追求する所の觀察又は推理の心的練習にありて存すると云ふことが出來る、斯樣に考へて

來れば、之れ獨り社會生活や國民生活に關する事ばかりでなく、家庭生活に於ても亦同樣に考へねばならない、故に

家事教授は單に知識技能を授くるを以て目的とすべきでない。

との結論に達せざるを得ないことゝなる。

然らば家事教授は知能の實質教授以外に如何にすればよいのであるか、之れを外國に例に徵するに、先に目的の條に於て述べたるが如く、諾威、白耳義及び獨乙、英國では理科教室に於ける理科實驗的作業と、家事教室に於ける實習的作業とを密接に結び付けるといふ教へ方である、理科は自然物を觀察して主として歸納的推理によりて結論を發見せしむる樣に導いて居るから、其結論其概念を基礎として家事は之を家庭生活問題に演繹して解決する樣に導けばよいのである、此解決をさせる爲めには家事上の事實を生徒に提供して、或は精細に觀察させ或は冷靜に思考させたりせなければならない、其教授の實際は後篇に於て評論するのであるけれども、兎に角理科教授と家事教授とは互に結び付けられて、一連一帶の關係的仕事となる樣にしたいのである、斯くの如くするには家事教師は恰も理科教師が理科教材を取扱ふと同樣の主義方法で、家事教材を取扱ふことを要するのである、斯く論じ來れば吾人は

家事教授の方法は形式的陶冶を重んじ以て生徒をして家事研究の興味を生ぜしめ、且其研究の方法を會得せしめなければならない。

と結論することになる、然しながら教材の實質を離れて空に形式的陶冶を行ふことの不可能なることは前述の通りである、故に其教材の實質を取扱ふ際に此目的を達するのである、故に又其教材は實質的陶冶上充分の價値を發揮するものでなくてはならない、換言すれば形式的陶冶は家事上如何なる性質の教材を取扱つても成し得らるゝものである、即ち實質的陶冶上充分の價値を認め能はざる教材でも成し遂げ得らるゝものである、然るに吾人は家事教授は、形式的陶冶と實質的陶冶とを輕重の別なく車の兩輪の如く考へて兩目的を到達せんとするのであるから

家事教材は實質的陶冶上の價値を充分に發揮し得るものを選擇せなければならない。

と絶叫するのである、斯くの如くにして吾人家事教授に從事する者は、始めて實質的陶冶と形式的陶冶とを互に相調和せしめて、其目的に到達することが出來るのであ

る、著者は先きに家事衣類整理法を公にするに當り、此主張の下に該書を組立て、其序文に於て之を記述して置いた筈である。

(二)理論主義か實用主義か

家事教授上實質的陶冶主義と形式的陶冶主義とに次ぐ第二の論點は、理論主義と實用主義とである、前者の主張は家事教授は矢張り普通教育の一教科であつて人を教育するにあるから、職業教育がなす如く實用的の仕事のみを機械的に授けて之を練習せしむと云ふのでは不可である、此科の教育的價値を向上せしめ發揮せしむるには之を理論的に取扱はなければならない、理科教師が理科教授をなすが如く家事教材を取扱ふべきである、然して實習は其理論上の結論の證明に過ぎないのであつて、理科教授上に於ける證明的實驗に相當するものであると云ふて居る、然るに實用主義者の主張する所によれば、學校の家事は机上の空理空論に過ぎない、二年間家事を課せられて居るが、米飯すら一度も立派に炊くことが出來ない、味噌汁すら適當の加減をなし得ない、大根を漬けさせても菜の葉を漬けさせても、女中にすら劣ること數等であるではないか、我が國家庭生活上必須の事項に關して斯る有樣であるに拘はらず、やれビーフステーキだとか、オムレツだとか、名も知れぬ西洋料理などをやつて、牛肉を大根でも使ふ樣に切り捨て、卵や牛乳を湯水の樣に使つて居る、然かも其料理は本人である娘の外は家族中誰も食する者はない、斯くの如き非實用的の事を教へらるゝよりは、實際我が國の家庭に用ひらるゝ事項について、實用上の事を教へて貰ひたきものである、學校を卒業したら卒業した價値が充分にある樣に、女中になども笑はれざる樣に練習させて貰ひたきものである、我々は其子女に裝飾的教育を施さんと希望しては居らない、然るにかゝる狀況であつて、卒業後母が再び家庭に於て實用的の教育のやり直しをせなければならぬことでは、甚だしく遺憾なりと云はざるを得ないと云ふのである。

吾人は理論主義者の主張するが如く、理論一點張りであつて、實習の如きは理論の證明に過ぎないとの見解に全然同意する事が出來ない、實習は勿論技術の圓熟を期すると云ふことは不可能のことではあるが、理論の證明は吾人が先きに述べたる驗證であつて實習ではない、實習は技術化すると云ふ意義を持つたものであることを此種の主張者に警告したいのである、さればとて實用主義者が主張する如く、何事も唯